
貴女に捧げるクローバーハーツ

らく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴女に捧げるクローバーハーツ

【Nコード】

N2401K

【作者名】

らぶく

【あらすじ】

英名は傀儡師^{バベッター}。和名で傀儡師^{くくつし}。

幻糸^{げんし}と呼ばれる見えない糸を紡ぎ、手も振れずに万物を操る異能力者。理を操作する操り人と、古い書物にはラスボスクラスの紹介がされてはいるが、それは過言極まりないことだった。

操れるものなどヒトを模した人形くらい。それも調子がよければの話であり、大抵の場合は失敗に終わる。ほかの傀儡師がどうかは知らないが、少なくとも工藤美咲^{フジミ}は失敗することのほうが多かった。そんな美咲の前に人形が現れた。Yr-03アキト・ユル・イチ

イ。 現行の自動人形、第6世代人形を越える第7世代人形創幻系列
試作機オートマタ（ジープテ マリオネット テストタイプ マギ） 通称
【創幻人形マキノイド】の試作機として造られたアキトは、社会適応テストの
ためハウスキーパーとして工藤家に訪れたのだ。
美咲とアキトのドタバタ生活は、こうして始まったのである。

プロローグ（前書き）

初投稿の作品です。

いたらぬ部分等あると思いますが、動物園のパンダでも見るような眼で、見てやってください。

プロローグ

この下にお母さんがいる。

足元の階段を覗き込んで、工藤美咲はゴクリとのを鳴らした。

道場の床下に隠された扉より始まる地下への石段は、闇に吞まれて終わりが見えない。

あたかも魔界への道。モンスターがうようよしているダンジョンの入り口。

『入ってはいけない』と母の注意を思い出し、美咲は帰ろうかと考えたが、すぐに顔をぶんぶんと横にふって消した。

あたしはお母さんに会わなきゃいけない。会ってクグツを見てもらうのだ。

これは試練。お母さんのようなりっぱなクグツシになるための試練なのだ。きつと。

お母さんはこの奥にいる。お母さんに行けて、あたしが行けないはずがない。たぶん。

揺らぐ決意を、なけなしの勇気で奮い立たせた美咲は、装備の数々（かずかず）を確かめた。

右手には懐中電灯、左手には木刀。非常食のお菓子とジュースが満載してあるリュック。

そして、ポケットの中には人形。

かんぺきだ。これならどんなモンスターがきても大丈夫。

気合を補充した美咲は、懐中電灯のスイッチを入れ、へっぴり腰で石段を降り始め、

「なにやってんの、美咲？」

耳元で囁かれて、美咲は悲鳴を上げて逃げ出す。

「ちよ、あぶないわよ！　そこ滑りやすいの！」

切迫した声に「えっ？」と思うと姿勢が崩れた。

足が石段を踏み外す。美咲の体は闇の奥へと落ちていった。

目を覚ました美咲が見たのは母　美紀恵みきえの顔だった。
ポニテールにした栗色の髪にぱっちりとした鳶色とびいろの瞳。

お母さんが、自分を覗きこんでいた。

「大丈夫、美咲？」

頭はちよつと痛くて、ぼんやりとしたが、大丈夫とうなずいた。

「そう、よかった。起きられる？」

もつ一度うなずき、美咲は膝枕をされていることに気づいた。

後頭部こうとうぶから感じる温もりが心地良く、ずっとこのままでいたかったが、お母さんに迷惑をかけてはいけない。寂さびしく思いながらも体を起こした。

「ホントに大丈夫みたいね」

美紀恵はほつと胸を撫なで下ろすと、打って変わって厳きびしい顔を美咲に向けた。

「どうしてあんなところにいたの？　ここにきちやいけないって、いつも言ってるわよね？」

美咲は薄暗い部屋を見渡した。

コンクリートの壁と床。低い天井。そして、部屋を埋め尽くす無数の人形。ここは地下にある母のコーボーだと気づいた。

「答えなさい、美咲」

「あ、あのね……」

息を飲んでから、美咲は言った。

「み、見てほしいの」

「なにを？」

「クグツ。あ、あたしのクグツ、見てほしいの」

発声はっせいにつまずきながらもなんとか言い終えると、自分の人形を取り出す。

ポケットから出てきたのは、人形とも言えない人形だ。

親指サイズの木片と木片を、糸で繋げただけのもの。アルプスか

どこかの山中にある土産物屋の隅っこに、埃を被って放置されているような、できそこないの民族工芸品こつげいひんのような人形だった。

そんな人形とも言えない人形を床に置いた美咲は、人形の背中人間でいうと背骨せほねの辺りから伸びる糸を両手で握り締めた。そしてまぶたを下ろすと、囁ささやきを始める。

「あたしはうたう、もぞうなるきよぐうのこえを。もしたなれ、つくりしあるじのねがいをきけ。もされたなれ、のぞみしあるじのねがいをきけ……！」

囁ささやきが終わると始まるのは怪異かいい。

美咲の握った糸の先、座っていた人形がピクリと震えると立ち上がったのである。

「やった……！」

恐る恐ると目を開いた美咲は、喜びの声を上げた。

「ほらほら！ 見て！ できるようになったの！ クグツができるようになったの……！」

美咲の心に同調どうちょうするよう、人形はバンザイをする。駆動装置アクチュエータなど

持たないはずなのに。

一部始終いちぶしじうを眺めていた美紀恵は、丸くなった目で美咲と人形を何度も交互に見遣みやる。

信じられない。そんな表情を浮かべ続ける美紀恵だったが、やがて感嘆かんだんの息を吐いた。

「驚おどろいた。あたしが初めて傀儡くわいに成功したのは、中学のときだったのに」

「ねえねえ！ すごい？ すごいでしょ!？」

興奮した様子で袖そでを引っ張る美咲に、美紀恵は微笑んでみせた。

「ええ、すごいわ。がんばったのね」

「うん！」

満面まんめんの笑みで美咲はうなずくと、目を輝かせて訊いた。

「これでここにきてもいいんだよね！ お母さんといっしょにクグツシになるんきよーしてもいいんだよね!！」

「傀儡師になる勉強……？」

「お母さん、言ったよ。いつかいつでもクグツに成功したら、コーボ
ーでクグツになるためのべんきょーを教えてくれるって！」

「……あー、言ったわねえ」

認めたものの、美紀恵の表情は固い。腕を組んで悩む。

「でもまさか、こんな早くできるなんて思わなかったし……どう
しようかしら」

「……ダメ、なの？」

「うーん ま、いつか」

表情から固さを取り除き、笑顔に変えて言った。

「いいわ。教えてあげる。でも、傀儡師の道は険しいわよ？」

「うん！ あたしががんばる！」

「よしよし」

美紀恵は美咲の頭を撫でると、名案を思いついたようにピンっと
人差し指を立てた。

「そうだ。傀儡が成功したごほうびに、ひとつだけお願い事を聞い
てあげる」

「おねがいごと？」

「そうよ。なんでもいいのよ」

「なんでも」

「なんでもよ。欲しい物があるなら買ってあげるし、食べたい料理
があるなら作ってあげる。ママはわりとなんでもできるのよ」

「ホントに……ホントになんでもいいの？」

不安そうな顔。そうよ、と美紀恵が言うと、美咲は一転して顔を
明るくさせ、

「ならね、あたし、あたしね」

願いは七年たったいまでも叶っていない。

第一章 我が家に人形がやってきた。

家事というものは時間を食う。とにかく食う。

敷地面積六六〇平方メートル。そのうちの半分を使った武家屋敷
つばい家で行う家事ならば、食われる時間は長きにわたる。それを
学生という身分で行うのだから、気を利かしてくれてもいいんじゃないかと思うのは、自分のわがままだろうか。

「頼むよ、工藤」

学校からの帰り道、ボブカットの髪に細い眼を持つ幼馴染の伊予
裕子が、かれこれ三〇分以上も、しつこく頼みつつけていた。

「顔を出してくれるだけでいいんだ。道着の上から防具をつけて、
面か胴か小手が喉当てを、竹刀で攻撃してくれるだけでいいんだ。
二本ほど」

「言わない。それ、顔を出すだけって言わない」

無視を決め込んでいた栗色の髪を腰まで伸ばす少女 工藤美咲
は、思わず反応してしまった。

活発そうな少女である。身長は高く、乳白色の制服からスラリと
伸びる手足は健康的。鳶色の瞳は常に自信に満ち溢れているが
いまばかりは、失敗の念に彩られていた。

かわいい、というよりも凛々（りり）しい美咲の顔に後悔が表れ
るのとは正反対に、裕子の顔に笑みが浮かんだ。

「ようやく反応してくれたね。ひどいじゃないか、無視なんてさ」
「……あんたが何度も何度も同じ頼みを繰り返すからでしょうが」
「何度も何度もしつこくねちつこく続けるのは、説得の基本だよ」
「それ、脅しか嫌がらせって言わない？」

「ただ頼んでいるだけさ。もっとも、首を縦に振ってくれるまで続
けるつもりだけど」

「新聞の勧誘か、あんたは」

「悩まされているなら、工藤の代わりに対応してあげよ。出費なしで洗剤一ダースを取れる自信がある」

「あんたなら、マジでできそうよね」

口の達者な幼馴染を見てため息を漏らした美咲は、少しだけ譲歩することにした。

「練習試合だっけ？」

「出てくれるのかい」

目を輝かせる現役女子剣道部主将に、美咲は釘を刺しておく。

「話を訊くだけよ。それで、いつなの？」

「五月の連休明けの日曜日。碓井学園とだよ」

「連休明けって、テスト前じゃないの。ムリに決まってるわよ」

裕子は首を傾げた。

「問題でも？」

「テスト勉強よ、テスト勉強。あんた、学生の本分を忘れてる」

「工藤は直前に慌てるタイプじゃないだろ」

「このところ勉強ができてないのよ」

「なにかあつたのかい？」

美咲は顔に渋みを入れた。

「先週、使っていない部屋の片付けをしてたら、ポカしちゃってね。」

障子をやぶっちゃったのよ、それも全部」

「相変わらず不器用だね」

「うっさいわね。慣れてないだけよ」

言っても、裕子の表情は変わらない。手で口元を隠して笑っている。

美咲の顔はますます渋くなった。

「笑いごとじゃないわよ。おかげで今週は、障子の張り替え週間だったのよ」

「ごめんごめん。それで、終わったのかい？」

「ええ、昨日なんとかね。けど、部屋の片付けが全然終わってない

の

「なるほど。それで勉強する時間がないと」

「そうよ。やれるときにやっとかないと、うちってすぐゴチャゴチャになるから」

聞いていた裕子はふむ、と顎に指をやる。

「つまるところ、部屋の片付けが終わればいいんだね？」

「そうだけど……」

「なら話は早い」

パンと手をたたいて、笑顔になる裕子。美咲はイヤな予感がした。

「組が総力をあげて手伝いに」

「けっこうです！」

発言半ばで美咲は拒否した。裕子は眉間に皺を寄せる。

「人の話しを最後まで聞かずに断わるなんて、失礼だと思わない？」

「あんだ、いつぞやの出来事を忘れたの」

裕子は頭上に『？』を浮かべた。美咲はヒクッと頬を痙攣させて、
「あたしが庭の雑草がすごいことになってる、ってばやいたときのことよ。それを聞いたあんだは手伝うって言って」

「『言つて』？」

「言つてあらん限りの重機と気合の入った組員を、うち前に勢揃いさせたでしょ！」

「ああ、中学のころの話だね。思い出したよ」

裕子はクスクスと笑った。

「いや、懐かしいね。あの日の光景はいまでも憶えてるよ。いい思い出だ」

「いい思い出じゃない、いい思い出じゃない！ 人垣はできるわ、警察は来るわ、マスコミは来るわ、地元新聞にも載る大事になったじゃない！！」

「その新聞、いまでもうちにあるよ」

「捨てなさいよ！ っていうか、あんだ、草むしりとカチコミを同一視してない！？」

「制圧して排除する。同じことじゃないか」

「おかしい。その認識は絶対おかしい！」

美咲は気炎を上げた。

「あの日以来、ご近所さんから工藤家がなんて言われてるか知ってる？ 借金で首が回らなくて、立ち退き寸前だつて言われてんのよ！」

「それは失礼だね」

「ホントよ。迷惑な話だわ」

腕を組んで憤慨を表しながら、裕子は言った。

「工藤姉妹はお爺様の愛人候補だ。訂正してもらわないと」

「なおのこと迷惑よッ！！」

たまらず美咲は叫んだ。

ちなみにお爺様とは伊予組八代目組長、伊予雅史のことである。政財界に顔の利く東海地方一の大極道にして、古希を迎えてなお、夜の街に足を運ぶ妖怪ジジイだった。

「まあまあ。落ち着こうよ、工藤」

「誰のせいでこうなってるか、ホントにわかってる……？」

「わかってるよ。工藤は家事に追われて時間が取れない。そうだから？」

「……なんか話をずらされた気がするけど 根本的にはそうね」

「だったら簡単な問題さ。使用人を雇えばいい。それで問題は解決さ。お金はあるんだろ？」

「そりゃ、お父さんが残してくれたお金はいっぱいあるけど……」

「だったらお爺様に頼んで、いい使用人を探してもらおうよ」

「うっ……そ、それはちよつと……」

美咲が視線を彷徨わせていると、裕子は走り出した。

「あ、ちよ、ちよつと！」

「それじゃ、見つかったあかつきには、ちゃんと部活に入ってくれよ」

「っておい！ 練習試合から入部に話がかわってるわよ！ 訂正、

訂正しなさい！」

「ほら工藤、いつまでそこにいるんだい。急がないとタイムセールに遅れるよ」

「えっ、ウソ？ もうそんな時間！？ って、ちよつと！」

まちなさい、と言葉がのどまで上がるころには、裕子の姿は交差点に消えていた。

「ああ、もう！ うちに使用人なんていらないんだから！」

「 って、言うてはみたけどさあ」

空が夕暮れに染まった午後の五時。

タイムセールに間に合い、お買い得品を買い漁った美咲は、公園のベンチで再思考する。

「たしかに言ってるのよねー」

美咲はスーパールの袋に入っている物を見た。冷凍食品に出来ない物。栄養バランスがいいわけがない。自分ひとりなら問題ないが、うちには幼い妹がいる。ただでさえ、歳のわりに体が小さいのだから、食事の改善は最重要事項であった。

食事だけではない。改善事項は家事全般が上がる。

家の中は常にほこりっぱいし、庭は雑草が生い茂り、万年堀は汚れに汚れていた。

「雇うしかないのかなー」

工藤家は小金持ちである。両親はいないが、使用人を雇えるだけの遺産は充分にある。

となれば、なにも問題は無い。

雅史さんの力を借りて、良い使用人を雇う。

やはり、自分ひとりでは限界がある。これが一番ベターな対処法だ。

「でも、そう簡単にはいかないのよね……」

ため息をつき項垂れる。すると鞆より下がった手の平サイズの人形が目に入った。

気分転換にやってみよつかな。

公園を見渡し誰もいないことを確認した美咲は、人形を鞆から外す。

人形をベンチの上に置く。目を閉じた美咲は、十六秒かけて呼吸を整え、両手の指を人形に向けると　囁きを始めた。

「我は謳う、模造なる偶像の声を。模した汝れ、創りし主の願いを聴け。偶された汝れ、望みし主の願いを聴け」

開放節を唱え終わると、指向節に移行。両手一〇本の指から透明な糸が生えるイメージを作り、それを人形に接続させる。

「強化接続浸透認識、増命幻糸網羅認知。我が言の葉に応じよ、和が異の波に応えよ！」

目を開いた美咲が人差し指を動かす。

すると人形がぴよこりと立ち上がり、とてとてと歩いて美咲の膝までやってきた。

これが他人を雇えない問題。美咲は傀儡師なのだ。

傀儡師。和名で傀儡師。錬金術師や叙術師、複幻師などに並ぶ異能

力者の系統名で、幻糸と呼ばれる見えない糸を紡ぎ、手も触れずに万物を操る者。それが傀儡師だ。

と、言えば恰好は良いが、あくまで理論上の話である。実際に操れるのはヒトと同じ形をした人形くらい。万物を操るなどとは、過言極まりない誇張であった。

それでも、過去に置いてはそれなりに役に立っていたらしい。桶と洗濯板を使つての洗濯は人形に任せられたし、川からの水汲みだつて疲れを知らない人形ならば何往復でもできる。農作業にも活躍したとされる。

しかし戦後までの話である。いまでは洗濯などスイッチひとつでできるし、水は蛇口を捻ればいくらでも出る。農作業では、農耕機械を使ったほうがはるかに効率的だ。

そんな科学万能な現代社会においては、まったくと言っていいほど役立たずな傀儡術のだが、それが雇用上最大の問題なのだ。万一、

自分が傀儡師だとバレたら封魔指定を受ける。そんなのは御免だつた。

美咲は人形を躍らせながら盛大なため息を吐いた。

「まったく、なんでうちが傀儡師の家系なんだか……」

心からの嘆きは風にのまれる。

背後にある桜がざわめき、桜吹雪を舞い起した。

「わっぷ……」

ピンクの花弁の大群に襲われた美咲は思わず目を閉じてしまう。

「 Mishaki kudou? 」

どこか、幼い声だった。

風が去り、目を開けた美咲が見たのは短髪の少年。黒いスーツを着た男が立っていた。

白色人種 いや、白色人種の血を持つ東洋人なのだろう。瞳の色はアイスブルー。肌は驚くほど白いが、髪の色は黒。背は美咲より頭一つ低く、顔もあっさりとした作りだ。

ここは社宅の多いベッドタウン。観光スポットもないので、外国人を見かけることは滅多になく、美咲自身も見慣れているわけではなかったが、アンバランスだと彼女は思った。

年下とはいえ、二つか三つほどしか違わないはずの少年が、妹と同じ小学生くらいに見えるのだ。なんでだろう？

「あの、ミサキ・クドウさん、ですよね？」

困った声で尋ねられ、美咲は我に返る。そして同時に抱く警戒心。

「……あなたは？」

いまの見たられた？

不機嫌顔の裏に浮かぶのは強い危機感。美咲は人形をポケットにしまうと、立ち上がる。

見られていたとしたら 記憶を消す。傀儡の術で記憶を操作し、消すしかない。

覚悟を決めた美咲はいつでも術を行使できるよう呼吸を整え、鋭い視線で少年を見つめる。

少年が動いた。両手に大きなトランクを持ったまま歩を進め、美咲に迫ると、

「初めまして。ボクはアクト・ユル・アイデ。本日よりクドウのしもべとなるものです」

「あ、そーいうの間に合ってるから」

なんだ、ただのバカか。春になると増えるって聞くけど、迷惑な話よね。

即答した美咲は片膝をついて恭し（うやうや）く頭を下げる少年の横を抜けると、全力で走り出した。

「へ？ あ、ちょ、ちよっと待ってくださいよ！」

誰が待つか。この手のバカはさつさと撒まくに限る。つけられたりでもしたら、安心して眠れない。

公園を出て、交差点を曲がった美咲はまた角を曲がり、裏路地に入る。

そしていくつかの曲がり角を抜けると、ようやく速度を落とした。

「……ふう。ま、こんだけ距離を稼げば」

「もういいですか」
ぎよつとした。

振り返ると、撒いたはずの少年がいたのだ。

脚には自信がある。陸上部に誘われたことがあるのだから、そこそこ速いはず。

だが、少年は軽々（かるがる）とついてきた。両手に人間が入りそうな旅行鞆を持ちながら。

男は速度を上げると、苦もなく美咲に並んだ。

「ぼ、ボクの話聞いてください。ボクは」

「あんたなんて知らないわよ！ しもべも間に合ってるってば！」

汗一つかかず、呼吸一つ乱さず、横を走る困り顔の少年。いくら速度を上げてもついてくる。ターミネーターかマッハジジイ（古い）

にでも追いかけられている気分だ。

「だから、ボクの話さ」

「あーもー！ 間に合ってるって言うてンでしょー！！」

叫びながら十字路を左に曲がると急に人口密度が上がった。

見慣れた風景。ほぼ毎日足を運ぶ商店街のメインストリートに出たのだ。

チャンス。

美咲は買い物客でこった返すメインストリートに飛び込むと、人ごみを避けて走る。

いくら少年が速くとも、ここでは小回りがものをいう。案の定、大きな荷物を二つも持つ彼は人波に吞まれていた。

「ザマーみなさい！ 特売品ハンターの異名は伊達じゃ^{だて}ないのよ、伊達じゃ！」

美咲は高笑^{たかわら}いを響かせながらメインストリートを疾走^{しじそう}し ふと足を止めた。

「あ、お買い得品」

公園のベンチ。ガツクリと肩を落とした。

十

自宅についたのは、日が完全に沈んだころになった。

「ただいま？？」

美咲はダレた声で帰宅^{きたく}を告^つげる。

右手には別のスーパーの買い物袋。あんなことがあったあとでは、取りに戻るはずもなく、買いなおしたのだ。

「……おかえり」

リビングから少女が顔を出した。

透明度^{とうめいど}の高い黒の瞳。短く切り揃えた同色の髪に、年中変わらぬい愛想のない表情。今年で一〇歳になる妹の工藤美琴^{みつとせ}である。

珍しい、と美咲は思った。学校以外のほとんどの時間を自室で過^く

す美琴がリビングにいる。この時間帯なら、部屋で読書三昧のはずなのだが……なにかあったのだろうか？

「ま、そんな日もあるわよね……」

「……？」

「なんでもないわ。晩御飯、いまから作るから」

通常価格と疲労のダブルパンチを受けた美咲は、肩を落としてスリッパに履き替える。

「……なにかあった？」

「ヘンな男に追いかけられたのよ。まったく、いい迷惑だわ」

盛大にため息をつきながらリビングに入り、

「それは大変でしたねえ??」

盛大にこけた。

「どうしたんですか、ミサ姉さま？」

「な、な、な、な、な……!!」

腰を抜かした恰好で、『な』を連呼する美咲。視界の先には振り切ったはずの少年。アキトが、リビング直結のキッチンにてエプロン姿で立っていた。

「なな　なんであなたがここにいるのよ!!」

「あれ、言いませんでしたか？　本日付でクドウのしもべになりまして」

「だから、なんでそうなるのよ！　っていうか美琴！」

立ち上がった美咲は腰に手を置くと、傍観している妹へ厳しい視線を向けた。

「怪しいヤツを家にあげちゃダメって言うてるでしょ!!」

「ど、どこですか怪しいヒト？」

おろおろとする怪しい少年。デン、と美咲のこめかみに青筋が浮かんだ。

「あんたよ、あんた!!」

「……ichh?」

「そうよ！　ドゥーよ!!」

「え？ でも ああ、そうでしたね。まだ自己紹介がちゃんと終わってませんもんね」

ニヘラ、とアキトがどこか幼稚な笑みを浮かべる。美咲のボルテージアップ。

「そうじゃなくて！」

「あ、ちよつと待つてください」

ストップ、と手を上げるアキト。絶妙のタイミングで美咲を止めると、フライパンのフタを開け、ハンバーグの火の通り具合を確認用意してあった皿に乗せかえると、「ありがとうございます」と会釈をひとつ。「続きをどうぞ」と手を下げた。

「……あなた、なにやってんの？」

意図してかどうか、勢いを殺された美咲は、理解していながら尋ねる。

「お料理です。献立はハンバーグにポテトサラダ、おみそ汁にコシヒカリとなっております」

「なんであなたがウチで料理なんて作ってんのよ！」

「あれ？ お腹空いてませんか？」

「空いてるわよ！ あなたのせいで走らされたからすっごく！ けど、それとこれとは」

「ボクの……責任？」

アキトの表情が変わる。

疑問と困惑が交じり合った顔から一転して無表情。怒っているわけではなさそうだが、美咲はなぜか気圧されてしまった。

「な、なによ……」

「ごめんなさい」

アキトは深く頭を下げた。

「……へ？」

「ボクが原因でミサ姉さまは気を荒げているんでしょう。だから、ごめんなさい。今後はそうさせないよう、注意します」

「……あ、うん。わかったならいいのよ」

思いもよらぬ反応に美咲の気も静まる。その隙をついて、アキトは笑顔を復活させると、提案した。

「ありがとうございます。あと五分ほどでできますので、着替えられたらどうですか？」

「あ、そうね。じゃあちよっと、着替えてくるわ」

美咲は踵を返すと、リビングから出て行く。

「ミコ姉さま。ミコ姉さまのごはん茶碗はどれでしょうか？」

「これ」

「ありがとうございます。量はどれくらいを？」

「ちよっと少な目。ハンバーグにニンジンはいらない」

「わかりました??」

「　　って、ちがーうー!!」

ダッシュでリビングに戻った美咲は、キッチンに飛び込むとアキトの胸倉を掴んだ。

「そうじゃなくて、どうしてアンタがここにいて、我が物顔で料理なんかしてるのかって訊いてんのよ!!」

「えっと……もしかして、聞いてないんですか？」

「はあ? だからいったいどういうことなのよ」

「あ、やつぱり。連絡がいつてないんですね??」

ひとり納得したアキトは、懐から一枚の紙を取り出し、美咲に差し出した。

「なによ、これ? ……ハウスキーパー雇用契約書? って、住み込みで!??」

「はい。今日から住み込みで働かせてもらうんですよ」

「ちよ、ちよっと! あたしこんな契約した覚えないわよ!? 誰

が　　って、まさか」

「えっと、キョーコさんですけど」

「あんの人は……!!」

自称冒険家の叔母のなにも考えていない笑顔が脳裏に浮かび、美咲は契約書を握り潰すと、リビングから飛び出した。

行き着いた場所は階段の下にある電話。受話器を持ち上げると、神速でボタンをプッシュする。やや間を空けてからハスキーボイスの女性がでた。

『こちら工藤です。ただいま、諸事情により電源が入っていないか、電波の届かない遺跡にいます。用件のある人は発信音の後に用件とメッセージをいれてね』

「あたしです、美咲です！ 居留守はやめて出てください！！」

『なんだ、美咲か。いやー、フッタオトコかと思ったよ』

あつはつは、と気楽な笑い声。工藤姉妹の後見人、工藤恭子その人のものだった。

「どういうことですか恭子さん、使用人の雇用契約って！ しかも住み込みでなんて！！」

『またもや間。どうやら衛星電話らしく、会話に若干のタイムラグが生じるようだ。』

『ああ、アキトのことかい。もうついたんだ。さっすがカルゲ、仕事が早いねえ』

「なんなんですか、アレ!?!」

『プレゼント』

「はあっ?」

『思わぬ言葉に眉を寄せる。』

『知り合いが経営する人材派遣の会社で、有能株のハウスキーパーがいるって聞いてね。安かったから雇ったの。一週間早いバースデープレゼントよ』

「いりません。クーリングオフしてください。してくれないなら、こっちでします」

『もーいけずう。でも、美咲ならそう言うと思ったわ。だ・か・ら』

『恭子は脳が溶けたかと思えるような甘ったるい声色で、終身雇用で契約しちゃった、テへ』

笑って答えた。

『だいじょーぶ、だいじょーぶ。そこんところはちゃんと考えてあるから』

『小麦粉や風邪薬かせくすりとでも言うんですか？ すぐばれるに決まってますよ』

『違う違う。根本的にだいじょーぶってことよ。だって、アイツ』

突如とつじょにして受話器からけたたましい音が響いた。反射的に受話器を遠ざける。遅れて悲鳴とも怒号とも取れる声上がり、エンジン音と発砲音が参加を始めた。

その中、恭子は声も口調くちやうもガラリと変えて、

『クソつたれ！ 奇襲だ、奇襲！！ 起きやがれ！！』

『きよ、恭子さん！？』

『A班B班は敵を近づけさせんな！ C班は撤収準備てつしゆゆび、あとE班を呼び戻せ！ 急げ！！』

『恭子さん！ 大丈夫なんですか、恭子さん！？』

叫ぶが爆音ばくおんに掻き消され、まったく届かない。雑音ざつおんの多くなった受話器の向こうでは、恭子がヒステリックに怒鳴っていた。

『ケビンはなにしていた！ あとで薄汚え ぶつ切りにしてやる！！ 急げ！ 長くは持たねえぞ！！』

『A班壊滅、B班も被害甚大ひがいじんたい！』

『撤収準備整った！ 全員乗せる！ 対人地雷クレイモアのタイミング、しくじるなよ！！』

『Three two one Fire！！』と誰かが言うところまで以上の爆発音が轟とどろく。どうやら近距離でなにかが爆発したらしい。凄まじいノイズが受話器を奔った。

『テメエらしつこいつつてんだよ！ この盾はオレたちが先に見つけたんだ！ 横取りするんじゃないねえッ！』

叫んで新たな発砲音が響く。ついでに明らかに日本語ではない絶叫きやうが上がった。

「きよ、恭子さん……?」
「あ、ごめーん！ 同業者かなにかと鉢合わせしたみたいなの！
ちよお??? つと騒がしいから、落ち着いたらまた連絡するわ!」
「きたぞ、キョーコ！ ヤツらヌーフの追っ手だ!」
銃声に紛れて聞いたことのない言葉が聞こえてくる。なんとなく
「呪い」だの「死」だのという、ネガティブな意味な言葉だとわか
った。
「ぬーふう……? はん、モグラどもの小間使いかい。アリーの呪
いが恐くてトレジャーハンターが務まるかってんだ！ 日本人だか
らって舐めんよ！ 大和魂見せてやる!」
「ああ、恭子さん。大和魂の使いどころが激しく間違ってます
って、もしもし!？」
一方的に切られる電話。
その後、何度かけても繋がることはなかった。

十

「事情は理解したわ」
食欲を刺激する夕食の匂いを無視して、美咲は口を開いた。
「後見人の恭子さんと、あなたの勤める会社との間で使用人を雇う
契約がなされた。そしてあなたは会社の指示に従って、遠路はるば
るドイツからきた。そうね？」
料理を並べ終えたアクトがうなずく。
「クドウのしもべとなり、二十四時間体制でお世話をする。それが
契約の内容です」
「解約は可能なの?」
「可能ですけど、雇用者側の都合による一方的な解約においては、
違約金を支払う義務が生じますよ? 一週間の仮契約を済ませたあ
となら消えますけど」
「払うわ。だからさっさと出てきなさい」

「な……」

ガーン、と衝撃を受けるアキト。慌てた様子で美咲に尋ねる。

「な、なんでですか!？」

「当然でしょうが! あんたわかんないの!？」

アキトは『?』マークを浮かべる。美咲はため息をひとつつき、説明した。

「あなたはオトコ。あたしと美琴はオンナ。同じ屋根の下で暮す。

以上」

「えつと……男性と女性で一緒に暮らすと、どう問題なんですか？」

「そ、それは……」

小首を傾げて訊かれ、言葉を詰まらせる美咲。赤い顔でもごもごと言葉を漏らした。

「だ、だって男よ? 男はみんなケダモノだって言うし……この家にはあたしと美琴だけしかいないのよ? 若い姉妹が住むこの家で寝食共にする使用人が男なんて、認められるはずがないじゃないの。

あ、過ちあやまちが起こったらどうするのよ!！」

「あの……」

「なによ!」

「アヤマチ、というのはなんですか？」

「……へ?」

「まだ完璧に日本語をマスターしてなくて。抽象ちやうしょう的な言葉に弱いんです、ボク」

エヘヘ、と照れ笑いをしながら、アキトは再度尋ねた。

「それで、アヤマチってなんですか? どんなことですか?」

「あ、過ちは過ちよ! それでわかりなさい! とくかくダメなものものはダメなの!！」

「そ、そんなあ。考え直してくださいよお」

「ダメ」

「一週間、とりあえず一週間!」

「ヤダ」

「ほ、ほら。仮契約として一週間雇えば違約金を払わないですすみすし」

「却下」

まったくもって相手にされない。アキトはいまにも泣き出しそうな顔になると、突然美咲に抱きついた。

「ちょ、ちよつと!」

「雇ってくださいよお???!」

「イヤだって言ってるでしょーが!」

「しっかり働きますから! がんばりますから! というか、せめて話を最後まで聞いてから決めてください!」

「雇うつもりないんだから、聞く必要ないわよ!」

「お願いしますよお???!」

「ダメなもんはダメ!」

「お願いします、ミサ姉さま!」

「誰が姉さまか!」

「ならミサキ姉さま。あつ、ミサネエさまのほうがじっくりきますね」

「そうじゃなくて、どうして『姉』なのよ!??」

「? ミサネエさまはミサネエさまですよ?」

「だから、どうしてあたしに『姉』なんて付けるのか、って聞いているの! さつきからずつと言ってるでしょ!」

「だってボクより年上じゃないですかあ!」

「美琴は年下でしょ!?? つーか、だからってあなたに姉呼ばわりされるつもりはないの! 離れなさいよ!」

「なら雇ってください???!」

「子供か、あんたは!??」

力いっぱい抱きつくアキトに、それを引っぺがえそうとする美咲。しかしアキトの力は美咲の予想以上に強く、しかも重い。

「放しなさいよ!」

「雇ってくれるまでは放しません!」

ぎゃあぎゃああと喚きあう二人は、まるで娘の結婚を認めないガンコ親父と、喰らいつく婿むこそのもの。どちらも意地になってきている。そんなドタバタ劇が一〇分ほど続くと、とうとう美咲がキレた。

「こんの　いいかげんにせいッ!!」

気合一発、どうにかしてアキトを振り解くと、口早くちばやに言う。

「とにかく！　あたしはハウスキーパーなんて雇う気ないの！　帰りなさい！」

「イヤです!!」

力強く拒否。カツ、となった美咲が怒鳴るより早く、アキトは続けた。

「初仕事なんです!!」

「え?」

「これがボクの初仕事なんです！　絶対成功させようと思って、ミサネエさまとミコネエさまが自慢するようなしもべになろうと思って、ここまでできたんです!!」

吐露つひして、見上げてくるアキト。その涙目に気圧けいあつされて、美咲は仰け反ぞった。

「それなのに、その日のうちにクビになったなんてことになったら

ボク、ボク!!」

「うっ」

アキトの独白どくはくに美咲は一步引く。

「いままでボクを守ってくれた人たちに申し訳がたちませんよお。

アリシアさんにカルゲさん、タユラさんにミリアさん。お母さんにだって合わせる顔がありません……」

「……………」

黙り込む美咲。その頭の中では深々（しんしん）と雪が降る中、都会へ向かう汽車きしやに乗ったアキトを見送るため、ホームに勢揃いした親類縁者しんるいえんじやがハンカチを振る様子が流れており　かなり居心地いしじが悪そうだった。

「お願いです。一週間……一週間でもいいです。へマをしたら即解雇そくかいこ

でかまいません」

涙目でアキトは頼み込んだ。

「ボクを、雇ってください！」

「で、でも……」

工藤は傀儡師の家系。傀儡師は、親族や組織の者以外に、傀儡師とバラしてはいけない。一日や二日ならともかく、ずっと共に暮せばいつかはバレル。

やっぱり断ろう。心を鬼にしても、断ろう。冷酷かもしれぬが、それしかない。

決めた美咲が断ろうとすると、

「……いい」

ボソリと声。振り向くと、ひとり黙々（もくもく）と食事をとっていた美琴が会話に入ってきた。

「いい。雇う」

「ほ、ホントですか!？」

「ちょ、ちよつと美琴！勝手に決めないでよ！」

「……ダメ？ どうして？」

サラサラの髪を揺らし、小首を傾げる美琴。美咲は咄嗟に「うちは傀儡師の家系でしょ！」と叫びそうになるものの、なんとか呑み込んだ。

美琴は知らない。美咲は妹に、工藤が傀儡師の家であることを教えていないのだ。

「だ、ダメだからよ。第一、ウチに使用人なんて必要ないでしょ？」

「……障子を破った部屋」

「うっ……」

「外の塀……庭……家の壁……その他もろもろ……」

工藤家の問題を挙げてから、美琴はもう一度自分の意見を口にした。

「……いい。雇う」

「……美琴、あんた随分とこいつの肩を持つわね」

美琴はハンバーグの乗っていた皿をチラリと見て、

「アキトの料理、美味しい」

「ハ、ハンバーグくらいあたしだって作れるわよ!」

「お姉ちゃんの料理。微妙」

微かな哀れみを視線に混じらせて言う。

「いい度胸ね、美琴。覚悟は できてるわね?」

ヒクリ、と頬を痙攣させる美咲。身の危機を察知した美琴はさつとアキトの背に隠れ、彼と目が合う。

「お願いします!」

「うっ……」

必死の顔で、懇願してくるアキト。まるで捨てられた子犬を見つけたような感覚が、美咲を襲った。

「どうか、ボクを雇ってください!」

「ダメ……?」

「うっ……」

頼み込むふたりに押される美咲。ひとたび劣勢になると、アキトの『初仕事』『申し訳がたたない』『合わせる顔がない』の言葉が道徳的な部分を強く突き、たつたひとりの肉親たる美琴を敵に回して無理やり解約するといった強攻策も取れなくなり、

「……まずは仮契約からよ。なにか問題を起したら即解約、いいわね」

結局、妥協してしまう。

ま、恭子さんが大丈夫、って言ってたから大丈夫かな。バレたら記憶の操作をして、いちやもんつけてやめさせればいいんだし

あーあ、あたしってホント、甘いなあ。

美咲はため息をついてイスに座る。すると、アキトの肩が震えていることに気づいた。

「……どうしたのよ?」

「Ich」

「ん?」

「Ich liebe Frau meine Mishanee
?????! (大好きです、ミサネエさま?????!!)」
「なに言ってるのかわからないけど、抱きつくな、押し倒すな、ミ
サネエ言うな ツ!！」

早くも後悔する美咲だった。

十

草木も眠る深夜二時。

美琴とアキトが眠ったのを確認した美咲は、パジャマからツナギに着替えると、敷地内にある道場の隠し扉より続く地下室、所狭しと人形が置かれた工房に訪れていた。

「つつし、始めますか」

六芒星の円 単色陣の中心に立つと日課の鍛錬を始める。

邪魔にならぬよう、髪を三つ編みにした美咲が見つめるのは、専用のハンガーに固定されたメートル強の人形だ。

いや、これは人形というよりアンドロイドといったほうが正しい。空気圧式の駆動装置に、軽合金の骨格。皮膚代わりの合成樹脂こそないものの、アイボールセンサーを筆頭に鼻、口、耳がついている。

「今夜もよろしくね、人体模型くん」

言い得て妙な名前の人形 人体模型くんに笑いかけてから、美咲は意識を集中させた。

呼吸を四拍呼吸へ変えると輝き始めるのは、足元の単色陣。空気のように存在する命の力(美咲はなんとなく魔力と呼んでいる)を隔絶し、陣の内部を美咲のみの魔力で満たす。

「よし……いい調子いい調子」

順調に単色陣が起動したことに喜びを覚えつつも気を引き締め、開放節を紡ぎ始めた。

「我は謳う、模造なる偶像の声を。模した汝れ、創りし主の願いを聴け。偶された汝れ、望みし主の願いを聴け」

まぶたを下ろすと指向節に移行。単色陣の光が線を通り、人形側の陣へと飛び火する。

ここからが本番だ。

美咲は集中力を高める。

開放節は指向節を成功させるための下準備。指向節こそが傀儡の術の成否を別ける重要なポイントであり、難易度が高いのである。

限界にまで意識を集中させた美咲は、人形に両手一〇指を向けた。

「強化接続浸透認識、増命幻系網羅認知。我が言の葉に応じよ、和が異の波に応えよ！」

魔力を活発化させる「強化」。

作り出した幻系を人形に繋げる「接続」。

繋げた幻系を人形の隅々（すみずみ）まで通す「浸透」。

造形や材質、硬度など、人形のすべて感じ取り、すべてを知る「認識」。

それら、四つの工程を完了させて、美咲はゆつくりとまぶたを開いた。

「公園のときは成功したけど……どう？」

指に返る微かな反動。（フィードバック）五感がふたつあるような妙な感覚。小指を動かすと、人体模型くんの右腕が上がった。

成功だ。それも自分と同じサイズの人体模型くんで成功した。

これまで、人体模型くんでは数えられるほどしか成功していない美咲は、小躍りしながら自分を誉めた。

「おおっ！一ヶ月ぶりの成功、なかなかやるじゃない。偉いぞ、あたし！」

「すごいですね??」

同意の声に美咲の喜びも増す。

「でしょー。やっぱり才能あるのかしらね」

「当然ですよ。けど、やっぱりちよつと鍛錬不足ですね。通常、人形の簡易掌握って一分でできるものなんです。単色陣を使用して二分は、少しかかり過ぎですよ」

「へえ、そうなん」
感心していた美咲の顔が凍りつく。一呼吸置いてから、ギリギリと振り返った。

背後に立っていたのは、やはりと言うべきか、ヤツしかいないと言うべきか、現実って厳しいって思ってしまうが アキトであった。

妙に可愛らしいピンクのパジャマに、ナイトキャップを被って眠っていたはずの彼は、なぜか昼間のスーツ姿で物珍しそうに周囲の人形を眺めていた。

「すごい量の人形ですね。貴重なものも多いです。これなんて名傀儡師、ヴァーカンソンのアヒルですよ。こっち側だと、重要文化財に指定されている代物です。ちなみにアヒルは、十八世紀当時の最先端機械技術と錬金術を組み込んだもので」

ほこりを被ったアヒル持ち上げて、アキトは説明する。

が、美咲は聞いていない。血の気が失せた顔のままだ。

説明が一通り終わると、ようやくアキトは美咲の状態に気づいた。

「どうしたんですか？ 肌が移植用皮膚みたいに青白いですよ」

ペタペタと、無遠慮に頬を触られて美咲の瞳に光が戻る。

「あ、あんた…… どうしてここに？ 寝てたんじゃ……」

「仮契約に関してお話がありました。ミサネエさまを起こそうとしたら、道場の方から物音が聞こえて、ドロボウかなっと思って調べに来たら、ここに繋がる階段を見つけたんです」

「いつから……そこに？」

「ミサネエさまがその人形を人体模型くんと言ったところからですけど」

「もしかして ずっと見てた？」

「はい。すこし変わった傀儡の術ですね」

「見てた…… ずっと…… 見られてた……」

途端、美咲の顔が赤くなった。鳶色の瞳が揺れに揺れ、全身からふわっと汗が出る。

さて、EUに傀儡師などの異能力者を統べる『結社』があるよう、日本にもまた異能力者を管理する『八神』がある。『八神』は異能力者を保護し、その存在を隠す組織だ。そして、組織には必ずルールがある。

八神基本法令其ノ巻。

異能力者は家族・親族・八神に属する者以外に能力を明かしてはならない。この法令を破った者は封魔指定を受け、無期懲役に処する。

つまるところ終身刑。どこその山奥の隔離施設ぶち込まれ、一生そこで暮らす。

「そんなのいやアアアアアアアアツ!!」
硬直が解けるや否や絶叫する美咲。頭を抱えて叫ぶ。

「イヤ、イヤよ！ こんな若い身空で組織の隔離施設に投獄なんて！ あたしはまだやりたいことがあるのよ！ 恋もしてないし、ガンダムシリーズTV、OVA、劇場版、全部見てないし、水戸黄門もまだ14部までしか買ってないのよ！ 城に核ミサイルがあるっていう都市伝説のあるテーマパークにだつて行ってないし、鈴鹿でF1の観戦だつてしてないし、八十八ヶ所廻りだつてまだだし、大和ミュージアムにも行ってないし、百円ショップの商品全部買っつていう壮大な野望もあるのよ!!」

「えっと……ごめんなさい。よくわからないです」
申し訳なさそうな感想に、泣き崩れ震えていた美咲の肩がピタリと止まった。「おや？」とアキトは小首を傾げる。

「……どうしたんですか？ 落ち着いたならそろそろ人形に」
「フ、フフフ フフフフフフ……!!」

アキトの言葉を遮り、ゆらりと、顔を上げる美咲。低い声色にマツチした笑顔を見て、アキトは思わず後退りをした。

「み、ミサネエさま……？」
「そうよ……そうなのよね。知られなきゃいいのよね……ムフ」

「お、落ち着いてください。さすがにこれ以上の放置はマズイと思
うんですけど……」

「なあんだ。簡単なことじゃないの……フフフ」

美咲は更に「フフフフ！」と笑いながら、壁にかけてあるアモル
フアスナイフを掴み、

「記憶を消す！ つーか殺す！ あたしの自由と平穏と野望のため
に死ねい！！」

「ミ、ミサネエさま！ ホントにマズイですって！ 人形の掌握中
ですよ！！」

「へっ？」

言われて、思い出す。いまにもアキトに飛び掛ろうとして美咲が
慌てて振り返ると、暴れる人体模型くんの姿が目に入った。

瞬時に頭が冷えた。美咲は己の激情で乱れた幻糸を制御しようと
する。

が、とき既に遅し。

「やばー！」

暴走状態に陥った人体模型くんが固定用ハンガーを破壊。アイボ
ールセンサをデタラメに動かしながら、美咲に襲いかかる。

「ミサネエさま！」

美咲の脇を声が抜けた。スーツの裾が流れ、革靴を履いた足が突
っ込んでくる人体模型くんの腹に決まる。人形は体をくの字に折る
と、ハンガーを巻き込んで壁に激突した。

「ウン……」

美咲はあんぐりと口を開けてしまった。

人体模型くんの重量は一二〇キロを越える。ハンガーだって簡易
版だが一〇〇キロは下らない。それらを小柄で華奢なアキトが蹴り
飛ばしたのだ。

「ミサネエさま、避けて！！」

人体模型くんを注視していたアキトが、弾かれたように振り返る
と叫んだ。

なんで、と思うと同時に、美咲は理解した。

重厚な物が迫ってくる感覚。顔を上げると、総鉄製の箱がゆつくりと倒れてきていた。

ハンガー用の極太電源ケーブルがのたうち、供給源の大型蓄電器を倒したのだ。

あ、死ぬわ。

冷静に美咲は予測した。さっきまでは死ぬよりかはいくらか優しい投獄人生のことで、あれだけテンパっていたというのに。

中途半端な希望が原因かなあ。さすがに自販機サイズの蓄電器が頭の上に倒れてくる、五〇〇キロの圧倒的な現実を見たら、誰でも素直に受け入れるのかも知れない。即死だし。

などと納得する美咲は、まぶたをおろして人生の終止符を静かに待つ。

「……………」
待つ。

「……………」
待つ。

「……………」
訪れない衝撃に、美咲はそ？？と目を開くと、アイスブルーの水晶体と視線が合う。間近にアキトの顔があった。

「だ、大丈夫ですか？」

尋ねられて、美咲はうなずく。

「あ……………」
我ながら間抜けな返事だと思う。しかし、言い訳も同時に浮かんだ。

だってしょうがないじゃない。フツー、思わないって。あたしを抱いて飛び去るとかならまだしも、片手で五〇〇キロの蓄電器を受け止めるなんて。

「よかつた??？」

はあ??？と安堵の息を吐いたアキトが、蓄電器の傾きを戻す。本

当にあっさり。たとえるならば、倒れてきた空のダンボール箱を、もとの位置に戻すかのよう。

「立てますか？」

「う、うん……」

アキトの手を借り立ち上がる。

「……とりあえず、あんがと」

「お礼なんていいですよ。ミサネエさまを守るのがボクの役目ですから」

二ヘラ、とした笑顔を見ると、ようやく美咲の頭が回転率を上げ始めた。

警戒心が生まれ、反射神経が十五秒ほど遅れて再起動。表情を呆然から警戒に切り替えると、美咲はボックスステップでアキトから距離を取った。

「あなた、何者？」

アモルフアスナイフを逆手に握った、ファイティングポーズ。鋭い眼差しを向けられて、アキトは頼りない笑顔を消す。

浮かんだのは大人の微笑み。穏やかに笑う彼は片膝を床につけて恭し（うやうや）く頭を下げた。

「私はアキト・ユル・アイデ。型式番号 Yr-03。型式名称『騎士』。ルーンのかたしきばんじつ？ユル？を名に持つ人形 【創幻人形】です」

第二章 人形のお供は絶滅危惧種

その日の授業が終わり、ぼ??と、帰路きじゆについていた美咲は名を呼よばれて足を止めた。

「工藤、帰りかい？」

振り向くと少し離れた場所に裕子ゆうこがいた。

「そーよ、一緒に帰る？」

「ああ、そうさせてもらうよ」

裕子が追いつくのを待ってから、美咲はまた歩き出した。

「どうかしたのか、工藤？」

「ん??、なにが？」

空をぼけえつと見上げながら疑問で返す。

「最近、ボンヤリしていることが多いよ」

「ん??、そーお？」

「……訂正、いまもだね」

裕子が言う。それからやや躊躇ためらって、

「もしかして……私が原因か？」

「なんで？」

「いや、この前は少し一方的過ぎたと思ってね。イヤなら、どちらもやめるけど……」

曇りを入れた顔に、美咲は三日前の出来事できごとを思い出した。

「なに言ってるの。あんたがしつこいのはいつものことじゃない」
笑って続ける。

「昨日メールで伝えたとおりよ。練習試合の件は保留ほろ。使用人はいるらない。以上よ」

「そうか、いい返事を期待してるよ。けど、使用人の件けんは本当にいいのかい？ お爺様は遠慮えんりよするなって言ってるよ」

「いいの。だって」

「『だって』？」

「なんでもない！」

「工藤、キミは気になるところで話しを切るね」

裕子は肩をすくめる。美咲は空を見上げ、優しい光に目を細めてから、

「色々あったのよ、色々、ね」

いまひとつ現実が信じられないような、そんな顔をした。

「フツー、ありえないわよね」

「？」

裕子は疑問を募らせるばかりだった。

ときを遡ること二日前、工藤家深夜のリビングにて。

「【創幻人形】？」

ソファーに座る美咲が、書類の一枚を見て呟くと、アキトが付け足す。

「【創幻人形】は開発名称でして、正確には第7世代人形創幻系列
試作機（ジープテ マリオネット テストタイプ マギ）。第6世
代人形を越える人工知能（AI）を筆頭に、多くの新技術を組み込
んだ次世代の人形のテストタイプです」

他の書類をテーブルに並べていたアキトが付け足すと、美咲の瞳に
疑いの色が表れた。

「人形　　って、冗談でしょ？」

疑惑の眼差しを向けられた彼は、穏やかな笑みを浮かべたまま唐
突に彼女の腕を掴むと、自分の胸に押し付けた。

驚いた美咲が手を振り解く前に、目を閉じたアキトが言う。

「心臓、動いてないでしょう」

美咲はまた驚く。まぶたを開くと瞳の色がアイスブルーからダ
ークブルーに変わっており、しかも薄っすらとだが、電子回路のよう
な模様まで浮かんでいたのだ。

「……人間じゃないことはわかったわ」

アキトの手を振り解いた美咲は、状態を元に戻したアキトをまじまじと観察した。

「でも、まだ半信半疑。擬態した宇宙人や変化した妖怪って言われただけが納得できるわ」

全身の造形、肌の質感、標準的な体温、接合面のなさ。そして、このAI。

美咲はむうつと唸った。

「最新型のアンドロイドだって比較にならないじゃないの」

「はい。問題を持つ技術、機能の低い技術などは錬金術などによって補強できます。ソフト面に置きましても、大半の物事を単独で処理できるだけの独立性の確保に成功しました。私は現在存在する人形及びアンドロイドを凌駕していると自負しています」

「フーか、もうアンドロイドかゴーレムよね。人形じゃないじゃないの」

傀儡師の定義から言えば、人形とは幻糸で操るものを指す。昨今の人形は自動人形化が著しいとはいえ、ここまで勝手に動いて勝手に喋るとなると、人形の領域を超えている。

しかし、アキトは首を横に振って否定した。

「私は人形です。アンドロイドでもゴーレムでもありません。人形なのです」

力の籠った言葉。熱を宿した瞳を向けられて、美咲はちょっと身を引いてしまった。

「ま、まあいいけど……それより、恭子さんの根本的に大丈夫って、こういうことだったのね」

相手が人形なら、秘匿以前の問題だ。

いらぬ気遣いで溜まった疲れを吐息と共に吐き出してから、美咲は話を進めた。

「それで、なんで使用人なんてやってるのよ」

アイズブルーの双眸から熱を消したアキトは、柔らかな笑みを浮か

べながら答える。

「稼働試験かどうしけんです。私が社会にとけこめるか、人形と見破られないか、想定外そつていがいの問題をうまく対処たいしょできるか。それらを調べるため、ハウスキーパーをやっています」

「あたしが傀儡師くわいびしだったことは？」

「独自の調査とくじで可能性が上がり、工藤恭子様に説明されて判明はんめいしました」

言葉を聞いて、美咲は納得した。

おかしいとは思ったのだ。工藤家の秘密を一番良く知り、なんだかんだいっても口の堅いかた恭子さんがプレゼントと称しょうして使用人を住み込み&終身雇用しゅうしんこよこいで雇って贈るなどありえないし、アキトの外見と釣り合わない精神年齢の低さもまた当然。彼はまだ試作機じさくきなのだ。理解すると同時に疑問が見つかり、ぶつけてみた。

「単刀直入に聞いわ。なんであたしなの？」

「美咲様が傀儡師だからです」

「傀儡師なんてほかにもいるでしょ。どうしてあたしを選んだのかって訊いてんのよ」

「本が出したモニター条件を満たしているためです」

アキトは細かな説明を始めた。

「私はほぼ完成しています。思いつく限りの問題を想定そつていした実験を行い、実際に対処たいしょしてきました。ですが、常に熟練傀儡師じゆくれんがついており、非常時のデータが足りません。本社はそれを危惧きくしています」
一呼吸置いて、断言だんげんした。

「美咲様。あなたほど私の主にふさわしい御人は他に存在しません」

「あたしが未熟みじゆくだから？」

「失礼ですが、そのとおりです。しかし、それだけでもありません」
「どうということ？」

「美咲様は創幻人形開発計画にどれだけの資金しきんがつか込まれたと思いますか？」

「さあ？」

「約二〇億ユーロです」

「に、にじゅうおくゆる!?」

「とんでもない額だった。」

「それ故にこの技術を盗まれるわけにはいきません」

「そりやそうでしょうね」

「技術情報の流出を（りゆうしゅつ）防ぐため、稼動試験のモニタ
ー候補にはどこの組織にも所属しない者であり、私の技術を知って
も利益を得ない者が選出さ（せんしゅつ）れました。厳選に厳選を
重ねた結果、ヒットした唯一の御人が美咲様なのです」

「ちよつと待った。あたし一応、八神の一員なんです……」

「八神は除外しています。異能力者が明るみにでそうな事件、存在
を明らかにする組織への粛清こそ苛烈ですが、それ以外に関しては
寛容　　と言うよりも放置していますから」

「へえ、そうなんだ」

考えてみれば、工藤家に八神の者が訪れたことなど一度もなかつた。

納得する美咲の前で、アキトは立ち上がって話しを進める。

「ここは恰好の実験場です。街には工藤家以外の傀儡師はおらず、
一番の問題であった血族者も干渉してきません。しかも、美咲様は
簡易掌握に五分もかかる見習い中の見習い傀儡師。更にはもう何年
も家事を行っているのに、未だに簡単な料理しか作れないほどの料
理下手。まさしく私の主となるために存在するかのようです。奇跡
です。ルーンの導きです。これほどの無能で無力で無知な傀儡師は
美咲様をおいてほかに　　」

「アキト」

静かに、されど熱く語るアキトに美咲は花の咲くような微笑みを
向け、

「黙れ」

「申し訳ありません。御許しを」

「わかりやいいのよ。で、あたしのメリットは？」

「無料でハウスキーパーの取得及び礼金です」

「デメリットは？」

「月に一度のレポート提出。それだけです」

「ふ？？ん」

「悪い話だとは思いませんが？」

たしかに悪い話ではない。

未熟だから選ばれたというのは、正直腹が立つ。しかし事実だし、真剣に傀儡の術に取り組んでいるわけではない。使えて損はない、いわば趣味みたいな感じで覚えているに過ぎないのだ。そんな趣味で使用人を無料で雇え、礼金まで貰える。願っても無いことだ。

なんだか旨過ぎる気もするが、秘密の人形稼働試験とはそんなものかもしれない。秘匿性を第一に考えれば、多少の出費は厭わないのだろう。なんせ二〇億ユーロだし。

だが、

「質問」

「なんででしょうか？」

「あれはウソ？」

「あれ、とは？」

美咲は目を細めて、

「初仕事ってヤツ。申し訳がたないってヤツ。お母さんに合わせる顔がないってヤツ」

アキトは言った。使用人の仕事を絶対成功させると。母や恩人のためがんばると。

「あれは、ウソなの？」

「ウソではありません。訓練と教育は受けていますが、実際の仕事は初めてですし、一週間以内のラボ帰りは皆様を落胆させます。そして、造物主 母の名を貶め（おとし）ます」

「母？」

「開発主任です。私の設計とコンセプト決定。AI構築にEO神経の精製。そして、イクシルの改良を担当しました」

「イクシル？」

聞き慣れない単語に、美咲は眉根を寄せる。「なにそれ？」と訊くと、アキトはネクタイを解き、ワイシャツのボタンを外し始めた。「ちょ、いきなりなに脱いでんのよー！」

「お見せいたします」

言って、アキトは真つ白な胸板に両手を置く。そして徐に（おもむろ）指を突き刺すと、胸骨ごと胸を開いた。

「ッ」

悲鳴を呑み込めたのは、慣れていだからだろう。

幼いころより人形に触れ、操り、整備し、分解してきたからこそ、呑み込めた。

ドロリと滴る水銀も、鈍色の骨も、透明度の高い電動筋の束も、予想できたものだった。ただ一つ、大量のコードと管に繋がれた黒い石以外は。

「これが、イクシルです」

「イク、シル……」

ゴクリ、と息を飲んで反芻する。

「幻系を受信する宝石の一種……違う。透明度が足りなすぎる。これは金属 なの？」

「私も詳しくは知りませんが 少なくとも金属ではありません。私の中核と動力炉を成しています」

アキトは開いた胸を閉じる。整備上の仕様なのか、胸の裂け目はすぐに消えた。

イクシルが隠れたことに、美咲は残念に思うと同時に安堵した。

アレは真つ当なものじゃない。見ていただけなのに背筋が凍りつき、魅入られたように目が離せなかった。アレは、人間の触れていないものではない。

「どうでした？」

「……とりあえず、あなたのお母さんが只者じゃないことがわかったわ」

「はい。素晴らしいヒトでした。私が美咲様の役に立つことこそが、天に召された母への恩返しです」

「死んでるの?」

「はい」

「……ごめん」

「気になさらないください。質問は以上ですか?」

「え? そ、そうね……」

急にふられて、美咲はどもる。

このしんみりとした空気がイヤで、消すために咄嗟に浮かんだ疑問を口にしていた。

「あたしが断つたら、どうするの?」

次の瞬間、美咲は体を硬直させてしまった。

「データ取り用に分解されます。上層部が指定したモニター候補は美咲様だけですから」

こうやって話しているあいだでさえ忘れそうになるが、アキトは人形なのだ。傀儡師のために働く人形。商品として作られた人形。たとえどれだけ人間に近くても、人形である以上は人権などない。

「……いいわ。その話、乗ってあげる」

顔を明るくさせたアキトが口を開くが、美咲が遮る。

「ただし、条件付だよ」

彼女は真剣な顔で、

「条件は美琴にあんたが人形だってバレないこと。知られたら即解約。その条件で仮契約をして、一週間後までに正式に契約するか決めるわ。悪く思わないでね」

「当然の判断です。むしろ、その判断を望んでいました。それでこそ傀儡師です」

「そ、そう」

「では、書類にサインと指印を。これはモニターとしての仮契約書になります。あたつての仮契約事項及び私に関する情報はこちらに入っています。必ず目を通してください」

渡されたメモリースティックを揺らしながら、出された書類にサインし、指印を押す。

「はい。これでいいわね」

「ありがとうございます、美咲様」
好青年こうせいねんのように微笑むアキトに、美咲はむず痒がゆそうに自分の体を抱いた。

「そんな言葉使いやめて。ガラじゃないの。あと、様も禁止 元に戻しなさい」

「助かります。表面人格<スレイブ>の使用は、私の演算能力を3%も低下させるのです」

では、解除します。と目を閉じるアキト。理想的りそつてきともいえる笑顔が幼いものとなり、口調もまた同じく。

「はあ?? …… 疲れました、ミサネエさ」

あつ、と口を塞ぎ、アキトはためらいながら、

「ミサネエ」

「……まあ、いいわ。それくらいは妥協たきようしてあげる」

美咲はぶつきらぼうに言った。

十

裕子と別れてひとりの帰宅、我が家を囲う塀を見た美咲は目を丸くした。

「おおつ、あれだけ汚きたなかつたうちの塀がこんなにも……」

本来の色を取り戻した塀に触れながら「やるわね」と呟く。

アキトが訪れてからというもの、うれしい驚きの連続れんぞくだった。

まず、屋敷からほこりが消えた。リビングや台所は無論、廊下を使用していない部屋、更には倉庫さえ生まれ変わったようにきれいになった。

次に庭全体が見渡せるようになった。視界を遮る荒れ放題ほうだい、伸び放題だった雑草ざっそうは刈られ、夏直前のプールのように透明度ゼロの池は、

鯉が棲めるようなものへと変わった。

そして今日は、汚れに汚れた万年塀。となると、明日あたりは道場の壁だろうか。

日に日に改善されていく我が家の生活環境に、美咲は気分を良くする。

「うんうん、なかなか有能じゃない。本契約しちゃおっかな」

ごきげんな顔で美咲は門を潜ると、表情が固まった。

「は？」

デンと存在するのは箱。

縦横二メートル、奥行き三メートルの、コンテナ風の木箱が庭に鎮座していた。

「……なに、これ？」

見覚えのない箱に疑問を募らせていると、縁側から美琴の声が上がった。

「おかえり」

「ただいま、美琴。悪いんだけど、ちょっときてくれない」

「わかった」

読書中だった美琴は、読んでいたハードカバーの本を閉じるとメガネを外し、サンダルを履いてから姉のとなりに来る。美咲は箱を指差して、

「コレ、なに？」

「……パイールバナナ」

ポケットから出した伝票を覗き込みながら言う。

たしかに、箱の中央には英語で『パイールバナナ』と書かれている。

うん。間違っではない。間違っではないが、んなこたあ聞いちやいない。

「じゃなくて。いつ、どこからきたか知らない？」

「三〇分前。クレーンで下ろした。個人宛では初めてみたい」

「でしようね。誰宛なの？」

「……わからない」

「見せて」

「ん」

伝票を受け取った美咲は眉を寄せる。

「国際便？ 外国からみたいだけど……なんて読むのかしら？」

書かれた文字は英文体らしいのだが、読めない。しかし工藤宛ではないことはわかった。受取人の欄に書かれた頭文字が、KでもMでもない。

「送り間違いね。引き取ってもらうにしても　それまでどうした
ものかしら？」

美咲は何気なく木箱を小突いた。

すると突如にしてあっけなく外れる側面。

「はい？」

二人に向かつてゆっくりと倒れてくる。そのサイズ、姉妹を押し潰せるだけであつた。

「運んできた人が釘を外しておいてくれた。開けるときは気をつけ
たほうがいい……」

「そういうことは、先に言つときなさい！」

二度目となれば対処も早い。美琴を小脇に抱えると、木箱から距離を取った。

側面が音をたてて倒れる。庭にバナナがぶちまけられた。

「あつちや????」

美咲は顔を手で覆った。

「……弁償かしらね、これ」

「……いくら？」

「考えたくもないわよ。　とりあえず拾うから、手伝つて」

うなづく妹。姉妹は庭に散ばったバナナを拾う。腕一杯抱えると
コンテナの中に戻し、

「……ん？」

いま、バナナの中でなにか光ったような。

首を傾げた美咲は、恐る恐ると両手を木箱の奥に入れた。

「なにこれ……あつたかい？　しかもなんだかふわふわして
目が合った。バナナの底にいるなにかと目が合った。」

美咲が腕を引っっこ抜くより先にバナナが盛り上がり、大量のバナ
ナごと押し倒された。

「うひゃあつ！」

「悲鳴は美咲、硬直は美琴。」

「なに！　なんなの！？　食べられる！？　バナナに食べられるの
！？　ヒツ　……！」

生暖かくてべつとりとしたものが、顔を這った。生理的嫌悪感に、
美咲の顔が真っ青になり、パニック状態に陥る。

「いや！　いや！　くるな、こないで！　バナナ！！　バナナの星
に帰れ！！」

近くにあったバナナを掴んで、伸しかかるそれを追い返すように振
る。ソレは驚いたように横に飛びのき、美琴の背後に隠れた。

「……………犬だ……………」

「……………いぬ？」

思いもよらぬ言葉に、美咲は我に返る。

上半身を起し、目を擦り、ソレを凝視した。

たしかに、それはイヌだった。主な毛並みは灰色。部分部分に生
える毛は薄い黒。瞳は銀一色で、前に突き出た口には鋭い犬歯が並
んでおり、イヌの特徴があった。

「イヌ　なの？」

美咲はなにかひっかかり、疑いの目で妹と見詰め合うイヌを見る。
大きい。二本足で立ち上がれば自分より高いであろうサイズのイ
ヌ。それはもうイヌではなく、

「オオオオオオオオカミイイイイイイツ！！」

大きかった。尾が太かった。足が細かった。牙がやけに鋭かった。
目が怖かった。

「……………トリもいる」

「ば、バカ！ 離れなさい美琴　　つて、トリ？」

美琴の視線を追うと、小山となったバナナの頂点にトリがいた。

美咲の頬がヒクリと引き攣る。

羽があつた。嘴があつた。鉤爪があつた。たしかにトリだった。

トリではあつたが、

「タアアアアアアアアアアアアアアアツ！！」

猛禽類だった。凶悪なツラだった。白の眉斑と黒の眼帯にハンタ

ーの威厳があつた。

絶叫し混乱する美咲。どことなくうれしそうにオオカミとタカの頭を撫でる美琴の姿が拍車をかける。

「狼に鷹　オオカミにタカ！？　なんで！？　なんでバナナから

オオカミとタカが！？　つて言うか、早く美琴を助けないと！！」

そこで、狼と鷹と目が合う。肉食獣VS人間。

「勝てるかああああああああああああああああああああ

ツ！！！！」

脳内小人による脳内議会、満場一致即決の叫びだった。

ビックリする畜生ども。予想外の反応に混乱度UP。

「ええい！　考えるのよ美咲！　あなたにはお父さんの優秀な血が流れているのよ！！」

考える美咲。その顔は知的な美少女だったが、握ったバナナがブチ壊している。

「……………待った。どうして箱からタカとオオカミがでてきたの？　絶滅危惧種よね？」

ある結論が浮かんだ。

「まさか、密輸入品？　手違いでウチに来たの！？」

だとしたら、マズイ。警察に通報したら、取引場と勘違いされて家宅搜索を受けるかもしれない。工房には禁制品が多数あるのだ。隠し階段がバレたら、尋問&逮捕される。

しかし、だからといってこのままというわけにはいかない。ご近

所さんに通報される。ベストなのは努力と根性で鷹と狼を木箱に戻し、素知らぬ顔で運輸会社に返すことか。

いや、ダメだ。釘の状態で一度開いてしまったことがバレている。密輸入業者から口封じされる可能性が高い。そして、もつとも確実な口封じは、死体にすること。

美咲の顔から音をたてて血の気が引いていった。

「四面楚歌!? 名古屋港に沈むの!? それとも臓器を採られるの!?」

絶望的な現状。頭を高速回転させて暗すぎる未来を想像していたら、肩をたたかれていことに美咲は気づいた。

「どうしたんですか、ミサネエ?」

振り返ると、大量のビニール袋を抱えた買い物が帰りのアキトがいた。

「あ、アキト……?」

美咲は小さな希望を見つけた。近日株価を上昇させてきている優良な希望だ。

そうだ、うちにはいま人形がいるんだ。二〇億ユーロの最新型の試作人形。そんな巨額な資金をつぎ込めるのだから、大企業に決まっている。ならばアキトを通して、その企業に連絡すれば、なんとかしてもらえるかもしれない。

友人に大極道がいることをすっかり忘れていた彼女は、希望に絶つた。

「いいところに帰ってきたわ、アキト!!」

木箱を指差す。次に美琴に撫でられる狼と鷹に向けて、

「戻ってきたらコレが置かれてて、中からバナナに紛れて出てきたの! 密輸入の片棒を担がされた可能性があるわ! すぐに」

「……ウォルフにファルケ? えっ、もうついたの?」

「はい?」

哺乳類のウォルフと猛禽類のファルケが、うれしそうに鳴き声を上げて寄ってくる。

「あは。久しぶりだね。元気にしてた？」

アキトは足元でじゃれつくウオルフの頭を撫で、肩に下りたファルケの首をくすぐってやると、同じく歩み寄ってきた美琴がアキトの手を引っ張った。

「……アキトのペット？」

「ボクのしもべです。こつちのオオカミがウオルフ、タカのほうがファルケって言います。ほら、ウオルフ、ファルケ。ちゃんと挨拶して。彼女がキミたちの護るボクのご主人さまの一人、ミコト・クドウ ミコネエだよ」

ウオルフが美琴の手を舐め、ファルケが頬に頭を擦りつける。少女は微笑んで、二匹を抱きしめた。

「……よろしく……」

「……。ねえ、アキト」

顔を伏せた美咲は、静かな声で呼んだ。

「これ、アンタのペット？」

「ですから、しもべです。ボクをサポートしてくれるんですよ」

「つまりは、あなたの持ち物ってことよね？」

「えっと……そう、ですけど……」

顔をあげた美咲はにっこりと微笑み、握っていたバナナをアキトに手渡すと、

「紛らわしいのよッ!!」

鋭いフックがアキトの顎を襲う。

株価は大暴落。本契約は先延ばし決定となった。

午後の六時。

アキトに木箱の解体を命じると、美咲はシャワーを浴び、ジーンズとTシャツの私服に着替えた。そしてリビングに訪れソファーに座り、改めて手を擦る。

「あたたた……」

「大丈夫ですか？」

リビング入り口で、救急箱を抱えて現れたアキトが尋ねる。

木箱の解体は既に終わったのだろう。風呂場に入るときは厚手のツナギを着ていたが、いまはいつものスーツ姿だった。

小走りで近づいてきたアキトに、美咲は顔をしかめながら言った。

「まだ痛むわよ。あんた、ずいぶん硬いのね」

「えっと……一応は、人形ですから」

「……失念してたわね」

「それより、見せてください。治療します」

「いい、かまわないで。それより」

視線を庭に向け、妹が外にいるのを確認してから訊く。

「あの畜生どもはなに？」

「ウオルフとファルケ。肉体一部に機械化処理を施した半機獣動物版サイボーグです。有能なんですよ」

頭を美琴のほっぺに擦り付けるタカのファルケ。ゴロリと横になり腹を見せるオオカミのウオルフ。美咲は二匹に冷たい目を向けたまま、うさんくさそうに呟いた。

「有能、ねえ……まあいいけど。で、その半機獣とやらが、なんでうちに來てるのよ」

「へ？」

キョトンとなるアキト。まじまじと見つめられて、美咲は心地悪そうに身を引く。

「……なによ」

「えっと……ジョーク、じゃないですよね」

「はあ？」

「見てないんですか……」

ため息をついたアキトは、ドイツ製PDAを取り出すと手渡してくる。不審な顔で受け取った美咲が画面を覗き込むと、PDFファイルが起動していた。

「これがなに？」

「これは仮契約に関する各種規定とボクとその周辺機器の情報が記

されたPDFです。必ず目を通してくださいって、仮契約の際に渡したんですけど……」

「あ??、そーいえば、もらった記憶があるような、ないような……」

「……閲覧してませんね……」

「ア、アハハハ」

誤魔化し笑いを浮かべていると、アキトは液晶画面を指差した。

「ここをクリックしてください」

カーソルを動かし、指差された場所でクリックする。規定の一つが日本語で表示された。

「『規定二十九項。契約にあたってYr-03が所有するすべての部品と道具が配送される』? あの二匹って、あなたの道具扱いになるの?」

「主人のボクが人間じゃないですから。それにウオルフとファルケはボクの機能を補助するためのオプション的な役割もあります。位置的にはゴーレムや人形と同じですよ」

「ふ??ん」

そんなもんかな。美咲は思いながらPDAを操作する。『半機獣』という項目が目に入り、クリックしてみた。

「えーと、なにになに 『Yr-03には専属のサポートユニットがあります。サポートユニットはごくごく普通の身近にいる動物ですが、特殊な処理が施されており、買い物から偵察、お子様の遊び相手から要人暗殺まで幅広い』 って、アホかッ!」

さわりの段階でアキトに喰いかかる。

「どこの世界にここまで両極端なペットがいるの!? そもそもタカとオオカミって凶暴極まりない肉食獣じゃない!!」

「アハハ、違いますよ??」

珍しくうつろたえないアキト。自信を持って訂正する。

「オオタカとハイイロオオカミです」

「余計にタチが悪いわ! 絶滅危惧種と元絶滅危惧種じゃない!

日本のどこに、ここまで目立つ猛獣を飼って一般家庭があるの!？」

「……いませんか？」

「いてたまるか!！」

「で、でも日本には一〇〇匹以上の動物を飼うヒトがいるって……」

「ムツゴロウ王国と比較するんじゃないの! あれは別よ、別!

「つか、いくらムツゴロウさんでもワシントン条約に引つかかる動物は飼っていないわよ!！」

「そ、そうなんですか。でも、大丈夫ですよ」

「どこが!？」

鼻息荒くつつかかる美咲に「と、とりあえず聞いてください」とアキトは提案する。いまにも飛び掛りそうな体勢だと気づいた美咲は、コホンと咳についてイスに座りなおした。

「……いいわ。聞いてあげる」

「ありがとうございます。まずはウォルフですけど、あのコはシベリアンハスキーで通ります。よく似てますし、生物学者や獣医でもない限り違いはわかりません。それにそもそも、ハイイロオオカミは日本に生息していませんから、たとえ見られても、オオカミ犬だと言えば問題ありません」

「タカ ファルケだったけ? あれはどうするの、こればかりは言い逃れできないわよ」

「ええ。確認されれば言い逃れはできません。けど、あくまでも見つかれば、の話です。高度一〇〇〇フィートを飛行するファルケを、タカと見破れるヒトなんていませんし、クドウの家は三メートルの塀で囲まれています。人目につくことはまずありません」

「そりゃそうなんだけど……」

いまひとつ、安心できない。アキトの言うことにはそれなりの説得力があるのだが、机上の空論と言っべきか、決め手にかけるのだ。

「安心、できませんか？」

「う???ん、ちよつと、ねえ……」

「なら、これを見て安心してください」

アキトはウォルフの背に乗ったファルケに視線を向ける。気づいたファルケは縁側に飛ぶと、器用に頭で窓を開け、これまた器用に雑巾で足を拭くと、彼の肩に飛んできた。

「ファルケ、光学擬態タイプ4」
肩にとまったファルケの体に紫電しやでんが奔る。一瞬の輝きの後、全身が空の色に変わった。

「うそ。光学迷彩こうがくめいさい!?」
「その一種です。色を変えるだけで、さすがに完全な透明化はできませんけど。これで充分だと思いますよ。ウォルフもできます」
「……たしかに、充分よね」

色を変えた二匹を見て狼や鷹とは気づくものは少ないだろう。現在開発中の技術を目の当たりにして、美咲はいまさらながらアキトが最新鋭の人形であることを思い出し、ようやく固い表情をほぐした。

「わかったわ。納得した」
伝染して、アキトもニヘラと笑う。

「よかったあ。これで次の話に移れますよお」

「まだなんかあるの?」

「えっと、ですね。カードの使用許可が欲しいんです」

美咲の顔に固さが戻る。

ハウスキーパーとしての仮契約の際、生活費は月々アキトの口座に振り込むことになっていた。生活費が途中で足りなくなった場合には、美咲の許可を得ることで工藤家の口座のキャッシュカードが使える。

そして生活費は、つい昨日に振り込んだばかりであった。

「あっ、ち、違うんです! 今月分はまだたくさん残ってるんです!」

「じゃあ、なんでよ」

「故障した電化製品が多いんですよ。特にトースターなんて、使い物になりません」

アキトが来るまで炭化^{たんか}した朝の主食を提供していたトースターを
思い出した。

「あー、調子悪かったもんね。あのトースター」

「トースターだけじゃないんです。掃除機にドライヤーにアイロン
にエアコン。どれもいつ壊れてもおかしくありませんし、雑貨品^{ざつかひん}だ
とホース、バケツ、鎌が買い替え時期です。ほかにも色々とありま
すから、この機会に一気に買い換えようと思うんです」

「ふーん。どれくらいかかるの？」

「えっと、こちらのリストに詳細を書いたんですけど……」

おずおずと渡される。必要度合いがABCに別けられたリストを
受け取った美咲は、総費用額を見てぎょっとした。

「こ、こんなに!?!」

「大型電化製品の大半の寿命が過ぎてるんです。丁度、商店街で春
の家電製品フェアをやってますから、出費を抑えるためにまとめて
買いたいです」

「う???ん……」

大量の家電を買うのはさすがに勇氣^{ゆいき}がいる。渋い顔^{しぶがほ}の美咲にアキ
トは別の提案をした。

「ならBランク以上のものだけでもお願いします。電化製品のほう
は、修理してみます」

「できるの?」

「パーツがあれば、ですけど。メーカーももう生産していませんか
ら、粗大ゴミ処理施設やリサイクルショップで探すことになると思
います」

「やめなさいよ、そんなみみっちいこと。わかったわ、許可す
るわ」

「ホントですか! なら、これがボクのオススメの型式です。耐久
年数と信頼性を重点に選びました。ほかにも候補を上げておきまし
たので、好きな型にチェックを入れてください。決まりしだい買い
に行きます!」

と、なにがうれしいのかホクホクの笑顔で出される新たなリストは、数字とアルファベットのみ。機械ならではの記憶力を持つアキトにとっては、それが一番わかりやすいのだろうが、美咲は人間だ。わかるはずがなかった。

しばらくジツと見ていた美咲は、おもむろに紙を破いた。

「ああ！ ど、どうして……」

「あたしって実物を見てからじゃないと、信用できないタイプなのよね。いつしよに行くわ。今日は金曜日だから、明日でいいわよね。学校ないし」

「で、でも、これってボクの仕事ですよ。ミサネエに手伝ってもらうわけには……」

「いいじゃない、別に」

「よくないですよ。ボクの実在意義に関わりますう……」

泣きそうな顔で言うアキト。美咲は少し考えると、庭の妹に声をかけた。

「美琴」

「……なに？」

「明日、買い物に行くけどあんたも行く？」

「本屋さん、寄る？」

「好きな本、一冊買ってあげる」

「行く」

即断する美琴。美咲は微笑むとアキトに視線を戻した。

「と、言うわけで。明日は家族と使用人揃って買い物ね。文句あるの？」

「うう……」

批判がましい目。いつになくしつこい。しかたなく、美咲は主として言った。

「アキト、これは命令よ」

命令。人形である以上、命令は絶対だ。

「あんたはあたしたちと一緒に買い物に行く。わかった？」

「……Ja」

「よろしい」

不服ふぶくそうなアキトとは対照たいしょうてき的に、美咲は満面の笑みを浮かべた。

十

ボクはなんのためにきたんだろう。

繁華街はんかがいの喫茶店きっさてんにてアキトは思う。

自分の役目は工藤家の世話。家事のすべてを担い、主人を補佐ほさするのがその存在理由だ。

従って、家の雑務は自分の仕事であり、まったくもって主人が気にする必要はない。そもそも人形は、主人を煩わづらわせる物事を片付け、研究や趣味に没頭できるよう作られたのが、そのはじまりなのだ。

それなのに。

「いやー、今日は買ったわねえ」

ご満悦まんえつの様子で、美咲はアイスコーヒーをすすりながら言う。

「まさかスーパールのムラタが開店八〇周年記念をやってるなんてラッキーよね」

ほくほく顔の美咲は大量の食料品をぽんぽんとたたく。

「ちよつとハリキリ過ぎたわ」

「……………」

アキトのメモリに浮かぶのは、購入した必要物資の配送手続きを終えたあとのこと。さあ、これらからどうしようか、と美咲が言ったのちの出来事だ。

『八〇周年企画、現品限りの一律八〇円セール！』

そのPOPを見た瞬間、美咲は鬼となった。

「美琴、ついてきなさい！ アキトはそこで待機！ 一歩でも動いたら解約よ！」と、叫ぶや否や、姉妹はセールというなの戦場に飛び込んだ。

隙間ともいえない隙間に無理やり割り込み、セールス品を奪い取

る。同じ商品を求める手は最小限の動作で払いのけ、かごがいつぱいになると「絶・対・死・守！」の言葉と共に投げよこして、また戦場に飛び込む。

繰り返したのは姉妹合わせて計七回。ハリキリ過ぎもいいところだった。

そして、それは人形のやることで、主人のすることではない。絶対、ない。

「あの、ミサネエ。さっきのセールのことですけど……」

「ん、なに？」

「あれはちよつと、どうかなあ、と思います」

「？」

「あれは、ボクの仕事です。一言『行け』って命じてくれれば、ボクはどんな場所にも行きますし、どんな任務も果たします。だからその、あのようなことは……」

「あんだ、あの状態で買い物できる？」

「うっ……」

「できないでしょ。あなたにやムリよ。氣迫が足りないもの」

「い、いまはできないかもしれませんが、すぐにできるようになります！ 経験さえ積みめばボクにできないことは少ないんです。だからミサネエは、もっと別のことをするべきだと、ハウスキーパーのボクは思います」

「別のこと？」

訊かれて、アキトは周囲を見渡す。聞き耳を立てている者、お手洗いにいった美琴が戻ってこないことを確認してから、言った。

「えっと、音楽鑑賞や絵画鑑賞。スポーツや勉強や読書や 傀儡術の鍛錬、です」

「……傀儡はなんとなくやってるだけよ。本職ほんしやくにするつもりはないわ」

不機嫌な顔で美咲は言った。

どうやら傀儡に関することはタブーらしい。アキトは理解したが、

あえて言った。

これは、知らなければならぬことなのだ。

「ミサネエは、傀儡の才能があります。基礎もしっかりしてて、合理的なものです」

でも、と続ける。

「……指関節しゆせつに入ると、その質が極端きよくたんに落ちます。まるで幻糸を扱う無線傀儡からは、独学で覚えたみたい……」

「……」

「ミサネエ。お師匠さまは、いないんですか？」

問いかけに、怒気どきを含んだ視線で美咲は応えた。

「アキト、あんた何様のつもり？」

「……えっ？」

「何様のつもり、って聞いてンのよ」

アキトを睨みつけ、怒りに震える声をぶつける。

「あんたは人形。あたしは主人。主人のプライベートに干渉するの
が、人形の役目なの？」

「……す、すみません……で過ぎたまねを、しました……」

「二度とその話をするんじゃないわよ」

吐き捨てると、美咲はメインストリートに視線を向ける。

美琴が戻ってくるまで、ふたりが言葉を交わすことがなかった。

買い物を終えての帰り道。

子供連れの夫婦や若者でこった返す商店街を進む美琴に、美咲は訊いた。

「今日は楽しかった？」

「うん。本、見つかった」

ぎゅっと本を抱く美琴。その笑顔につられたように、美咲の顔に
笑みが浮かぶ。

が。

「あ、あの。ミサネエは、楽しめました……？」

「……ぼちぼちね」

一瞬にして貼り付けられるのは不機嫌の大文字。歩幅ほはばが僅わずかながら大きくなり、戦利品を抱えたアキトを置き去りにするよう進んでいく。

美琴が戻ってから三〇分、話しかければ返ってくるのは、合成音のような言葉。表情もまた一世代前のアンドロイドのごとく固い。

アキトは歩行速度を上げると、美咲に並ぶ。そして謝る。

「ご、ごめんなさい」

「なんで謝るのよ」

「えっと……ミサネエが怒ってるみたいですから」

「怒ってなんかいいわよ」

「さ、さっきのことはホントにごめんなさい。もう二度と訊きません。だからその、機嫌……直してくれませんか？」

「だから、怒ってなんてないわよ！」

アキトの顔を見ようとせず、大股でずんずん進んでいく美咲。取り付く島もないとは、このことを言うのかな。

いくら謝っても返ってくるのは不機嫌の文字。打開だかいのきっかけも得られない。どうすれば機嫌を直してくれるんでしょうか。

動きを自動化させて考える。そのためだろう。対応が遅れたのは。

「きゃっ！」

短い悲鳴と共に上がるのは柔らかいものがぶつかる音。内なる世界から外の世界へと意識を移行させたアキトが見たのは、尻餅しりもちをつく美咲と駆け出す男の姿だ。

アキトはすぐさま美咲に駆け寄った。

「ミ、ミサネエ！ 大丈夫ですか!？」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「イタタタ……なんなのよ　って、あたしのバツク！」

美咲の叫びに、アキトは一〇秒前の視覚データを再生させる。人ごみから現れた男が美咲を突き飛ばすと、バツクを強奪しやうだつする姿が映

っていた。

ひったくり。手荷物を奪う強盗の一種だ。

即時解決の対応方法はひったくりの捕獲。難しい場合は警察へ通報し、通信会社と銀行に口座の即時凍結を命じるのが一般的だ。

マニュアルに従い、荷物を置いたアキトが追おうとすると、

「なめんじゃないわよ、このひったくりがーがー!!」

バネ仕掛けのおもちやのように立ち上がった美咲が、全身から怒りを放って走り出す。

「どいたどいた！ 邪魔よ、邪魔！ 邪魔っていつてンでしょッ！
！」

セールス戦争の鬼の再来だった。

美咲はざわめく人ごみの中に飛び込むと、拳にものを言わせて道を作る。

「あつ。ま、待ってください！」

我に帰ったアキトが追いかけてようとすると、

「あなたはそこで荷物番にもつばん！ 動くんじゃないわよ!!」

血走った美咲の目。命令に、体が硬直してしまう。

「待てっつってンでしょ!!」

響く怒声に唸る拳。周囲からどよめきが上がり、それを広げながら美咲は消えて行った。

「……行っちゃった」

「ど、どうしましょう?」

アキトがおるおるとする中、美琴は冷静に問題解決に動く。

「……交番。行ってくる」

「そ、そうですね。ならボクも」

「アキト。待つ」

言って、美琴は人ごみの中に紛れまぎ、消えた。

これで困ってしまうのはアキトだ。荷物をもったまま、ひとり固まってしまう。

本来ならば一番に追わなければならぬのに、『待て』と命令さ

れてしまった。

命令には絶対服従。主の危機に関してのみ制限は解除されるが、今回の場合は生命に関わるほどの危機になる確率は低い。

それ以前にだ。この人ごみでは本来の速度がだせない。前回と同じよう、追いつくどころか離されるだけという結果は、目に見えていた。しかもアキトは、ひったくりの姿を既に見失っている。

「うづ……どうしましょう??」

考えるアキト。最良の結末は、美咲より先にひったくりを見つけ、取り押さえることだ。

時間が勝負である。時が過ぎれば、ひったくり捕獲の手間は上がり、成功率は反比例して低くなる。そして、この人ごみを潜り抜ける『足』と、ひったくりを見つける『目』が必要不可欠。更には制限に引つかからずに行動する必要もあった。

「……出番、みたいですね。待機させておいてよかった、早くもチャンスです」

手に持った買い物袋を見ながら、アキトは呟いた。

購入物は大半が配送。今現在持つ買い物袋の中身は、美咲と美琴が手に入れたもの。

今日は役にたっていない。しかも昨日、ウォルフとファルケを紹介したときの美咲の顔。

胡散臭い。それ、役に立つの？

思い出したアキトは、よく通る声で呼んだ。

「ファルケ！」

一〇秒もかからず飛来したのは大鷹。
獰猛な猛禽類の出現に、周囲から悲鳴が上がるがアキトは無視する。時間が惜しい。

「ミサネエのバックを奪ったドロボウを見つけてるんだ」

無線回線で画像情報を送ると、ファルケは低く鳴いて了承の意を伝えた。

「いいコだね　行け！　クドウ初の任務だよ、ミサネエとミコネ

エにキミの力を見せつけるんだ！」

アクトの言葉にファルケは力強く羽ばたいて応える。テンションが高い。飛翔するとあつというまに見えなくなった。

光学迷彩により、ファルケが空に溶け込むのを視認すると、近くの細い路地に目を移す。

「ウォルフ。キミも出番だ」

日陰になっていた路地裏からハイイロオオカミが現れた。また悲鳴が上がるが当然無視。

「ファルケと協力してドロボウを叩きのめすんだ。バックには傷一つつけちゃいけないよ」

ウォルフは吠えて了承を伝えると、身を低くし疾走。ファルケに負けてはなるものか、という意気込みが見える走りだ。かなり速い。

「うん、いい気迫だ。これならすぐに解決しますね」

腕を組んがアクトは呟く。その顔が実に誇らしげなのは、自慢のしもべが全力で命令を遂行しようとしているからだろう。

アクトが誇る忠実な二匹の半機獣。

ファルケこと天空の覇者のオオタカは、『目』を強化した情報収集を得意とする支援鳥。

ウォルフこと誇り高きハイイロオオカミは、『足』を強化した狩りを得意とする戦闘獣。

人語を解し、理性と野生を両立させた二匹に捕らえられぬものなどない。

「あとは待つだけですネ??」

無数の好奇の視線に曝されながら、アクトは言われたとおり待機する。

遙か遠くから悲鳴と怒声　サイレン音が上がったのは、捕獲が終了したころだった。

商店街から二キロほど離れた再開発区域。

東海尾張大震災の爪痕が未だ残る区域内で、美咲は怒声を上げた。「まったく、信じられない！」

肩を怒らせ歩いてきた美咲は、振り返るとまた怒鳴った。

「あそこまでやる、フツー!?」

「……ごめんなさい」

美咲から距離を置いて歩くアキトは、頭を下げた。

「でもですね、クドウにきて初の実戦だったんです。意気込みが強すぎただけで、彼等なりにミサネエの役に立とうと」

「黙りなさいッ!」

言われたとおり口を閉じるアキト。美咲は主の斜め後ろを歩く、二匹の猛獣を睨んだ。

「それ以前の問題よ! アレはなに、アレは!」

『アレ』とはバツクを盗んだ男との追走劇が終盤に入ったときのことである。

男が袋小路に逃げ込んだとき、事は起こった。

悲鳴染みた男の絶叫 飛び込んだ美咲が見たものは、盗人を襲う

オオタカとハイイロオオカミの姿であった。

電柱の後ろでビクつく二匹に美咲は叫んだ。

「あんたら、食い殺すつもりだったの!」

腕を食い千切ろうとしていたウオルフと目玉を抉り出そうとしていたファルケは、主共々(ともども)『しゅん……』と縮こまる。

美咲が止めなければ惨事となっていただろう。

「大体ね、なんであんたらがここにいるのよ? 家で留守番してたんじゃないの?」

二匹は揃ってアキトを見た。美咲の頬がひくつく。

「やっぱりね。……あんた、あたしに恨みでもあるの?」

「えっと、その、あの……ごめんなさい」

また、アキトは頭を下げる。美咲は特大のため息をつくくと、揃って落ち込む一体と二匹から目を外して歩き出した。

ホント、信じられないわ。

溶接の音やらドリルが鉄板に穴を開ける音やらが反響する路地で、美咲は頭を抱えた。

この人形とそのお供、妙なところでズレている。

たとえばさっきの続きから上げれば、美咲に怒られたウォルフとファルケはこともあるのか、逃げ出すと大通りに出たのだ。人ごみを掻き分けて、慌てて追ってみれば、アキトの後ろに隠れていた。

アキトもアキトでズレている。大勢の人にウォルフとファルケと接する姿を見られても、ポケ????と突っ立っていた。警察官の声が聞こえていたと言うのに。

引き摺ってでも逃げ出さなかったらどうなっていたことやら。

美咲は思考を進める。

礼金と家事からの解放に目が眩み、仮契約してしまったのは間違いだっただろうか。今のうちに解約したほうがいいのでは？

真剣に考えていると、遠くからサイレン音が聞こえた。

内心、ビクリとしながらも平静を装って、アキトに尋ねる。

「アキト。警察の動きはどう？」

警察の無線を傍受するアキトは言った。

「えつとですね　まだ商店街周辺をメインに搜索してますね。聞き込みを行っているみたいですけど、あそこは人通りが激しいですから。難航してます」

「あのひつたくりは？」

「全治一週間の軽傷だそうです。ただ、混乱状態に陥っているらしくて、事情聴取もできないみたいですね。あ、五〇メートル先を左です」

アキトのナビゲートに従い、現れた分かれ道を曲がりながら安堵の吐息を吐く。

「大事にならなくてよかったわ。美琴はどう？」

交番に行っていると知った美咲は、ケータイで美琴に連絡を入れるとそのまま帰るように言ったのだ。そのころはまだ。猛獣騒ぎと

物取りは別件として扱われていたらしく「ひつたくりはバックを捨てて逃げた。取り戻した」と言うとおつさり帰ることができた。もっとも、この騒ぎで警察官が借りだされたからだろうが。

「もう家についてますね。携帯電話のGPSで確認済みです」

「なんとか逃げ切れそうね。……アキト、あんた足のつくようなものは残してないわよね」

「はい。荷物はひとつも落してません」

「へえ。あたし、けっこうマジ走りだったんだけど……」

「ボクのバランスは優秀ですから。……次の角を右です。その先のT字路を左に曲れば、庄内川にでます」

曲がるとすぐに、『ト』の字を描くT字路が現れた。

朽ちたビル群が消えて、傾いた太陽と鉄橋が目に入る。橋を越えれば、家はすぐだった。

美咲は狭苦しい裏路地から抜け出し道路に出ると、足を止めて振り返った。

いてはならない獣たちに、そろそろ隠れるよう、命令しようとしたのだが、

「ミサネエ！」

切迫感の入った声と反対側からクラクションの音。

慌てて振り向くと、でかいダンパーが自分に向かって突っ込んでくるところだった。

迫り来る巨大な質量。

甲高いブレーキ音が耳をつんざき、暴力的な風が襲ってくる。

硬直してしまった美咲の体をなにかが包み込んだ。

「act skin set maximum. 衝撃に備えてください！」

衝撃が、美咲の体を貫いた。

「う……あ……」

吐き気を堪えながら、美咲は目を開いた。

頭はグラグラ、背中や首が痛み、胸も苦しい。

思考が定まらない。まるで頭のピンボケだと美咲は思う。明るいような、暗いような。浮かんでるような、沈んでるような。ストロボの如く明滅する世界は、酷く不安定だった。なんであたし、ここにいるんだろう……？

思い出そうとするがダメ。どうも記憶が飛んでいる。

とりあえず体を動かそうとして、動かないことに気づいた。

動かない……違う……固定されてる……？

そこまで気づくと、ようやくもどりはじめる視覚に感覚。

世界は暗かった。そして、妙に硬かった。

鉄や岩の硬さじゃない。解凍し切れていない冷凍肉みたいな硬さ。少しだけ熱を持った硬さに体を挟まれていた。

美咲は無理に体を起こそうかとは思わなかった。それはたしかに硬く熱を持っていたが、

「……あつたかい……」

そう、あたたかい。懐かしい温かさ。ずいぶんと、久しぶりなぬくもり。失ってしまった温度。美咲は甘えるように、それに頬擦りをした。

「なんだろ……これ。……いいや……なんでも……」

姿勢をラクにして、美咲は硬いなにかに指を這わせる。と、別のなにかに触れた。

それは反転して柔らかいもの。ぬくもりを宿しており、妙に長い。

ウインナー？

どこかで触ったことのあるような。そう、たしか、ずっと昔に、お父さんと一緒にお風呂に入ったときに

「ミサネエ……ちよつと、恥ずかしいですう……」

そこで美咲の頭は覚醒した。顔が見る見る内に紅くなり、目が血走り、パクパクと酸欠の金魚のように口を開閉させて、

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiやああああああアアアアアアアアア

アアア

ッ！！！！」

いつぞやの地下室とは違う別種の悲鳴。それはたとえるならば乙女特有のものであり、恐怖ではなく、多大な嫌悪感とほのかな喪失感からくる悲鳴だった。

顔を赤から青に変えた美咲はズバッ！と体を起こし　膝を崩した。

「わぷっ」

つんのめるとあたるあの硬い感触。鼻を打った美咲が涙目で顔を上げると、アキトが覗き込んでいた。

「大丈夫ですか？」

声を聞いて、顔がまた紅くなる。慌てて離れようとするが、

「あ、あれ？」

下半身が動かない。どれだけ動かそうとしても、うんともすんともしなかった。

「もしかして　腰が抜けちゃったんですか？」

「ち、違うわよー!!」

キッとアキトを睨んで口を開くと、美咲は目を丸くした。

美咲の瞳に映ったのは、アキトの背後のへこんだ鉄骨。

ようやく、思い出した。

自分がダンプに轢かれたことに。その直前、アキトが割り込んで庇ってくれたことに。

「……あ、あんた……大丈夫？」

「はい。この程度の衝撃でしたら問題ありません。アクトスキンも稼働しましたから」

「あの程度って……ダンプにぶつかったんだよね？」

「正面衝突でした」

「で、無傷？」

「少なくとも外傷はありません。念のため、低稼働モードに移行して、自己診断プログラムを走らせているところです」

美咲は呆れてしまった。

ダンプに撥ねられ、鉄骨をへこましながら無傷。どうやらこの人

形、内部骨格そのものから規格外らしい。

「大したものねえ　それで、ここどこ？」

「建て替え途中のビル内部ですね」

「ああ、どーりで……」

あたりにはアキトの背にするような鉄骨が無数に立ち、様々な工事用器具があった。一箇所だけ破れているビニールシートは、吹き飛ばされてきた際に破ったのだろう。

騒ぎを聞きつけた作業員と野次馬たちが集まりだす。彼等は破れた養生幕を見て驚き、抱き合うふたりを見て目を丸くした。

「あ、あはは……失礼してまーす」

美咲が引き攣った愛想笑いを浮かべると、作業員たちが一斉に顔を青くした。

「つて、なによ。その反応」

柳眉を逆立てる美咲だが視線が自分ではなく、その頭上に集中していることに気づいた。

「上？　上になにが」

美咲の顔が作業員同様、青ざめた。

「えっと、一難去つてまた一難　ですよね。この状況を指すことわざって」

アキトはのほほんと言う。

ふたりの頭上では、鉄骨でできた骨組みの一部が崩れはじめていたのだ。

「これつて、さすがにヤバくない？」

「ヤバイです。こんどは後ろに跳んで衝撃を殺せませんし、連続であたるのはちょっと」

「冷静にコメントしとる場合か！　さっさと逃げるわよッ！！」

「そ、そんなこと言われても、自己診断中で電動筋の出力が上がらないんですよ」

アキトが絶望的なことを言うと、イヤな音をたてて鉄骨が落下を開始。

悲鳴を上げる美咲をアキトが抱き寄せる。

「ちよ、なにを」

「大丈夫です」

前髪まえがみが触れそうなほどよせた顔に微笑みを浮かべて、

「ミサネエは、ボクが守ります」

とくん、と美咲の心臓が脈打つ。身長差しんちやうさの関係上、いつもは見下ろす形のアキトを見上げているからだろうか。妙に大人びて見えた。

「ボクはそのためにいるんです。だから、心配いりません。大丈夫です」

根拠こんきょの無い言葉だが、美咲は信じることにした。アキトの腰に腕を回し、目を瞑つむる。

アキトは美咲の体を抱きしめると、神に祈るよう、言葉を紡ぎ始めた。

「ボクは詠う、幸福の四葉よつたの詩を。ボクは願う、ユルのルーンの加護かごを」

不思議な声。不思議な響き。不思議な詩。

それは子守唄こもりうたのようであり、美咲の体から恐怖が抜ける。

「幸(Der)運(vier)の(bl?t)四(trigo)つ
流暢りゅうちやうな独語で呟くと、鉄骨が大地に激突する轟音とんねんが響き渡った。

十

「……大変」

リビングにて、話を聞いていた美琴がそんな感想を漏らす。

「はい。大変でした」

笑顔でうなずいたのは、エプロン姿のアキトだ。

「野次馬に囲まれて、しかもおまわりさんまできちやいました。逃げるのが遅れてたら、もっと大変なことになっていましたよ??」

彼は野菜炒やさいいためを作りながら、続ける。

「運が良かったです。祈りが効いたんですね。おまわりさんからも逃げれましたし、鉄骨はぶつかりませんでした。あとちょっとで、あたるどころだったんですよ」

「……奇蹟」

「天国のお母さんが護ってくれたんですね??」

「……………」

ソファーに寝そべっていた美咲は、亡き母に感謝するアキトを見て思う。

あれ、ホントに運が良かっただけ?

顔を上げたときに見た光景は、運がいいの一言では片付けられないものだった。

自分たちを中心に、円を描くよう突き刺さった鉄骨の数々。それはまるで、ふたりだけを避けるかのように、落ちていた。

アキトがなにかをしたのだろうか。

でもなにを? どうやって?

納得のいく答えが見つからない。寝返りを打った美咲は、アキトの横顔を見る。

箸を動かしながら火の通り具合をたしかめる人形。「……おいしそう」と覗き込む美琴に「自信作です。味見しますか?」と言いながら野菜炒めを小皿に乗せて渡している。

美咲はふと思う。

いったいどんな傀儡師がアキトを作ったのか。

喋り考え笑う。この限りなく人に近い人形をなぜ作ったのか。

脳裏をかすめるのは栗色の長髪をポニテールにした女の姿。

「まさか、ね……………」

美咲は頭を振ると可能性を否定した。

ありえない。あの女がこんな人形を作るはずがない。

あの女にとって、人形など道具に過ぎない。意見を言うような人形を作ったりはしない。

誰が作ったかはわからないが 少なくとも只者ただものではないことは

たしかだった。

十

街の中心にあるホテルの最上階。そこに女はいた。

照明の消された部屋の中、彼女はコーヒを片手にノートパソコンを覗き込んで笑う。

「Der vierbl?ttige Klees lantern・四葉のクローバーの盾、ね」

唯一光を放つディスプレイに浮かぶのは、夕暮れに起こった事故の映像だ。

建設途中のビルの一部が崩壊。数本の鉄骨が抱き合う男女の座り込んだ場所へと吸い込まれるように落ちて行き ずれる。

ふたりを潰すはずの鉄骨が、男が左手を上げると同時に軌道をずらす光景が映っていた。

それを何度も何度も繰り返し見つけた女は呟く。

「風を障壁状に発生させる叙術? それとも不可視の腕を作り出す複製術かしら?」

指を噛みながら続けるものの、推測の域をでない。

「実際に見ればわかるのですけど……。それは後日の楽しみにしましょう。にしても、四葉のクローバーなんておしゃれな術」

女は熱い視線をディスプレイに映る男へと向けた。

「気に入りましたわ。Yr-03 アクト・ユル・アイデ」

もう一度笑い、女は前祝とばかりにコーヒを飲む。

途端、笑顔が消えた。

「……………苦いですわ」

第三章 暴かれた真実

工藤家に訪れて五日目の夕刻。買い物済ませたアキトは、庄内川がわに訪れていた。

太陽はすでに落ちている。錆びた街灯がいでんが弱い光で照らす橋の下、辺りに人がいないことを確認したアキトは、頼まれていた葵屋あおいやの限定シュークリームをベンチに置いた。

そして、言う。

「今日は新月ですね。月はでてませんし、辺りには人家も人もいません」

風が吹く。癖のある髪を揺らすアキトは、一度区切きりってから言った。

「えっと……もう、いいんじゃないですか？」

風が止むと起こる変化。

アキト以外に入っ子ひとりいなかった河原かわらに、三つの人影が現れた。

今年の流行しそうな服を着た女。リクルートスーツをピシリと着込んだ男。ジーンズはを穿いた少年。性別も年齢もまちまちな三人だ。がただひとつ、共通点がある。

「 傀儡師、ですか」

それは人形だということ。

曲らぬはずの関節を曲げ、見えないはずの瞳でアキトを見る。

三人は、どこにでもあるマネキンだった。

それぞれが安っぽいナイフを持ったマネキンは、一定の距離を保ってアキトを囲む。

「あの、話し合い、というわけにはいかないんですか？」

提案への返答は、攻撃だ。

リクルートスーツのマネキンが正面から襲いかかる。腰だめにナイフを持ち、全身でぶつかろうとしてきた。

「ダメ、ですか……」

諦めると始まる動きは素早い。

アキトの足から出された横蹴りがナイフを握る腕を砕き、リクルートスーツのマネキンが衝撃で体勢を崩すと、その顔に肘が入る。

「ごめんなさい」

謝罪の言葉は、マネキンの頭を粉砕する音と重なった。

頭部を失ったマネキンが力なく崩れ落ちると、女と子供のマネキンが走りだす。

左右からの挟撃。しかしアキトは冷静に対処する。

僅かに早い女の頭をハイキックで破壊すると、身を低くして背後に当身。後ろから迫ってきた子供の体が吹き飛び、ベンチに激突してバラバラになった。

「ボクを戦わせないください。嫌いなんです、争いは」

沈痛な顔を土手の方角に向ける。闇の中から、二つの人影が現れた。

「初めまして。Y r - 03アキト・ユル・アイデ」

街灯の領域に踏み込んだのは両手十指に指輪を嵌めた女だった。

美女と言っても決して過言ではない。鋭いカットイングがなされたサファイヤのような瞳に艶のあるブロンドヘア。スタイルは美咲とは比較にならないほどよく、濃い赤のスーツ越しに女性であることを強調していた。

そんな美女の後ろに立つのは禿頭の黒人男性だ。

かなりの巨体だ。背はアキトよりもずっと高く、体格も華奢な彼とは対照的にかっしりとしている。特に腕にいたっては二周り以上もあり、少しでも筋肉に力を込めれば、真っ黒のスーツはあっさりとはちぎれるだろう。

アキトの背が低いこともあり、まるで巨人のような男だった。

どこぞの令嬢とそのSP。そんなふたり 一人と一体を前にし

て、尋ねた。

「……なんのようですか？」

「さっそくですが、試させてもらいますわ。 G o t o F l

e a i s v e i g g !」

女が左の五指を揺らすや否や走り出す巨人。

その巨体からは想像もつかない速さで一氣にアキトに迫ると、巨大な拳を振り下ろす。

轟音しゅうおんに震える川の水面みなも。砂利じゃりが盛大に舞い上がり、小石の雨を降らした。

直撃すればただではすまない一撃。だが、直撃さえしなければただですむ一撃でもある。

「出力の割に速いですね」

間一髪かんいっぱつ、皮手袋に包まれた拳をなんとか受け流したアキトは、巨人から距離をとってコメントする。声こそ静かだが、表情は胡乱うろうんだ。理由は口角くちかくから流れる一筋ひとすじの水銀だろう。

「……どんなトリックですか？ 腕の軌道が変化したように見えたんですけど……」

視覚のみのデータだが、関節は人間と同じだ。完璧に受け流せるはずだった。

だができなかった。打点だてんをずらされ、頬かすを掠かすった。逆関節や球体関節ではないのにだ。

アキトが無傷に近いことに驚いた様子もなく、女は言う。

「傀儡師が隠し事を教えると思つて？」

「ですよねえ」

アキトがニヘラと笑つと、女は目を丸くする。つられたように笑みを浮かべた。

「噂は本当のようですね」

「うわさ、ですか」

「傀儡師の制御を必要としない人形が作られた。その人形は喜怒哀楽きどいあいを持ち、人間と見間違みまちがうほど精巧せいこう」

「上辺^{うわへ}だけですけどね」

「それだけでも充分ですわ。このリノア・グレイン・フィーラムが求めるには」

金髪の女　リノアはまた五指を揺らす。

「踊りなさい、フレースヴェルグ！」

巨人　フレースヴェルグの瞳が一度輝くと、アキトに飛び掛り、拳を振り下ろす。

アキトは後ろに跳んで回避。三メートルほど距離を稼ぎ、懐から黒曜石の埋め込まれたシュバイセン　ナタの形をした超電導^{ちゆうでんどう}チエーンソーを取り出すと、スイッチを入れた。

そして、追撃してきた巨人の懐に飛び込み、隙だらけの横腹に一閃。火花が散る。

「……だ、二層^{ダブル}骨格^{フレーム}!？」

驚いて、フレースヴェルグの脇からその背後へと逃れるアキト。

ゆっくりと振り返った巨人の脇腹からは、鋼の色が見えていた。

「戦闘用の重量^{ヘビ}級^{ドール}人形。とんでもないものを愛用^{あいよう}してますね」

重量^{ヘビ}級^{ドール}人形。戦闘用の重装甲人形だ。銃弾をモノともしない防御力と建機並みのパワーを兼ね備えた強力な人形で、戦闘以外に使用道のない矛盾した存在でもある。

そんな重量^{ヘビ}級^{ドール}人形を操るリノアに、アキトは呆れながらも警戒を強める。性能はともかく、パワーと装甲が違い過ぎるのだ。

それでも、アキトは諦めない。シュバイセンを逆手に持ち、足腰に力を漲ら（みなぎ）せ、隙^{すき}あらば跳び掛ろうとし、

「フレースヴェルグ。もういいですわ。護衛モードに移行しなさい」

命じられ、巨人がリノアの傍^{かたわ}らに移動する。出鼻^{でばな}を挫かれたアキトはポカンとなった。リノアは目をパチクリとする人形をしげしげと眺め、感想を漏らした。

「戦闘型人形の攻撃を二度もよけ、しかも反撃まで行っ。……大した人形ですわね」

「……えっと、ありがとうございます。【指揮者^{コンダクター}】さん」

「わたくしを知ってますの？」

「リノア・グレイン・フィーラム。米国の名門フィーラム家の長女にして当代切つての傀儡師。ロンドンのケルスス学院を首席で卒業した、二指で一体の人形を操る天才。【指揮者】の異名は、その優雅な指使いから繰り出される傀儡の術からきている。　ですよね」
「物知りですよのね」

「カルゲさんがデータとして入れてくれたんです。あつたほうが戦い易いですから……」

シユバイセンを握り直すアクトを見て、リノアは苦笑する。

「そんなに警戒なさないでくれませんか？　今日はただの挨拶代わりですわ」

「酷い挨拶ですね。同族と戦わせるなんて」

「人形相手に礼儀正しくする必要ありませんもの」

「人形を大事にしないヒトに、礼儀作法がわかるとは到底思えませんけど」

いつになく痛烈な批判をするアクト。口の減らない人形、と呟いたりリノアは踵を（きびす）返す。

「今度会うときは、わたくしのしもべにしてあげますね」

「ヤ、です」

「本当に、口の減らない人形ですこと。行きますわよ、フリースヴエルグ」

傀儡師と人形は、それだけを残して闇の中へ消え　ズシン、と重い音。遅れてリノアのヒステリックな叫びが響いた。

「なんでこんなにもないところで転ぶんですの！？　さっさと立ちなさいな！！」

さ、行きますわよ、と声がして、今度こそ消える。

「　　行きましたか」

リノアが消えてから約三分。辺りに気配がないことを確認して戦闘態勢を解く。

ぶらりと垂れ下がる右腕。フリースヴェルグの一撃を逸らしてから、パワーが入らない。

アクトスキンが稼働していたにも関わらず、衝撃を殺し切れなかったなんて……。

アクトはリノアとフリースヴェルグが消えた闇を見る。

「リノア・グレイン・フィラム。同時に五体の人形を操る傀儡師ですか。厄介なヒトに目をつけられちゃいましたね……」

ちよっとおもしろいヒトですけど。思いつつ、アクトはシュバイセンを懐に戻すと歯を撫でる。

均等に並んだ上歯の中、二本だけ少し尖った犬歯があった。

「契約を急がなきゃいけませんね……」

月のない夜空をジッと見上げる。

どこか寂しげな表情をしていたアクトは、突如ハツとなる。

「シュ、シュークリームは……」

ベンチに駆け寄ったアクトが見たものは、バラバラのマネキンとバラバラのベンチ。

そして、クリームと保冷剤を漏らした箱だった。

「……………」

正式商品名、葵屋特製シュークリーム。毎週月曜午後六時より販売する一日二十四個の限定品で買い直しのできない逸品にして美咲と美琴の好物。

案の定、美咲から怒られ、美琴に悲しそうな顔をされるはめになった。

十

ガシャンと音がした。

登校前のコーヒーを飲んでいた美咲が顔を上げる。割れた皿が床に散ばっていた。

「ご、ごめんなさい。すぐに片付けます」

食器を抱えたアキトが頭を下げると、破片の回収にかかる。また、割れる音がした。

トーストを乗せるのに使った大皿がアキトの手から滑り落ち、割れたのである。

「はあ……………」

ため息を漏らした美咲は、席を立つと廊下に出る。電話機横の収納棚うのたなを開け、掃除機を取り出してリビングに戻ると、アキトに言った。

「あなたは大きな破片を集めて。細かいやつはあたしがやるから」

「ぼ、ボクがやります。ミサネエはくつろいでいてください」

「くつろげるわけないでしょ。ほら、いいから」

「…………ごめんなさい」

アキトが大きな破片を集め終わると、掃除機をかける。

大体を吸い終わると、手で床に触れて破片が残っていないことを確認し、それから美咲は掃除機を片付けた。

「あなた、このところミスが多いわよ」

リビングに戻ってきた美咲が尋ねる。

「どうしたのよ？」

「すみません」

「あー、もう。謝らなくていいって。それより、どうかしたの？」

「…………ごめんなさい」

謝り続けるアキトを見て、美咲は頭をぐしゃぐしゃと掻いた。

アキトの不調は一昨日の夜から始まった。

洗い物をすれば食器を割る。料理を作れば味付けに失敗する。洗濯をすれば生地きじを破く。掃除をすれば花瓶を落す。そのダメっぷりときたら、目に余るものがあった。

「あなた調子悪いんじゃないの？」

アキトは答えない。無言で割れた皿を新聞紙で包む。

「ねえ、聞いているの？」

「……………」

「ねえ？」

「……………」

「ねえってば！」

声を荒げると、ようやくアキトが顔を向ける。

「え………… あ、はい。コーヒーのお代わりですか？」

とぼけた反応に、美咲は盛大なため息を吐いた。

「………… もういい。なんでもない」

「そ、そうですか。そういうえば先ほどからミコネエの姿が見えませんね」

「学校よ。さつきあんたが見送ったじゃないの」

「ボク、が？」

美咲は顔を厳しくさせた。

「あんた、わかってるの？ 今日は七日目 本契約をするかしな

いか決める日よ」

「はい、わかっています」

「だったらシャキッとしなさい。シャキッと」

「わかりました。では、シャキッと」

言つて、アキトは背筋を今以上に反らした。いや、背筋だけシャキッとされても。

「えっと、ミサネエ。そろそろ登校時間ですけど」

「………… そうね、もう行くわ」

ソファアに置いてある靴を取ると玄関へ向かった。

靴を履き、壁掛けの鏡で髪型の最終チェックを入念（じょういねん）に行つた。

「よし、ばらついてないつと…………」

癖が強くてばらつき易い髪を軽く撫でると、見送りについてきたアキトが弁当とこもり傘を渡してきた。

「今日の降水確率は八〇%だそうです。持って行ってください」

すりガラス越しに見上げると、たしかに空は厚い雲に覆われていた。

「そうね、持ってくわ」

弁当とこつもり傘を鞆にしまった美咲は玄関の戸に手をかけると、振り返って言った。

「それじゃ行つてくるけど、ひとつ命令しておくわ」

「な、なんででしょうか？」

美咲はピンつと人差し指を立てた。

「あたしが帰つてくるまでにいつものアキトに戻ることに。命令よ。もしも破つたら本契約はなし。肝きまに銘めいじておきなさい」

なぜかアキトの顔がポカンとなった。そして数秒後、悩むようなものとなる。

「なによ。できないって言うの？」

「骨格フレームでも、いいんでしょうか？」

「は？」

「えつと、ボクには肝 内蔵がありません。だから骨格フレームに刻むのが妥当たとうかなあ、って」

「……………。言つとくけど、肝に銘じるって実際に内蔵に文字を刻むわけじゃないから」

「そ、そうなんですか？」

「こんなにアホだったけ、こいつ。」

思った美咲だが、時間がないので深くは考えず、最後に念を押しておいた。

「とにかく、そんなんじゃ雇うことなんてできないから 肝に銘じておくように」

「わ、わかりました。工業用カッターで刻むように肝に銘じます！」
すごい信用できなかった。

十

一昨日けいりつからエラーが多い。

それを痛感つうかんしているのは、アキトその人形自身だった。

洗い物をすればパワーを低くし過ぎて食器を落す。料理を作れば

味覚設定が狂っていて味付けに失敗する。洗濯をすればパワーを上げ過ぎて生地を破く。掃除をすれば空間把握計算に失敗して調度品にぶつかる。そのエラー数ときたら、穴があつたら入りたいほどだ。「はあ……やっぱり、術の使用と戦闘が想定外ですよねえ」

原因はわかつている。解決策もある。しかし、すぐには実行できない。

八方塞な現状にソファーで思考をフリーズさせていると、電子音が響きだした。

「あ、はいは??い」

アキトは立ち上がると廊下にする。

そして何度も握力設定が通常であることを確認しながら、受話器を取った。

「はい、クドウです」

「もしもし、オレよオレ」

声紋検索開始 ヒット。

「キョーコさんですか?」

念のため訊き返すと、向こうも誰を相手にしているか気づいたらしい。

「アキト? 久しぶりじゃないの!」

工藤家の後見人、工藤恭子はマシンガンのように疑問を撃ってきた。

「元気してた? 日本はどう? 美咲と美琴とは仲良くやってる?

それからそれから」

「ボクは元気ですよ。日本には食材が溢れてますね、お料理するのがたのしいです。ミコネエとは仲良くしてもらってますけど、ミサネエとはちよつと、です」

とりあえず、訊かれた分だけ答える。

「美咲と? ケンカでもしたの?」

「あまり信用されていないんですよお??」

「あー。まあ、そりゃしょーがないわねえ」

受話器の向こうで恭子は失笑を漏らした。

『美咲は警戒心が強いからね。番犬みたいに』

「番犬、ですか」

『そ、番犬。かわいいかわいい美琴を守る番犬さ』

「ボ、ボクはミコネエを傷つけることなんてないですよ！」

『そう簡単に信用できないのが人間よ。あのコの場合、特にね』

「……………」

愁いの入った言葉に、アキトは窮してしまふ。

無言でいると、恭子の笑い声が聞こえてきた。

『ハハハ。あんた、ホントに人間っぽいわねえ。湿っぽい話に弱いんだから』

「すべてにおいて主と共感する。それがボクの仕様ですから……………」

『無茶な仕様だねえ。でもその様子だと、まだ話してないんですよ。』

ホントのこと』

「……………はい」

『エンゲージ契約も？』

「……………そう、です」

恭子は少しだけ厳しい声で言った。

『急ぎなさい。いくらあんたが独立性に優れてるって言っても、そろそろ限界ですよ』

「その通りなんですけど、ね」

『言い出し辛いかい。でも、わかってたことだろう？』

アキトは「……………はい」と肯定し「でも……………」と付け加えた。

「キョーコさんの忠告以上でした」

『どういうこと？』

「……………ないんです」

『ないって……………なにがさ？』

「全部です。なにも、ないんです」

合点がいったらしく、恭子はまた失笑を漏らした。

『それも仕方ないね。美咲にとって【探求者】は、敵以外の何者で

もないんだから』

「なんとか、なんとかならないんでしょうか？」

『キツカケが必要だねえ。でもまあ、ムリに美咲と契約する必要はないんじゃない？』

言葉に、アキトは目を丸くした

「まさか ミコネエを選べって言うんですか!？」

『嫌いじゃないんでしょ？』

「それはそうですね……」

肯定すると、恭子は軽い口調で言ってきた。

『だったらいいじゃん。美琴が主人でもさ。たしかに、まだちよつと幼い気もするけど なーにすぐに立派になるさ。最近の子は発育がいいからね。オレの見たところ、Dカップはかたい。賭けてもいいよ』

「そ、そんな問題じゃありません！ ボクは普通のヒトと契約した場合の不確定要素を心配してるんです！」

『いや、そういう問題だね。美琴もあの【探求者】の娘だ、一目で適性者だってわかった。美琴は美咲に劣っていない。むしろ美咲より濃く血を受け継いでる。基本さえ教えれば、すぐに傀儡ができるようになる。土壌は適してるんだから、契約は充分可能さ』

傀儡師でもないのに、どうしてそんなに詳しいんだらう。

思っていると、恭子は訳のわからないことを熱弁し始めた。

『となれば。あんたも男なんだし、やっぱボン、キユ、ボンな上になつている美少女のほうがいいんじゃないの？ それにあのゴ、なんだかんだいってイ又属性だし。いまから躡ればメイド服を着て『ご奉仕……する』なーんて、無表情ながら頬をピンクに染めてイカせてくれるようになる。きゃあーッ！ 羨ましいぜ、この果報者が!—!』

「ボクはクドウのしもべですよ!? 奉仕させてどうするんですか!—!」

『なにいつてやがる! メイドにご奉仕、男のロマンじゃないかい』

「!!」

「意味がわかりませんよお??」

『これだからオコチャマは……!! オレだったら間違いないを選んでるつてのに!! なにが気に入らねえんだよ!!』

「大好きですよ! ただミサネエがミコネエに傀儡師のことを隠してるから、ボクも人形だつていうことを知られたくないんです」

『 だから美咲を選ぶのかい?』

「そうです。ミサネエが傀儡を教えないのには、きっとワケがあります。だからボクも、人間としてミコネエに接します。けどそれは、尽くさないつてことじゃなくて、ボクはミサネエだけじゃなくて、ミコネエの命令も聞き従います」

アキトは断言した。

「ふたりを守り、導く。それがボクの存在理由ですから」

長いセリフを言い終えると、話し相手が沈黙していることに気づいた。

「どうしたんですか、キョーコさん?」

『 あんたまさか、姉妹井を狙ってるのかい……?』

「姉妹井? なんですか、それ」

疑問には答えず、恭子は震える声で続けた。

『そ、そいつはドリームだ……。しかも美咲と美琴の姉妹井とくれば無形文化財! その価値は計り知れない いや、計ることなんてできねえッ!!』

計ることができないつて、どういふことなんだろう。

井というからには、どんぶりものだと予想できるが、姉妹でミサネエとミコネエ? 日本に人肉を食する風習があったかなあ?

データにないどんぶりものは貴重な逸品だと、アキトは恭子の声色から理解した。

「そんなにすごい価値があるなら、すごく美味しいんでしょうねえ」

『 ああ、美味だとも。病み付きになるくらい』

「……麻薬ですか?」

『そうかもしれない。女は麻薬っていうし』
「？」

まだ見ぬ姉妹丼に思考をめぐらせていると、恭子が思い出したように口を開いた。

『そついえば』

「なんですか？」

『今日が美咲の誕生日だって知ってるわよね』

「はい？」

現実に戻ったアキトは訊き返した。

「それは、事実なんですか？」

『そーよ。渡した個人データに入れ忘れてたの思い出したから、今日は電話したの。プレゼントでも渡して祝ってあげなさい。ポイントアップにも繋がるわよ』

「プレゼント プレゼントですかあ……………」

あう??、つとアキトは呻く。

「困りました。どんな物を贈れば、いいんでしょう」

アキトは人形であるためか、この手の選択にいまひとつ疎いのである。

本当に困っていると、恭子は助言した。

『美琴に手伝ってもらったら？』

「でも、ミコネエの手を煩わ(わづら)すわけには……………」

『それしか選択肢がないでしょーが』

「そ、それはそうなんですけど……………う????」

『ま、がんばりなさいよ。じゃあね』

「あ、ちよつとキョーコさん!？」

慌てて呼びかけるがもう遅い。回線は既に切られていた。

「プレゼント、ミコネエに聞くしかないんですよね……………」

ため息をついて、アキトは受話器を置く。

「誕生日、ですか。とりあえず、ケーキを焼かなきゃいけませんよね」

アキトはキッチンに戻ると、早めの夕飯準備にかかった。

十

学校からの帰り道、制服姿の美咲はぶつぶつと文句を垂れていた。「……まさかあんな隠しミスをされるなんて」

昼食に渡された弁当のことである。

内容は唐揚げ、サラダ、リンゴ、しらすをまぶしたごはん。豪勢ではないが、質素でもないお弁当だ。

どれも美味しかった。唐揚げはベチャベチャになってなかったし、サラダも瑞々（みずみず）しかった。リンゴは極力変色を抑えられ、ごはんとしらすの割合も完璧だった。

ただ一つ、玉子焼きを除けば。

「砂糖と塩を間違えるなんて、なんて凡ミスを……」

しょっぱかった。しょっぱ過ぎた。

甘い玉子焼きを予想していた分、他の出来が良かった分、しょっぱさは五割増しだった。

真面目なアキトのことだからただの失敗とわかっているのだが、美咲は騙された気がしてならなかったのだ。

今日の弁当の失敗を皮切り、アキトの問題点を口にしながら歩く。「ヘラヘラする。すぐに泣きそうになる。失敗が多い。アホよアホうちののアホですよ」

美咲の足が止まる。曇天模様の空を見上げた。

うちのはアホ。家のはアホ。家の。

いつからだろう。アキトをうちの一員と認めだしたのは。

視線を下ろすと、目に入ったのはあの公園。アキトと出会った公園だった。

中に足を運んだ美咲は、桜の散り始めた木を撫でる。

ここでアキトと出会い、逃げ、うちの中で再会し、地下の工房でその正体を知った。

それから色々あった。喜んだり、呆れたり、怒ったりした。アキトからきてからの一週間。毎日驚いていた気がする。

「……あたし次第なのよね。アキトの今後こうごって」
今日で仮契約が終了する。本当に雇うか、送り返すか決めなければならぬ。

雇えば騒がしい日常が続く。雇わなければ、美琴とふたりっきりの生活に戻る。

まぶたを下ろし、考える。この日々を続けるか続けないか。元の生活に戻りたいかを。

「考えるまでもないか」
目を開いた美咲は決めた。

その顔に浮かぶ表情は、柔らかな笑み。

「まあ、ギリギリだけど及第点きつぽんつてところよね」

がんばってるし。まあまあ役に立つし。あの美琴が人見知りしてないし。それになんだかんだ言ってるけど、それなりに信頼はしているのだ。

「よし、さっさと戻って安心させてやらなきゃ」

美咲は踵を返す。大股おおまたで歩き、公園を出ようとしたところで、

「ミサキ・クドウ？」

足を止めた美咲は、首だけで声のかけられた背後を見る。

女がいた。SPっぽい黒服の白人たちを引き連れた外人の、それもスタイル抜群ばっけんの女がいた。しかもなぜかハマーがあった。

日本の住宅街に護衛つきの美人とえらく大きなハマー。

怪しかった。怪しさ爆発だった。他人のフリをしたかったが

「そうですけど」

一応、肯定きうていしておいた。

アキトみたいに追われたら堪たまらないと思ったからである。

赤いスーツを着た女が上品に微笑ほほえんだ。

「初めまして、ミス・クドウ。わたくしはリノア・グレイン・フィラム」

金髪碧眼きんぱつへきがんの女　リノアは笑みを深めて言った。
「あなたと交渉がしたくて参りました者です」

十

ケーキ

OK。サラダ

OK。フライドチ

キン　OK。

プレゼント

OK。ロウソク

OK。飾りつけ

OK。

美琴ととの買い物を終えたアキトは、キッチンで腕を組んだ。

「あとはメインディッシュですけど　どうしましようか」

前回のセールと今回の買い物で、材料は一通り以上揃っている。
なんでも作れるが、なにを作れば良いのかわからなかった。

「……カレー」

「えっ？」

振り返ると美琴がいた。彼女はポツリと、

「お姉ちゃん、カレー好き」

独り言を聞いていたのか、美琴は的確なアドバイスをしてくれた。

「カレー。カレーライスが好きなんですか？」

「辛いのが好き」

「ありがとうございます。それじゃ、メインディッシュはカレーで
すね」

よし、作りますよ??！　と、アキトが材料を取り出し、いざ
調理を始めると、美琴に袖そでを引っ張られた。

「どうしました？」

「……手伝っ……」

「……えっ？」

目を丸くするアキト。恥ずかしいのか、無表情ながらも頬を赤ら
めた。

「でも……料理はボクの仕事ですし、ミコネエにはプレゼント

選^てびを手伝^てってもらって、これ以上、手間^{てま}を取らせるわけには

「それ」

「はい？」

「お姉ちゃんの前^{まへ}プレゼント選^てび、手伝^てった」

「あ、はい。助^{たす}かりました」

「うん。助^{たす}けた。だからアキトは借^かりを作^{つく}った」

「は、はい……そう、ですけど……」

「ウォルちゃん。くる」

美琴は傍^{そば}にいたウォルフを呼^よぶと、その背^せ中^{ちゆう}に乗^のって立^たち上がる。身長^{しんちやう}をアキトと同じにした美琴は無^む表情^{へいじやう}の顔^{かお}を近^{ちか}づけて、

「命令^{めいれい}。手伝^てう」

それを出^だされては拒^き否^ひなどできない。トホホ……といった感^{かん}じで、アキトはうなずいた。

「……Ja??」

「……よろしい」

「じゃ、じゃあ。ジャガイモの皮^{かわ}むきを願^{ねが}いします」

最も安全^{さいぜん}と思^{おも}われる剥^むき機^きを使用^ししてのジャガイモ剥^むき。願^{ねが}いすると、「まかせる」と美琴はうなずいた。

意見^{いけん}を通^{とほ}せたこと^{こと}がうれいのか、無^む表情^{へいじやう}ながらもうれしそうな様子^{ようす}で、皮^{かわ}をむく。

アキトはしばらく、ハラハラとしながら見守^{みまも}っていたが、思^{おも}いのほか美琴が器用^{きゆう}だと知^しると、自分^{じぶん}もニンジンの皮^{かわ}むきを始^{はじ}めた。

むきむき。むきむき。むきむきむきむき……。

無^む言^{ごん}で皮^{かわ}を剥^むく二人^{ふにん}。仲^{なつ}のよい兄弟^{けいだい}のように皮^{かわ}を剥^むき続^{つづ}け 唐^{たう}

突^{とつ}に美琴^{みきん}が口^{くち}を開^{ひら}いた。

「そっくり」

「えっ？」

皮^{かわ}むきを中^{ちゆう}断^{だん}して美琴^{みきん}を見る。美琴^{みきん}は、真^ま剣^{けん}な顔^{かお}で皮^{かわ}を剥^むきながら、呟^{つぶ}いた。

「アキト、パパそっくり」

「パパ キヨウシロウ・クドウさんですか？」
「そっくり」

そこで美琴は手を休めて、アキトを見上げた。
「なんでかな？」

「それはきつと、ボクの」
咄嗟とつさに言いかけて、口を閉じる。

「……なに？」

「いえ、なんでもありませんよ」

ボクのお母さんが望んだから。

美琴に笑顔を浮かべながら、心で答えた。

十

公園近くの喫茶店。

リノアはコーヒーの香りを楽しみながら、ガチガチに固まる美咲に言った。

「気を楽しんで下さい」

と、言われましても。

美咲は心の中で即答そくとうすると、視線をリノアから外す。

チラリと右を見る。黒服サングラスの白人が背を向けて直立ちやくりつしていた。

チラリと左を見る。黒服サングラスの白人が背を向けて直立ちやくりつしていた。

入り口を盗み見る。黒服サングラスの白人が通せん坊とせんぼうしていた。

カウンターを見る。黒服サングラスの白人がメロンソーダをかき回かきまわっていた。

なに、この状況？

喫茶店を占拠せんきよする黒服集団とその中心でコーヒータイムを楽しむボインの美女。怯えきつたマスターはカウンターの奥に隠れてしままい、代わりに黒服のひとりが給仕きゅうじをしている。

無論、他の客などとつくに逃げ出してしまった。

「飲まないのですか、ミス・クドウ？」

「の、飲ませてもらいます」

必死に愛想笑いを浮かべながら、美咲は出されたコーヒーに口をつける。

「お、おいしいですね」

「そうですね。うちのトロプスたちはコーヒーを入れるのがお手なんですの。あのコを除いて、ですけど」

「そ、そうなんですか？」

アハハハ……と笑う美咲。その心では、

『トロプスってナニよ？ シロップの仲間？ 木星帰り？ つーかそれ以前に、こんな状況でコーヒの味なんかわかるわけないっての』

と、思っていたが、内に秘めておいた。

「改めて自己紹介をさせてもらいますわね。わたくしはリノア・グレイン・フリーラム。GELの常務をしている者です」

リノアが指輪だらけの指を揺らすと、傍にいた黒服のひとりが美咲に名刺を渡した。

「GEL……どんな会社なんですか？」

「軍需企業ですわ。無人兵器に取り付ける特別兵器・監査・偵察・探知システム（SWORDS）やエクソスケルトンに組み込むアクチュエータとその装甲板の開発が主な業務ですの。最近ではSE社提携してソロトレックの開発を始めましたわ」

「そ、そうなんですか。なんだかすごいですね。アハ、アハハハ……」

「とは言っても、それは表向きの話ですけど」

「ハハハ　ハ？」

笑みを深めたリノアが右手の人差し指を揺らす。黒服が別の名刺を出した。

「グレイン・ドール・カンパニー。傀儡師の人形を販売するこちら

のほづが、本業ですの」

「……人形の販売？ 傀儡師って」

「ミス・クドウ。あなたと同じ傀儡師ですわ」

驚きのあまり腰を浮かすと、すぐ近くにいた黒服に肩がぶつかってしまった。

美咲はまた驚いた。肩から伝わる感触が、とても硬かったためである。

「まさか、この黒服たちって……」

「第6世代人形狩人型（ゼクステ マリオネット タイプ ハンター）。我が社の主力商品ですわ」

「もしかして、これぜんぶ人形なの？」

「ええ。グレイン社製人形の特徴は、その扱いの容易さにありますの。よろしければ、一体お譲りしましょうか？」

「えつ、マジ？ タダで!？」

もちろんですわ、とうなずくりノア。美咲は脊髄反射で「ください!」と言いつうになるが、なんとか言葉を呑み込んだ。

工藤家家訓その一。『おいしい話には裏がある。裏のない話には旨みなし』である。

大っ嫌いな女の残した言葉を思い出し、すこし不機嫌になったものの、家訓には従う。考えてみれば太っ腹すぎた。

「やっぱいいわ」

勿体無かつたかなあ、と後悔を覚えつつ話を進める。

「それで、話つてなに？ 交渉つて、なにが欲しいの？」

「あなたの所持するYr-03 アキト・ユル・アイデを譲ってもらいたく思いました」

「アキトを？」

「ええ。是非」

真剣な瞳を向けてくるリノアに、美咲は首を傾げた。

なんでこの人、アキトを欲しがってるんだらう。

美咲は人形だらけの喫茶店を見渡した。

これだけあるのに、まだ人形を欲しがると、もしかして人形コレクターかなにか？

疑問に思っている、リノアはなにを勘違いしたか、へんなことを言ってきた。

「無論、ただでとは申しません」

「えっ？」

「この狩人型と斥候型、最新の銃撃型をそれぞれ一体ずつお付けします。そして」

リノアが左の人差し指を揺らす。黒服　人形がメモ帳みたいなものを取り出し、主に渡した。

「これを」

「えっ、なに？」

すっ……とテーブルの上に出されたのはお金代わりになる紙小切手こきってだった。

えーと一十百千万　一〇〇万円？　でもこれ、¥じゃなくて\$だよな？

瞬間、覗き込んでいた美咲の顔が驚愕きょうがくに固まった。

「じゅ、一億円……！？」

「あら、安すぎましたか？」

信じられない発言をするリノア。もう一枚、小切手を渡してきた。

「それではこれならどうです」

「プラス一億円……」

眩暈めまいがした。

交渉として渡されるのは億の小切手と精巧せいこうな人形が三体。いったいどれだけの金持ちなんだアンタ、と美咲は思ってしまう。

そして同時に浮かぶ疑問。

なぜそこまでアキトを欲しがるとのさ？

たしかにアキトはすごい。人間のように喋り、人間のように動き、人間のように働く。

でも、それだけだ。

彼女の人形だつて喋りはしないが、同じことができる。

眉を顰めて考え込んでいると、少し苛立った声が入った。

「これでどうですか？ まだ足りませんか、ミス・クドウ」

気がつけば、一枚一億の小切手が四枚に増えていた。

「足りませんでしたら、金額を言つてください。可能な限り考慮しますわ」

「あー、そうねー。でも、そうじゃなくて……」

言葉を遮つて、リノアが訊いてきた。

「ミス・クドウ。あの人形はあなたにとって、そこまで大切なものなのですか？」

「大切つて……まあ、それなりに重宝してるわね。家事をしてくれるし」

「か 家事い！？ ミス・クドウ。あなたはYr-03に雑務をさせているのですか！？」

うなずくと、なぜかリノアはテーブルから身を乗り出して怒りだした。

「やらせることはほかにあるでしょう！ 対人会話処理テストとか人格形成プログラムの解析とか最大独立行動時間の把握とかact skinやfalse nerveの限界値の検査とか！！」

「え、えーと、あくど頭巾とふあ、ふある ……なに？」

「？アクトスキン？？ファルスネルヴ？です！ 近年開発された極薄の衝撃吸収繊維と量子暗号通信への使用を目的とした超低減衰光ファイバー交信システムのことですわ！！」

「……なに、それ？」

「あ、あなた……本当に傀儡師ですか？」

今度はリノアが眩暈を起こしたらしい。

彼女は顔を押さえてふらつくと、イスに座る。

「あ、あれだけ高度な人形にそんなことをやらせているなんて……」
なんとなくわかった。実に認め辛いのだが、アキトはとてもしつこい人形らしい。

たしかにこつちの常識の（じょうしき）斜め45度進んだポケをやらかすので、すごいと言えばすごいか。

ひとり納得していた美咲は、リノアにじっと見つめられていることに気づく。

「な、なによ……」

「先ほどから思っていたのですけど。あなた、いまだき彫物式呪印タトウなのですか？ それらしい装飾具アクセサリが見当たりませんのですけど……」

「呪印？ なにそれ？」

「……………」

リノアは黙り込む。顔が険しくなり、碧眼へきがんに怒りが宿りやどだした。

「ミス・クドウ。冗談も程々（ほどほど）にしてほしいですわ。わたくしは真面目まじめに訊いているのです」

「知らないわよ、そんなもん。あたしや術じゆつに詳しくないのよ」

高圧的な態度にカチンときた美咲が喧嘩腰けんかごしに応じると、リノアの顔から怒りが消えた。

代わりに浮かんだのは、戸惑とまどいと驚き。彼女は信じられないといった様子で漏らす。

「呪印を知らない傀儡師アクセサリー。しかも装飾具を持っていない。いくらA Iが優秀とはいえ、まさか、そんなはずは……」

ぶつぶつと独り言を続けるリノア。

置いてきぼりを受けた美咲は、やる気を殺そがれてしまった。

「もしかして……Y r - 03はまだ契約を行っていない？」

聞いてはいないと美咲は思ったが、答えておく。

「そーよ、仮契約の段階コントラクト。今日、雇うかどうか決めるの」

「いえ、法的な契約ではなくて」

リノアの顔がぎよつとなった。

「いま、なんて仰い（おっしゃ）ましたの？」

「へ？ だからアキトは仮契約中で、今日雇うかどうか決めるって」

「仮契約中？ 雇う？ ミス・クドウ。わたくしはどうやら、

勘違いをしていたようです。それを正すためにも、質問に答えても

「ええですか？」

「こ、答えられることなら……」

「ずいっと顔をよせられて、美咲はどもりながらうなずいた。

「ミス・クドウ。Yr-03はあなたのものではないのですか？」

「そ、そうよ。あたしはただのモニター。酔狂な傀儡師と錬金術師たちが作った人形のデータ取りを手伝ってるだけ」

「モニター？ なにを言ってるのですか」

「なにつて、なにが？」

「……あなた、本当に術師ですか？」

声を低くしてリノアは美咲を凝視する。

「考えてもごらんなさい。秘密主義の術師が、他の術師に作品を貸すとお思いなの？」

「そ、それは……量産と安全性の」

「量産？ 安全性？ どこの世界に量産が可能で安全な人形が存在しますの？」

姿勢を直したりノアは、コホンと咳払いをひとつすると始める。

「いいですか？ 術の行使とは危険なものです。傀儡一つとっても、接続中に意識を乱せば人形は暴走。幻糸の過剰浸透は爆発を起こす危険なもの。こんな異端の術を利用する以上、安全なんて言葉はありませんわ」

「だったら量産は……」

呆れ顔でリノアは言った。

「貴重な薬や術式をふんだんに取り入れたあの人形を、どうやって量産するのです？」

「え？ でも、あなたの人形は量産してるんでしょ？」

「あなたと言われリノアは顔をしかめたが、なにも言わずに答えた。「我が社の人形はアンドロイドと大して違いませ^んわ。傀儡の付加^{メインフレーム}など幻糸を受信し易くするための宝石を組み込み、内部骨格と駆動^{アクチ}装置^{ユニット}に幻糸を通り易くするための術式を刻んだだけの、ただの操り易い人形。もっとも、それだけでもかなりの手間がかかるのですが

あれとは根本的に違いますわ」

熱の入った顔をして、リノアは続けた。

「Yr-03はすべての部品に術式処理を施した人形。指一本、電動筋繊維一本に至るまで術的要素を組み込んだ人形。自らの意思で術を行使する、本物の傀儡人形ですよ！」

弁の勢いのあまり立ち上がったリノアは、うっとりとした様子で天を見上げた。

「潤滑液、冷却水の生成は鬼才の錬金術師カルゲ・アルツイエラー。メインフレーム内部骨格は術式武器の名匠のアリシア・バダムが担当し、演算処理及び身体反応の高速化の術はタユラの巫女姫、タユラ・マユラが直々（じきじき）に処理。数々の素晴らしい傀儡師、錬金術師、叙術師、複製師が協力して作り上げた前代未聞の^ナ人形。それがYr-03ですの。無論、関わった者達はまだおります。買い取った情報には含まれておりませんが、水の使徒と呼ばれるフォンの目を輝かせ熱く語るリノア。しかし聞いている美咲はキョトンとするばかりだ。」

カルゲ？ アリシア？ タユラ？

ダレデスカ、ソレハ？

なんだかアキトが言ってたような言っていないような。美咲は頭の上に疑問符を大量に浮かべるが、自分の世界に浸っているリノアは気づかずに、益々（ますます）もって熱弁を続けていた。

「と、これが常識的に考えて関わっているとされる術師たちです。けど、この中で一番素晴らしいのは、究極のオンリーワンたる術師を集め、説得し、纏め上げたマギノイド計画のリーダー、【探求者】の異名を持つミキエ・クドウですわね」

「えっ？」

聞き慣れた、忘れたい名前が聞こえ、美咲は我が耳を疑った。

「いま　なんていったの……？」

話しの腰を折られ、不満の表情を隠さずに浮かべながらリノアは言った。

「だから、ミキエですわ。ミキエ・クドウ。今世紀最高の傀儡師ですわよ」

ミキエ。美紀恵。 工藤美紀恵。

あの女……………！！

尋常ならぬ怒りに顔を歪める美咲に、リノアは訝しげな眼差しを向けた。

「話を戻しますが、あなた、あの【探求者】^{バシッター}の娘なんでしょう？

だからYr-03を遺産として受け取った。違いますの？」

「遺産？」

「そうですね。マギノイド計画の終了後、ミキエはYr-03を受け取ってすぐに死去してしまいましたから。もしかして、知らなかったのですか？」

脳裏に浮かぶのはアキトの言葉。

「私が美咲様の役に立つことこそが、天に召された母への恩返しです」

死んだ。あの女はとっくに死んでいた。

その事実が、美咲の頭を真っ白にする。

ポツリポツリと、雨が降り出していた。

十

五時ごろから降り出した雨は未だ止まない。

雨音だけが響く薄暗いリビングの中、アキトは客室へと向かった。押入れを開け、毛布を取り出す。ソファーに眠る美琴にそっと被せた。

姉の帰りを待っていた美琴は眠っている。きつと疲れていたのだろつ。

「……………手伝わせちゃいましたもんね」

美咲の誕生日プレゼント選びに始まり、メインディッシュの制作^{せいさく}更には部屋の飾りつけまで、美琴が望んだとはいえ、手伝わせてし

まった。

その事実にはアキトは不甲斐無さを感じてしまう。

「やっぱり、ボクは頼りないんでしょうか……」

きつとそうなのだろう。この幼い主の寝顔がなによりの証拠だ。

主人を補佐すべき人形が、主人に補佐されたあげくに疲れ果てて居眠りをさせてしまう。

その事実は姉妹のサポートを目的にするアキトにとって、存在意義に関わる問題だった。

このまま解雇されたほうがいいのかも知れない。自分は主人たちに迷惑をかけているだけ。ここは潔くラボに戻り、解体処分になるべきなのでは。

そこまで考えが進むと、アキトは頭を振って否定した。

自信を持つんだ、アキト。成果は出ている。自分が訪れるまで放置されていた庭や塀、使われていない部屋などの環境は改善した。

たしかに、主の感情面を考慮した行動や思考には問題があるけど、それら以外の事柄に関しては優秀のはず。それに、自分が必要か不必要かを決めるのは主だ。一介の人形が考えることではない。

ミサネエの判断を聞いてから。そう結論付けたアキトは、テーブルの上においてある二つの箱の内の一つを手を取った。

「よろこんでもらえるでしょうか……」

アキトより、とカードがついた小箱に入っているのは、厚手のリボン。

「お姉ちゃん、おしゃれしないから、こんなのがいい」という美琴の意見をサンプルに、永遠とも思える思考のループの果てに選んだプレゼントだった。

「よろこんでくれたら、うれしいです」

このリボンをつけた美咲の笑顔を想像していると、玄関の開く音がした。

「あっ、帰ってきましたね」

プレゼントをテーブルの上に戻したアキトは、主人を出迎えるた

めに玄関へと向かった。

「お帰りなさい、ミサネエ。あのですね、今日は
言葉を半ばで切る。」

「ど、どうしたんですか？ ずぶ濡れじゃないですか！」

玄関の戸を開けたまま立ち続ける美咲は、俯いたまま反応しない。

「……どうしたんですか、ミサネエ？」

不審に思ったアキトだが、原因の追究が最優先事項ではないと考
えた。

「あ、待っててください。いますぐタオルを持ってきますから」

「いいわよ、別に。それよりちよつと付き合いなさい」

言つて、踵を返した美咲。どしゃ降りの外へ出ようとするので、
アキトは慌てて止めた。

「だ、ダメですよ！ そのままじゃカゼを引いちゃいます、まずは
体を」

「いいから来いって言つてんのよ！！」

怒鳴つてから、美咲は顔だけを振り返らせた。

その鷲色の双眸に宿るのは怒りの色。長年にわたりなお、鎮まる
事無く燃える憤怒であり、熟成された憎悪でもあった。

初めて目の当たりにする主人の本気の怒りに、無言となるアキト。
美咲は目を細めると静かに 然れど僅かにも怒気を衰えさせずに
言つた。

「命令よ。ついてこない」

「……はい」

うなずいたアキトは、出て行く美咲のあとについていった。

美咲が足を止めたのは、工藤の敷地を出てすぐの道路だった。

「……ここでもいいわ。それ以上近づかないで」

彼女は鉛色の空を見上げ、全身が雨に打たれることもかまわず、
立ち続ける。

同じく、傘を差さずについてきたアキトは、美咲から距離を取つて

立つ。

冷たい空気に冷たい雨。雨音だけが響く世界で、ふたりは沈黙を保つ。

無言を作ったのが美咲ならば、破ったのもまた彼女だ。

「死んだのね、あの女」

雨に掻き消されそうな、か細い呟き。その言葉が指す人物を瞬時に悟ったアキトは、思わず一步踏み込んでしまった。

「こないで！」

途端、吐き出されたのは拒絶だ。

刃物のような鋭さを持つ拒絶に、アキトは踏み出した足を戻した。

「どうしてそのことを」

尋ねて、バカな質問だと気づいた。

決まっている。【指揮者】だ。それ以外に誰がいるのか。

理解すると、美咲が僅かに肩を落とした。

「……そう。やっぱり、死んだのね。あの女は」

誰に言うまでもなく呟いた美咲は、肩を震わす。

「……悲しいんですね、ミサネエ」

「悲しい？」

訊き返した少女は、クルリと振り返った。

刹那、アキトは訊かなければよかったと後悔する。

「なんで悲しまなきゃいけないの？」

笑顔。これまでに見たことのないくらいの、とびっきりの笑顔。

まるで長年の望みが叶ったかのような笑顔で、美咲は快哉を叫んだ。

「当然 当然の結末よね。お父さんが苦しんで死んだのに、あの女がのうのうと生きてるなんて、おかしいもんね！ ざまーみる！」

狂喜する美咲に、アキトはたまらず言った。

「やめて、ミサネエ」

「そうよ。おかしいのよ。どうしてあんなにいいお父さんが死んで、あの女が生きてたわけ？ それって、やっぱりおかしいわよね」
「やめてください。お願いです、ミサネエ」

「あんな女、どっかのバカの慰みものにもなればよかったのよ。それで頭をおかしくしてから死ぬのが妥当だわ。そうは思わない？」

「やめてくださいってば！！」

叫んだアキトは少女の肩を掴む。

すると、それまで笑顔だった美咲の顔が鬼面となった。

「さわるんじゃないわよ！ このガラクター！！」

アキトが反射的に手を放す。彼の体をドンと押し、逆に弾かれて美咲は距離を取った。

呼吸を荒げ、血走った目で睨んでくる美咲に、彼は頼み込んだ。

「ホントに、やめてください……お母さんを、悪く言わないでよ……」

「……やっぱりそうだったのね」

「うん。ボクはお母さん ミキエ・クドウに作られました」

ギリツと歯を食い縛らせた美咲は、射殺さんばかりの視線をアキトに向けた。

「モニターって話は？」

「……嫌ってる、って聞いてたから、辻褄を合わすためにでっち上げ、です」

「騙してたのね……」

「……そう、なります」

「消えなさい」

「……」
「消えろっていつてんのよ！ 解約よ、アンタの顔なんて見たくもない！！ 命令よ！！」

美咲が怒鳴って『命令』する。

「わかりました。現時点を持って、仮契約を解除します」

踵を返し、美咲に背を向けたアキトは感情のない声で尋ねた。

「ウォルフとファルケは」

「もつてきなさい。あの女の作ったものなんていらわないわ」

「わかりました。ウォルフ、ファルケ」

呼んでしばらくすると、玄関から二匹の獣が出てきた。

アキトが訪れたときに持っていた、大型トランクを引き摺って現れたウォルフと、その背中に乗ったファルケに、彼は無線で工藤家への立ち入り禁止を伝える。

すると二匹は美咲を見た。

「二度とくるんじゃないわよ」

睨まれたウォルフはシツポを地面につけ、ファルケは小さく鳴く。それから、トボトボと近くの路地へと消えていった。

「ミサネエ、最後に言わせてください」

美咲に背を向けたまま、アキトは言った。

「お母さんは、ミサネエとミコネエを愛してましたよ」

「……なんでそんなことがわかるのよ」

「『愛してる』そう言っていましたから」

「ふざけないでよ!!」

愛してる。その陳腐な単語に、美咲の憎しみと怒りが爆発した。

「あたしを愛してる？ 美琴を愛してる？ あの女が？ 冗談

でしょ。お父さんが撃たれたときだって現れなかった。いくら手紙を送っても返事一つこなかった！ そんな女が愛してるですって！

？ お父さんの葬儀のときにさえ現れなかったのよ、あの女は!!」

「お母さんはそんなヒトじゃない！ 事情があつたんです！」

「事情、ね。お父さんを悲しませて、ようやく歩けるようになった美琴を捨てて、音信不通になったかと思えば、こんなガラクタ作りに精を出す事情。なにそれ？ どんな事情よ!？」

「……………」

アキトは答えない。美咲は怒りに駆られて捲くし立てた。

「あんたにわかる？ 捨てられた子供の気持ちって。逃げられたっ

て同世代どうせだいのガキにバカにされる悔くやしさつて。傀儡くわいがうまくなれば帰かえってくるつて信じ続けて、毎日まいにち地下室ちかしつに籠こもつて傀儡くわいの術わざを鍛きたえてある日ひ突然とつぜんもう帰かえつてこない気づいたときのむなしさが!!」

喚わめいた美咲は肩で息をして、アキトの背を睨にらみ続ける。

「あなたにわかるわけ？ あたしの心がわかるわけ!? わかるんだつたら言いつてみなさいよ。次世代の人形で、感情だつてあるんでしょ？ ほら!!」

長い沈黙。雨に漆黒しつこくの髪を濡らすアキトは、ようやく答えた。

「……ムリ、です。ボクの感情は、あくまで表面的ひょうめんてきなもの。理解はできま、せん」

たどたどしく言つと、アキトは歩き出す。細い体を雨に濡らしながら、歩き出す。

頬ほを歪よこめた美咲は最後に、アキトの背中めがけて吐き捨てた。

「人形の分際ぶんざいで口出ししないだよ。気持ち悪い」
アキトはなんの反応も見せず、路地ろじへと消えた。

第四章 探求者の求めたもの

ふたりで生きる。

心に誓ったのは、父の葬儀そしぎが終わったときだ。

父の死因しいんは薬物中毒者の放った凶弾きょうだん。即死そくしではなかったが、助かる見込みみこもなかった。

それでも父は戦った。勝ち目のない、苦しいだけの死闘しとうを一週間も続け 死んだ。

引き取り手がなかったわけではない。

ボディガードをなりわいとしていた父だが、ほかにも色々やっていたらしい。葬儀おしぎに訪れた政治家、傭兵ようへい、弁護士、学者、警察署長ちやうじつじやくさ、一等陸佐などが声をかけてくれた。

でも、断った。

理由は簡単。家を離れなければ、ならなかったからだ。

それでもまだ、子供だった自分が自立するには、法的に無理だったので、父の妹である恭子きよこさんに後見人こうけんじんなってもらった。

「あんまり家に居られないけど、いいの？」

それでいい、と自分は言った。むしろ、それがよかった。

恭子さんには悪いけど あの人たにんは他人だ。他人に家をつろちよるされたくはなかった。

だから自分は、泣きじゃくる妹を抱きしめながら恭子さんを後見人こうけんじんに選んだのである。

ふたりで生きるのだ。

誰の世話にもならず、誰にも守られず、ふたり力を合わせて生きていくのだ。

出会いは犯罪的と言えた。

リビングで見知らぬ外人とばったり遭遇。それが美琴とアキトとの出会いだった。

「ぼ、ボクは怪しいヒトじゃありません！」

怪しい人定番のセリフだった。しかも青い目をした外人で、どことなく人形っぽいヒトだったので、怪しさは三倍だった。

すぐに美琴が警察に通報しなかったのは、興味を覚えたから。堅牢なはずの家のセキュリティを破った外人は、物色もせずリビングの壁にかけられた写真 恭史郎と美咲と美琴が映っている写真を、どこか寂しげに眺めていたのだ。

「あ、あのですね。ボクは今日からここで働かせてもらうことになったしもべでして あ、名前はアキト・ユル・アイデって言うんですけど」

外人はあたふたとしながら、自分は使用人だと言った。

詭弁にしか聞えない説明を信じたのは、美琴自身よくわからなかった。外人 アキトになぜか親近感を覚え、信用した。その理由がパパに似ていると気づいたのは、最近だ。

それに、そのときの美琴はそれどころではなかった。

昼食を食べていなかった。この前の遠足の雨天決行日だったので給食がない日で、姉にそれを伝え忘れていたため、ごはんを食べ損ねた美琴は、かなりおなかが空いていたのだ。

「あ、なんでも言うてくださいね。家事全般できますから」

タイムリーだと美琴は思った。思ったので、ごはんを頼んだら作り出すのはハンバーグ。

大好きだった。思い出だった。パパの得意料理がハンバーグだったのだ。

けど、お姉ちゃんのハンバーグは嫌いだった。焼け過ぎか、半焼け。どっちかしかない。

そして料理途中で姉の美咲が帰ってきて、雇う雇わないでドタバ

夕した。

父親が大好きだった美咲は、入れるのをイヤがっていたが、美琴はうれしかった。

ハンバーグは、父の作るのと同じ味がした。

それだけで、美琴はアキトを気に入ったのだ。

トントント トトン、トン？

リズムの悪い、疑問符ぎもんぷのついた音がキッチンから聞こえて、美琴は目を覚ました。

「……………」

低血圧な頭を持ち上げた美琴は、寝惚け眼で辺りを見渡す。

朝日あさひを通す窓ガラス。フローリングの床。大きなテーブル。

美琴は姉の帰りをリビングで待っていたことを思い出し、少し違和いわを感じた。

「……………」

考えるが、わからない。すぐに諦あきらめた美琴は、ベッド代わりにしていたソファソファから降りると、ふわ…とあくびをひとつする。

そして覚束おぼつか無い足取りあしどで、キッチンに入った。

「……………」

「おはよ」

あくびをしたまま、美琴は固まった。

台所だいしよで朝あさごはんを作っていたのはアキトではなく、姉の美咲だったからだ。

「おなか減ったでしょ。もうすぐできるから待っててね」

ニコリと笑う美咲。いつもと違う、穏おだやかなその笑顔に美琴は気け圧おされてしまった。

そのことに関して、美琴みこ自身が不思議ふしぎに思っていると、美咲がうれしそうに言う。

「これ、美琴みこが選んでくれたんでしょ？」

美咲は左手首ひだりてくびを見せた。薄い青のリストバンド。美琴みこが選んだプ

レゼントだった。

「ありがと。うれしいわ」

言って、美咲は美琴の頭を撫でる。

「……うん」

美琴は照れた様子で視線を彷徨さまよわせた。と、姉の後ろ　コンロを見て違和感を受けた。

あるものがなくて、ないものがある感覚。不思議に思っていると、その正体に気づいた。

「……カレーは？」

そう、カレーだった。アキトと共に作ったカレーの入った大鍋だいなべが無いのだ。

美琴の疑問を聞いた美咲は、ニコニコ顔のまま、

「捨てたわ」

「………え？」

信じられない説明を受けて、美琴は訊き返した。

「ど、どうして？」

「だって朝からカレーなんて食べないでしょ。だから捨てたの」

「で、でも前にカレーを作ったとき、一週間三食カレーだった……」

「カレーがいの？ それなら作ってあげようか？」

一瞬、怒っているのかと思ったが、違う。姉の顔は心からそう思っているものだった。

「う、ううん。なら、いい……」

「そう。なら席についてなさい。もうすぐできるわよ」

「う、うん……」

ぎくしゃくとうなずいた美琴は、テーブルへと向かう。

サラダとトーストと牛乳が置かれた食卓しょくたくに座ると、感じてた違和感に気づいた。

ケーキがない。フライドチキンがない。飾りつけがない。

部屋に付けた飾りつけはぜんぶ外されていて、テーブルの上には簡素かんそな朝食。昨日、あれだけががんばって準備したパーティーの面影おもかげ

は、どこにもなかった。

呆然と部屋を見渡す美琴。ふと、その瞳がある一点で止まり、大きく見開いた。

「……お姉ちゃん……これ」

見つめる一点に歩み寄った美琴が拾い上げたのは、細長い小箱。包装を解きもせず、グシャグシャに潰され、ゴミ箱に捨てられていた。

美咲はあつけらかなとした様子で言う。

「それはいらないわ。そこに捨てといて」

「……アクトのプレゼントだよ？」

「知ってる。だからいらないの」

厚手の玉子焼きを切りながら、美咲は笑った。

美琴は、生まれて初めて姉が怖いと思った。

「あいつつたら、あたしをあの子と重ねてたのかしら。バカよね」

初めて目の当たりにする陰湿な嘲笑。見たこともない姉の様子に、恐怖を掻き立てられた美琴は、助けを求めて走りだす。

「ちょっと。もうできるわよ！」

「いらない！」

即答した美琴は駆け足でリビングを出る。廊下を突っ切り、アクトの部屋へと向かう。

「アクト！」

襖を開けた美琴が見たのは、誰もいない部屋。

壁には見慣れたスーツがかけられ、床にはウォルフ専用の器があるが、誰もいない。

涙ぐんだ美琴は、同室に住んでいる二匹の名を呼ぶ。

「ウォルちゃん！ ファルちゃん！」

工藤家全体に響きわたるような声。狼と鷹は、いつまでたっても現れなかった。

「アクトならいないわよ」

振り返ると、姉が立っていた。美琴は一步、後退りする。

「ウォルフも、ファルケもね」

「どうして!？」

鼻を齧りながら美琴が訊くと、

「いないから」

美咲はあっさりと言った。

「必要ないから雇うのやめたの。だからもういないのよ」

「そんな……」

泣き出してしまふ美琴。美咲は困ったような笑顔をした。

「泣かないの。今までずっとふたりで暮してきたじゃないの。別にいいでしょ」

ぶんぶん美琴は首を横に振る。

ため息を吐いた美咲は、部屋を見渡すと呟いた。

「片付けなきゃダメよね」

「……えっ?」

「だって、こんなのがあるから美琴泣いちゃうもの」

言って美咲は底の浅い器を拾い上げると、ゴミ箱に捨てる。

「美琴も手伝ってね。全部捨てれば、忘れられるわよ」

微笑む姉は次々とアキトたちの持ち物を捨てていく。笑顔のまま
で、捨てていく。

美琴は美咲が大好きだった。家事と勉強に追われても、いつでも
気を使ってくれる姉が。

美琴は美咲を尊敬していた。父が死んだときも、涙一つ流さず抱
きしめてくれた姉が。

けれど、今は嫌いだった。美琴の大切なものを次々と捨てていく
姉は、大っ嫌いだった。

だから美琴は、生まれて初めてこの言葉を美咲にぶつけた。

「お姉ちゃんのバカ!!」

叫んだ美琴は姉を突き飛ばして部屋から飛び出した。

「美琴!」

慌てた美咲が部屋を出ると、戸の開いた玄関が見えた。

アキトは夢を見ていた。

体がバラバラになり、感覚がバラバラになり、意識だけが浮遊する夢。だがこれは厳密的に言えば夢ではない。創造力を持たないアキトの見るそれは、過去の現実だ。

そこは地下室だった。薄暗く、音のない地下の工房。

工具、書物、義肢、人形などが散ばる工房の中心で彼女がいた。

腰まで届く栗色の髪。しなやかに動く細くて長い指。気高さを宿

した鷲色の瞳。

工藤美紀恵。アキトの作り手であり、美咲の母であり、傀儡師で

ある女性だ。

単色陣の中、力ある本を片手に詠唱していた彼女は、唐突に膝を崩す。

ガラクタの上に倒れこんだ美紀恵は、激しく咳き込んだ。

アキトは咄嗟に近寄ろうとするが、できない。出力装置がないからだ。

咳き込んでいた美紀恵が立ち上がる。

緩慢な動作で単色陣の中心に戻ると、再び詠唱を始めた。

美咲に似ていると思った。外見だけでなく、集中したときの瞳の色。よく似ている。

見惚れていると、詠唱が止む。作業が終わったらしい。陣から出た美紀恵は、皮も肉もないアキトの頬を撫でた。

「もうすぐよ。もうすぐ、あなたに体をプレゼントできるわ」

美紀恵が幻糸を切った。

場面が変わる。

「誰よ、あんた？」

美紀恵がアキトを傀儡しながら言う。

険しい顔は、工房の入り口に立つ銀髪の女性に向けていた。

「ノックならしたわよ」

「入室を許可した覚えはないわね。出てっくれる？」

銀髪の女は従わず、アキトに近寄る。

「これがあなたの人形？」

顔を覗きこまれたアキトは、なにも言えない。

まだ駆動装置さえ取り付けられていない彼に、発声装置などついていなかったからだ。

代わりに美紀恵が喧嘩腰に答えた。

「だったらなんなのよ」

「大したものね。こんな人形、初めて見たわ。完成は一〇〇年後かしら？」

痛い所を衝かれて美紀恵の顔が苦くなる。銀髪の女はアキトに触れると、呟いた。

「イクシルを使ってるの？ でもこのままだと暴走するわよ。足りないのは色々あるわね。それにこのスペースに入れるのは空気圧駆動装置？ だったらやめたほうがいいわよ。出力が低すぎるもの。でもそうすると、冷却液がこれじゃダメになるわね」

「余計な　！！」

「完成させたくない？」

怒声を遮った銀髪の女は、A4紙の束を美紀恵に投げ渡す。

受け取った美紀恵は、警戒しながらもその文面に視線を下ろすと目を大きく見開いた。

「これは……」

「マギノイドプロジェクト。あなたにこれができる？」

「あたしの言う設備と材料と人材、用意できる？」

「それが必要なら。　どう、話だけでも聞いてみない？」

しばらく黙り込んだのち、美紀恵はうなずいた。

場面が変わる。

「正気か、ミキエ！」

真っ白な部屋で巨漢の大男が怒鳴った。

「たしかに貴女は天才だ。【探求者】の異名を持つだけのことはある。しかしだ、貴女は傀儡師だぞ！ 錬金術師でもなければ複製師

でもない！ こんなデタラメな複合術式、誰だろうと不可能だ！！」

「理論上は充分可能よ。安心して、代償はあたしだけにやるから」

「……どうしてそこまで 今度は腕が腐り落ちる程度ではすまないぞ……！！」

「約束したから」

失った右腕の付け根を撫でながら、美紀恵は言った。

「カルゲ、あなたの力が必要な。このコにはあなたで作る水銀が必要な。協力して」

「くだらない。こんなバカげたことに意味など無い」

「わかっているても試さずにはいられない。それが人間よ」

「早退させてもらう」

去っていく巨漢の男に、美紀恵は微笑んだ。

「よろしくね」

場面が変わる。

「ええ。必要なのはデータだけ。契約通り、Yr-03はあなたの所有物よ」

ベッドの上、無数の医療機器に繋がられ横になった美紀恵に、銀髪の女は言う。

「けど、大したものね。まさかこんな短期間で本当に完成させるなんて」

「約束を守る女なのよ、あたしは」

「手足どころか、内臓の大半まで失ったけどね」

言葉を、美紀恵は鼻で笑って弾いた。

「あたしや今世紀最高の傀儡師【探求者】よ」

「異能力者は狂人とはよく言ったものね。それでどうするの、彼？」
美紀恵は、微笑んだ。

「居るべき場所に行かせるの　　約束を果たすために、ね」

場面が変わる。

最近のデータだ。美咲に逃げられたあとのデータ。

工藤家の前まで来たアキトがチャイムを押す。間延びした音が響く。

反応は無い。誰もいないらしい。

赤外線センサーを使って確認すると、塀を飛び越えた。

敷地内には精神干渉型の結界が張られていたが、人形のアキトには通じない。音もなく庭に着地したアキトは、セキュリティをハッキングして玄関を開けると工藤家に入った。

どこか変。部屋を見て回るうちに、アキトは違和感を覚えた。

残り五室、四室、三室、と続くうちに、それは強まった。

そして、母の使っていた部屋に入ったとき、その正体がわかった。母の写真が一枚もない。母の部屋も、母の物も、なにもない。

アキトは理解した。母の残滓はとうの昔に消えたのだ、と。

アキトは薄暗い場所で見覚めた。

そこは狭く、湿った場所　　穴倉だ。

「雨は止んだみたいだけど……敵はどうかかな？」

呟くと穴倉から頭を出し、周囲の情報を集める。

熱源　なし。人影　なし。幻糸　なし。

誰もいないことを確認して、アキトは穴倉から這い出た。

「ようやく、見失ってくれたんだ……」

土を払い落しながら、吐息をつく。昨日、工藤家を解雇されたと

きから、アキトは複数の人形につけられていた。尾行おびされていることに気づいた彼は、雑木林ぞつぎばやしに入ると穴を掘り、中にすっぽりと隠れてやり過ごそうと考え実行し、それは見事に成功したのだが、

「……寝過ぎちゃいました」

空を見上げればすでに茜色あかねいろ。時刻は四時を過ぎていた。

スリープモードに移行したのが昨日の十九時なので、十九時間も寝ていたことになる。

「危なかったあ。【指揮者コンダクター】さんに見つかってたら、簡単に捕獲ほかくされてましたね」

ひとり、呟いたアキトは、穴倉にしまったトランクを取り出そうとする。

取っ手を掴み、片手で持ち上げようとして、

「……うぐ」

胸が痛むと演算能力が奪われる。姿勢制御しせいせいぎよにエラーが起こり、ふらついてしまった。

「いけない……もう、時間が……」

木に背を預けたアキトは、そつと唇を押しつけ、上歯うわはをなぞる。乱れなく並ぶ歯の中で、二本だけ伸びる鋭利な犬歯けんし。先日より明らかに伸びていることに気づくと、触れるのをやめた。

しばらく、その場で体を休めていると、聴覚ちやうかくセンサが近づいてくる音を拾う。

土を踏む音と荒い呼吸。 ヒット。ウォルフのものだとわかった。

「どうしたの、ウォルフ？」

現れたウォルフにアキトが訊いた。

ハイイロオオカミは「うおふ！」と一鳴きすると袖そでを噛み、きた道へと引つ張った。

「ミコネエになにかあったのかな？」

リノアの一件もあり、美咲にはファルケを、美琴にはウォルフをつけていた。

ミコネエに干渉してきたのかな？

思ったアキトが、引かれるまま歩き出すと、

「 発見！」

ドン、と小さな質量が背中せなかにぶつかった。

どうして背後はいしから？

バランスが悪い状態で押されたアキトは、きた道とその反対の道を不思議そうに、何度も交互に見るウォルフを視界に入れながら倒れた。

「アキトアキトアキトアキトアキトアキトアキト……！！！」

連呼れんこしつづきゅ？？と抱きしめてきたのは、美琴だった。

「ど、どうしたの、ミコネエ？」

顔から地面にダイブしたアキトは、頭だけを振り返らして美琴を見る。

驚いた。

変化に乏とほしい美琴の顔が、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。しかも服は泥だらけで、昨日から着ていたもの。そしてなぜか靴を履はいていなかった。

「と、とりあえず、顔を拭ふきましょう。すこし離れてもらっていいですか？」

うなずいた美琴が背から離れる。アキトはうつ伏せしようつたいの状態から座り込むように姿勢を変えると、ハンカチを取り出して少女の顔を拭ぬぐった。

「 これでよしつと。キレイになりました。それで、どう
またもや飛びつかれてアキトは言葉を切ってしまう。

今度は倒れなかったが、首をぎゅ？？と絞しめられた。

「ミ コ、ネエ……苦しく……は、ないけど……やめて、欲しい」

「ヤっ！！！」

叫んで、美琴は更に力を籠こめた。

「やなのっ！ もうやなのっ！！ いなくなるのやなのっ！！！」

言い終わるとまた泣き出す。

「いやだよお……パパみたいになくなるの……ひく……いやだよ……」

泣きじゃくる美琴の頭を撫でると、アキトは首を横に振った。

「ごめんなさい。もうムリなんです」

「どう、ヒック……して……？」

「ミサネエに嫌われちゃったから。顔を見せちゃいけないから。だから、帰れません」

「やあ……なの……。みんな、ツク……いつしよなの……」

「けど」

「かえ、ヒク、ろう……。おうちに、ふあ、かえろうよお……」

「……………」

「ねっ……グス……みんなで、帰ろう……めい　グス……れい、なの……」

アキトは答えず、美琴の頭を撫で続けた。

十

「　　そうですねか、ありがとうございます。　　はい。見つけた

ら連絡をお願いします」

頭を下げながら、美咲は電話を切る。

美琴が家を飛び出したのが八時間前。即座に続いた美咲だったが美琴の影さえ確認できず、帰ってきているのでは、と儚い希望に縋り付くものの裏切られたのが二時間前。

以後、美琴の友人宅に片っ端から電話をかけるという作戦に出たが、成果はなかった。

「どこ行つたのよ……美琴」

電話機の前、落ち着かずろろろとしながら美咲は呟いた。

もしも美琴になにかあったら。たとえば、交通事故とかにあっていたら……。

想像そぞうしただけで、美咲の顔が青くなる。

こうしちゃいられない。待っているだけなんて性にしよ合わない。美咲はもう一度外を探そうと思ったとき、電話が鳴った。

「はい！ もしもし　！！」

『一日遅れのはっぴばーすでー』

即座そくざに切った。数秒の沈黙ちんもくののち、また鳴り出す。

ため息をついて、美咲は受話器じわきを取った。

『いきなり切るって、いくらなんでも酷くない？』

『いまそれどころじゃないんです。あとにしてください！』

『おや、ご機嫌斜めですか。んじゃアキト呼んで。あいつに話があるの』

『いませんよ』

『買い物かなんか？　だったいつくらいに戻るか』

『戻りませんよ。もう二度と』

感情の消えた声。そこに至りいた、恭子は美咲の様子さまじがおかしいことに気づいた。

『……なんかあったの？』

「知ってたんですよね、恭子さん。あいつがあんな女に作られたって」

『………そっか。バレちまったのかい』

陽気やうきを消した恭子は、美咲のとった行動を言い当てた。

『んで、美咲はアキトを追い払はらったって』

「そうです。あの女の作ったガラクタなんていらなから」

『まだ怨うらんでるのかい、美紀恵のこと？』

質問に、美咲の頬が憎々ゆがしげに歪ゆがんだ。

「当然です！　お父さんと美琴を捨てたあんな女を許すなんて　！！」

『じゃあさ、なんで傀儡くわいの鍛錬たんれんなんて続けてるの？』

「そ、それは………」

美咲は返答へんとうに窮きゆうした。

あの女から教わった傀儡くわいの術。それを未だいまに続ける理由が、見当みあたらなかったからだ。

「あ、あれは趣味みたいなものだから……」

やっとの思いで探し当てた理由を口にする。受話器の向こうで恭子が鼻で笑った。

「趣味、ねえ。そりやそうか。美紀恵とあんたを繋ゆいぐ唯一すべの術が、傀儡だもんね」

「あの女のことは関係ありません！」

『でももう、美紀恵は帰ってこないよ』

淡々（たんたん）とした口調で、恭子はもう一度言う。

『美紀恵とは会えない。美紀恵は、もうお空のお星様になったからね。知ってるんだろ？』

「ええ！ 当然の結果ですよ、清々（せいせい）しました！」

無理に嘲あはりの声を出した美咲は、鼻で笑おうとして失敗した。

『ふーん。ならば、美紀恵の死因の一つがガンだったてのは？』

「へ、へえ。そうなんですか」

『んじゃ、家を出るときには手遅れだった、てのは？』

「え？」

美咲の顔が凍りついた。

『なんだ、アキトから聞いてなかったのかい？ 美紀恵は先が長くないって知ってたから、残されるあんたらのためにアキトを作った、って話』

「……………うそ」

一言、擦かれた声を漏らすと、美咲の顔に温度おんどが戻った。

瞳を揺らし、顔を手で押さえながらブツブツと呟く。

「うそ　ウソよ。だってあの女は、あたしたちのことなんてどうでもよくて……。だ、だからお父さんを捨てて、手紙出したのに、返事だつてくれなくて……」

『手紙ならオレが捨てたよ』

「えっ？」

その言葉の意味がすぐにはわからなくて、美咲はきよとんとした。

「捨てた……恭子さんが？」

「あれの宛先^{あてな}つて、オレのセーフハウスの一つなんだよね」

「でも、お父さんはここに送れば届くって……」

「たしかに届けられるさ。あたしだけが美紀恵の居場所^{すまいばし}を知ってたからね。でも、捨てたよ。一枚残さずに焼却処理。いや、そんなとき作ったジャガバターは切ない味がしたねえ」

「な、なんでよ!!!」

目上^{めづえ}の者への礼儀^{れいぎ}も忘れて美咲が怒鳴^{どな}った。

「どうして燃やしたの！ どうして届けてくれなかったの！ どうして……!!!」

「美紀恵の邪魔をしたくなかったから」

シンプルな答えには、自らの行為^{みずかこうい}に対する非^ひを、一片^{いっぺん}も抱^だいていなかった。

「美紀恵 【探求者^{パシッター}】は命をかけて人形作りに取りかかったた。」

抗癌物質^{こうがんぶつしつ}でガンを抑^{おさ}えて、それでも衰^{おとろ}える体は傀儡^{くわい}で無理やり動かして、一心不乱^{いっしんぱん}に人形を作ってた。だから邪魔^{じゃま}になる手紙は渡さなかった」

「……どうして」

母が去った理由を知り、美咲はこぶしを震わした。

「どうして、そこまでして……」

人形などいらなかった。母がとりに居てさえくれればよかった。いくらガンだったとはいえ、ちゃんと治療^{ちりょう}を受けて ダメでもホスピスにでも入れればまだ生きていられたのに。

どうして、と思っていると、恭子は言った。

「心配^{しんぱい}と迷惑^{めいわく}と約束^{やくそく}」

「……えっ？」

「美紀恵の言ったことだよ」

恭子は『心配』と『迷惑』を説明した。

『心配はあんたらを置いて先に行くこと。んで、迷惑は寝たきりな上に術まで使えないなんていう、お荷物にはなりたくないからだつて』

美咲は瞬間に理解した。

術は魂と精神と肉体で行うもの。魂は力の根源であり、精神は術式の組み立てを行う。そして肉体は、力と術式を融合させて、世界に干渉するものだ。力に術式を定着化させるには、脳を筆頭に五臓六腑すべてに通す必要があった。だから、手術などで内蔵を切ってしまうと、術の効力が落ちてしまい　最悪、術そのものが行使できなくなる恐れがあるのだ。

美咲は、最後の『約束』について尋ねる。

「それが迷惑　なら、約束は……」

『知らない。いくら訊いても、美紀恵は最後の最後まで教えてくれなかった』

でも、と恭子。

『よほど大切なものだったんだろうね。期日は過ぎてるけど、絶対守るって意気込んでた』

「そう……」

美咲が肩を落とす。なにも知らずにただ憎んでた自分が許せなくて、でもまだあの女への憎しみは残っていて、それらがドロドロと混ざり、矛盾した感情を作り上げる。

悲しみながら憎む。あの女を怒りながら自分にも怒り、許しているのに許していない。

わけがわからない。

美咲が無言で唇を噛み締めていると、恭子が訊いてきた。

『アキトはどうする？』

「……アキト？」

『アキトが美紀恵の遺産だって知ってるんでしょ。どうするの？いるの、いないの？　いないんだつたら、すぐにでも壊しに行

くよ。あいつは危険過ぎる』

「こ、壊すって」

『時間がないんだよ。事が起こってからじゃ遅いんだ。いるんだっ
たらすぐに契約エンゲージしな。じゃなきゃ壊すよ。で、どっちだい？』

「それは……」

返事に迷っていると、電話が切れた。

「あ、あれ？」

かけ直しても繋がらない。それどころか、受話器からはなんの音
もしていなかった。

「回線が切れたの？ でも、どうして……」

「 こんにちは、ミス・クドウ」

玄関からのあいさつ。顔を向けると、そこには目の赤いリノアと
その人形がいた。

「ちよ、なに勝手に入ってきてるのよ！」

リノアはムスっとした顔で美咲の怒声とせいを受け流すと、指輪だらけ
の指を揺らした。

「少々（しようしよう）事態じたいが変わったようなので、実力行使をさ
せてもらいます」

飛び掛ってくる黒服人形。

組み伏ふせられた美咲はなおも抵抗したが、口に布をあてられると急
激な眠気に襲われた。

……美琴……アキト……ごめんね……

言葉が出ることはなく、意識は闇の底へと沈んで行った。

十

消える

主人の前から姿を消す。

解約よ

仮契約かいじよの解除。

顔なんて見たくもない

顔を見せるな。

以上が、あの雨の日に美咲が叫んだ命令ないようの内容だった。

主人の命令は絶対だ。逆らうことはできない。たとえ解約されているとしても、主人設定は美咲のままだから、逆らえない。

だからアキトは逆らわなければいい、と考えた。

みんなで帰ろう　　ひとりと二匹と一体でクドウの家に行く。

この命令を実行させるために必要なのは、美咲の視界に入らないこと。それに尽きた。

「ウォルフは左右、ファルケ後方を警戒。よろしくね」

アキトが油断なく周囲を見渡しながら命令すると、先行するウォルフが「うおん！」と鳴いて左右を確認し、呼び戻したファルケが「クア！」と鳴いて背後を見る。

「ミサネエの姿はないよね？」

尋ねると、二匹は肯定するように鳴いた。

「よし、警戒を怠らないように」
念を押してから、アキトは歩き出す。

美琴はすでに寝ている。どうやらかなり疲れていたらしい。熟睡していた。

類にかかる美琴の髪感触に、アキトは目を細めて呟いた。

「……これでお別れですね」

命令はあくまでも一緒に帰ること。一緒に暮らすことではない。

だから、美咲に気づかれぬよう、美琴を家まで送り届ければ、それでお別れだった。

もしも美琴と一緒に暮らす、という命令を出していても、

アキトはそれには従えない。この少女の命令優先順位は第三位。第二位の美咲の命令を取り消す力はなかった。

美咲の命令を取り消せられるとしたら、その方法は四つ。

一つ目は美咲自身を取り消す。二つ目はその命令を実行するにあたって、美咲及び美琴の生命に危機が生じるとアキトが判断した場合。三つ目は主人設定の解除。そして最後の四つ目は、最上位の命令優先権を持つ母　工藤美紀恵が命じた場合だった。

「お母さん、ボクももうすぐ逝きますよ」

アキトは呟く。彼は美咲たちの元に訪れる際に、さい監察官たる工藤恭子から言われていた。

美咲と美琴が自分を必要としない場合、破壊する。

つまり、雇われなかつたらそのままスクラップ、ということだ。

アキトは、しんじやく快くそれを承諾した。彼は姉妹のために作られたのだ。ふたりから必要とされなければ、存在する意味がない。

工藤の家を囲む塀がアキトの視界に入る。

「たった一週間だけど、一緒に過ごせてうれしかったです」

眠る美琴の耳元で囁き、別れを惜しむよう髪を撫でると、

「急ぎなさい。警察や八神やがみに知られては厄介ですわ」

せいもん声紋データ検索 ヒット。リノア・グレイン・フィードラム。

アキトがそつと角から顔出す。人形がぐつたりとする美咲を車に乗せるところだった。

「これでエサは撒き終わりましたわ。ホームに戻りますわよ」

ボタンとドアが閉まる音がして、エンジンが回転する。

ちゅうさ咄嗟に飛び出そうとするアキトだが、美琴を背負っていること思
い出し、二の足を踏む。

その間に車は走り出し、アキトは叫んだ。

「ファルケ！」

肩にとまっていたオオタカが羽を広げた。

「あの車を追い、行き先の情報を収集。第一にミサネエを連れ込んだ場所の詳細な情報、第二にミサネエに関する情報。かんち感知されないように！」

ファルケは一鳴きすると空に羽ばたいた。

それをアキトは見届けず、今度はウォルフに命令を下した。

「ウォルフ、キミも追跡するんだ。ついでけど、なにがあっても攻撃はダメ。目的地にいたら速やかに隠れて待機するように」

ウォルフは瞳に不満の色を入れた。アキトはその頭を撫でる。

「出番は用意するよ。さあ行くんだ！」

肉食獣特有の光を瞳に宿したウォルフは、遠吠えを上げると疾走した。

「お母さん。ちょっと寄り道してから逝きますよ」
アキトはアイスブルーの双眸を、車の去った方角へ向けた。

十

夢を見ていた。

お父さんが死んでから見ることもなくなったあの女の夢。

女はとつても大きな人形を操る。

ポニテールにした髪を揺らしながら踊り、ターンを決める。人形も女と同じ動きをした。

自分とはぜんぜん違う再現。完璧な同調。

けれど、女は納得しない。難しい顔で腕を組む。

また失敗らしい。女は難しいことをブツブツ呟くと、歩き出す。工房に行くんだらう。

憧れだった。

かっこよくて、キレイな女に自分は憧れた。

大好きだった。

優しく、たくさんお話を聞かせてくれる女が大好きだった。

日々（ひび）のほとんどを工房で過ごす女はあまり構ってはくれない。

寂しかったけど、イヤじゃなかった。

次に顔を出すときはもつとすごい傀儡を見せてくれるから。

次に顔を出すときは美味しい料理をいっぱい作ってくれるから。

だから、イヤじゃなかった。

それはとてもたのしみだったから。

場面が変わる。

桜の咲く春。

女と約束した。自分と女だけの約束。

女は約束を破らないから、来年が楽しみだった。

場面が変わる。

とつても暑い夏。

外から帰ってくる女がちゅっちゅしてくれただ。うれしかった。家族が増えるわよ、と女が言った。その日はお祝いした。

場面が変わる。

葉の散る秋。

女を見なくなつた。お父さんに訊くと、病院に入院したのだと言つた。

女は風邪を拗こじらせた。だからあたしも気をつけなさいと、お父さんは言った。

場面が変わる。

雪の降る冬。

女は寝ていた。病院でたくさん機械に繋がって寝ていた。おとうとはニクのかたまりだった。

場面が変わる。

また春。

女が帰ってきた。笑っている。でも悲しそう。

女が今日の料理は自信作よ、と胸を張って言った。でも悲しそう。

女が頭を撫でてくれる。でも悲しそう。

朝起きると、女はいなかった。

十

「お目覚めの気分はどうですか？」

「……サイテーよ」

それが目覚めた直後の美咲とリノアの会話だった。

ボロボロのソファアに横たわっていた美咲は、痛む頭を押さえながら体を持ち上げる。

元は高級感溢れるホテルの広間かなにかだったのだろう。

二〇畳を越える部屋の広さ。壁には巨大な風景画が飾られ、床一面に絨毯が引かれているが、所詮は過去のこと。あつたであろうテールやイスのほとんどが撤去され、残ったそれらは傷だらけ。汚れた壁はコンクリートが剥き出しで、風景画は所々（ところどころ）が破れており、風雨に曝され続けた絨毯は、元の色がわからないほど色褪せていた。

ただの朽ち果てた廃墟。美咲は早くも我が家を恋しく思い、無理にでも帰ろうかと考えたが、すぐ諦める。壁に黒服の人形がズラリと立ち並んでいるのだ。

「んで、なんであたしをさらったの？」

軽く痛む頭を押さえながら美咲が訊く。

埃っぽいイスの上で読書をしていたリノアは、つまらなそうに答えた。

「人質以外になにかあるとお思いですか？」

「あたしはもう、あいつの主なんかじゃないわ。解約したの」

「ええ。知ってますわ。言ってみましたものね」

「……なんで知ってるのよ」

「盗聴させていただきましたから」

「なっ　　！！！」

「涙なしでは語れない話でしたわね」

瞬間湯沸かし器の如く顔を赤くした美咲は、怒鳴ろうと口を開き
気づく。

「あんだ、もしかしてマジで泣いてた？」

かすかに充血している瞳。そっけない顔をしていたリノアの顔に
朱が入った。

「フ、フロリダのグランマを思い出しただけですわ！」

「泣いたつてのは否定しないのね」

「い、いいではありませんか！　涙腺が弱いのは昔からなんですも
の！　全米が泣く映画を見ると涙がでるのも、しかたないことなの
ですッ！！！」

「それは重傷ね……まあ、いいんだけどさ。どっちにしたって、あ
たしをラチっても」

「Yr-03なら来ますわよ」

リノアは美咲の言葉を遮って言う。

「あの人形はあなたに執着していますから。元とはいえ、主の危機
には飛んでくるでしょう」

絶対の自信が入った言葉を聞いて、美咲は自嘲的な笑みを浮かべ
た。

「くるもんですか。こんな性悪女を助けるわけないじゃないの」

「いいえ。来ますわ。ちゃんと地図の入った手紙を置いておきまし
たもの」

「こないわよ。あたしなら絶対こないもん」

「来ます。わたくしの勘に間違いはありません」

「こないってば！」

「来ますわ！」

言い合って睨み合う東の少女と西の美女。

ふたりは鋭い眼つきで威嚇しあっていたが、やがて同時にそっぽ
を向いた。

「……………」
「……………」

場に沈黙が降りる。

錆びた時計だけがチクタクと鳴り続け　美咲が先に耐え切れな

くなつた。

「　訊きたいんだけどさ」

「　なんですか？」

「　あんだ、アキトを手に入れてどうするの？」

「　そんなこと決まっていますわ」

　ちらりとリノアを盗み見ると、彼女はそんなこともわからないの

？　といった表情で、

「　分解ですわ」

「　なっ……………」

　絶句する美咲にリノアは言う。

「　どのような術式を組み込めば感情がもてるのか、どのような部品を組み込めば術を行使できるのか。本当に、興味深い人形ですわ」

　未知への期待に頬を赤くして、リノアは大仰に両手を広げた。

「　これが解明できれば、グレイン・ドール・カンパニーは更なる躍進　いえ、あのSE社をも超える大企業へと成長しますわ！」

「　あんだ、アキトをなんだと思ってるの！？」

「　出来の良い人形。それ以外にどう見ると言うのです？」

　本当に、アキトをただの人形としか思っていない顔。

　美咲はひさしぶりに、純粹な怒りを覚えた。

　オロオロしながらいつも一生懸命なアキトを。主人を守るために体を盾にするアキトを。作り手を悪く言われていまにも泣き出しそうな顔になるアキトを。

　そしてなにより、あの女が作ったアキトを、ただの人形と同一視していることに。

　気づけば、美咲は人形に囲まれていることも忘れてリノアに殴りかかっていた。

「み、ミス・クドウ！ なにををするのですか！」

美咲の拳による一撃を辛くも避けたリノアは、ぎよっとした顔で叫んだ。

「うっさいわよ、このオバハン！」

「オバ　　オバハンですって!？」

リノアは顔を真っ赤にすると右手の指を揺らす。

「ハンター1、ハンター2！ この娘を取り押さえなさい！」

黒服の人形が動き出すと、美咲の腕を掴んだ。

「放せ、放せつてば！ このオバハンは一発殴られなきゃダメなのよ!！」

「ま、また言った！ また言いましたわね!!！」

メルトダウンするのではないか、と思えるほど赤みの度合いを強めて、リノアは叫んだ。

「ハンター1、ハンター2！ 骨の一本でも折つてあげなさい!!！」

強まるのは掴まれた腕の圧迫感。美咲の額に脂汗が浮かび、骨が異音を奏で始め、

「ボクの主に触らないでください」

亀裂の入った窓ガラスを突き破り進入する漆黒の影。

絨毯にさざなみを起こして走る影は、美咲の腕を掴む二体の人形を蹴り飛ばした。

「きゃっ!!！」

急に開放されてよろめいた美咲は、温かい腕によって支えられる。

「大丈夫、ミサネエ？」

「ここ最近、聞きなれた声。美咲が見たのは白い肌に黒い髪。そして瘦躯の肉体。」

アキトだった。

第五章 イクシルと鎧

割れた窓から夜風が入り込む。

風は冷たく、リノアはコートを着込みたい衝動に駆られたが、気にしていらなかった。

「敷地内には結界を張ってあったのですけど」

緊張を孕んだ声を向けるのは、Y r - 03 アキト・ユル・アイデ。

その人形が着るのはスーツでなく、黒いベストにズボン、そして同色のロングコートだ。

無論、ただの衣服ではないだろう。

ベストは防弾性のもの。ポケットには刃物のグリップが見え、膝まであるロングコートにも、なにか入っていると予想できた。

じっと観察していると、アキトは親指を弾いてなにかを飛ばしてくる。

キヤッチしたリノアは、手の平を開いて頬を歪めた。

亀裂の入ったサファイヤ。アキトを襲う際に使った、マネキンの中核だった。

「手形複製をさせてもらいました。即席結界だったので、思いのほか簡単でしたよ」

「……送迎車がムダになりましたわね。用意しておりましたのに」

「……ムダに律儀よね、あんた」

場違いな美咲のコメントは無視して、リノアは右手を揺らした。すると倒れていたハンターが二体、壁側に並んでいた三体のハンターが動き出す。

美咲を抱き寄せながら、アキトはポツリと呟く。

「右手五指で狩人型五体を操りますか。二指で一体はデマですね」

「ご名答ですわ。一指一体がわたくしの実力。どうです、操られてみませんか?」

「ごめんなさい。ボク、ミサネエとミコネエ以外に、体を許すつもりはないんです」

事態の推移を見守っていた美咲の顔が赤くなる。リノアは目を細めた。

「ミス・クドウはあなたを必要ないと言ったのよ?」

「ボクの型式名称は『騎士』ですよ。この忠誠は、なんと言われても捨てません」

「健気ね、なら実力で捕らえさせてもらいますわ!」

口頭が終わると切られる火蓋。リノアの指が宙を踊る。

「行きなさい、わたくしの人形たち!!!」

ハンターは腕から隠しブレードを出すと走り出した。

片手に一本、両手に二本が全五体。計一〇本のブレードが弧を描きアキトへと迫り 耳を撃く轟音と閃光が部屋に満ちた。

迫り来る刃。その太刀筋は直線的で速くもない。しかし、数が多かった。

一〇本にもなるブレードは往なしきれないし、防ぎきれない。瞬時に悟ったアキトは、片手で美咲を己の背後に押し込めると、残った手をロングコートに懐に入れソレを掴んだ。

「なっ!」

リノアの目は良いらしい。アキトの取り出したソレを見たリノアは、顔をぎよつとさせると、フリースヴェルグの影に飛び込んだ。

すると始まるのは、音と光と衝撃の三重奏。

音はアキトの聴覚を壊さんとはかりに騒ぎ立て、光は視覚を潰す激しい明滅を繰り返す。そして衝撃は人形たちのブレードを砕き、体を守る薄っぺらの金属板を貫いた。

「5.7mm x 28弾の直撃は、さすがに効きますね」

硝煙が立ち込める部屋の中、アキトが片手で持っていたのは特異

な形をした銃。

P - 90 サブ・マシンガン FN社製短機関銃だ。

「人形は銃器を使わない、とは限りませんよ」

ちようたん兆弾を恐れてフレースヴェルグの背に隠れていたリノアは、怒りに頬を歪めた。

「やってくれましたでしたね……！ フレースヴェルグ！」

左手が揺れると、今度はフレースヴェルグが突っ込んでくる。

アキトは銃弾を叩き込むが、黒人の人形は意にも介さない。一気に迫り、拳を持ち上げた。

「ミサネエ、少し揺れますから、舌を噛まないように」

「へ？」

発砲音とマズルフラッシュの衝撃にふらつく美咲の返事を待たず、

アキトは片手でその体を脇に抱えると、巨人の一撃をサイドステッ

プで避け 直撃。

軌道を変え、バックナックルとなった拳がP - 90を砕いてアキトの腹部に叩き込まれた。

「ッー！」

アキトは壁際へと飛ばされる。が、ただで吹き飛ばされたわけではなかった。

「それ なら！」

グリップしか残っていないP - 90を捨てると、腰から同社製の

拳銃 FNファイブセブンを抜き、巨人に向けて全弾発射。弾丸は頭部に吸い込まれ、火花を散す。

互いに攻撃をあてたアキトとフレースヴェルグは、同時に床へと落ちた。

「大丈夫、アキト！」

「立ちなさい、フレースヴェルグ！」

それぞれ主に名を呼ばれ、矮躯と巨躯の人形は、震えながらも立ち上がった。

「あ は……そういうこと、ですか……」

美咲に支えられるよう、体を起こしたアキトの理解の入った眩き。巨人の正体に、美咲が声を漏らした。

「なによ、あれ……」

美咲とアキトの視線の先、ゆっくりと立ち上がった巨人は異形だ。丸太のように太かった腕は左右共々（ともども）二つに別れ、禿げた頭の中から現れたのは鷲の頭部。

四本の腕と鷲の頭を持つ人形。それが四つ腕の巨人の名の由来だった。

「人形の腕は二本、とも限りませんわ」

フリースヴェルグの傍に立ったりリノアは微笑むと、指輪を嵌めた両手を躍らす。すると、弾丸に貫かれたハンター五体が異音を発しながらも立ち上がった。

「……ウソ、あんなに穴だらけなのに……」

「これが人形とロボットの違いですわ」

リノアは優越感を隠さずに言う。
「駆動装置が壊れようとも、腕が？げようとも、頭が砕かれようとも、契約した中核と内部骨格、そしてそのコントローラたる装飾具さえあれば、人形は動きますの」

「ズルい！」

「それが人形ですわ。もつとも、Yr-03は違うみたいですけど」

急に肩が軽くなる。掴んでいた手がずり落ちたことを悟った美咲は振り返った。

「アキト!？」

「……大丈夫、です」

四つん這いになっていたアキトが立ち上がる。しかし、それが精一杯だった。

次の瞬間にも崩れ落ちそうなアキトを見て、リノアは笑みを深めた。

「契約を知らない傀儡師に、契約を求めない人形。ミス・クドウの

体にそれらしいアクセサリー装飾具も彫物も見当たらないのでヘンだとは思っていたのですが、やはりそうでしたのね。Yr-03、あなたはもう

「まだ 持ちます！」

アキトは叫ぶと走りだす。ふらつきながらも、リノアへの突撃を敢行した。

「フリースヴェルグ！」

アキトとリノアとの間に巨人が割り込む。アキトは弾切れのファイブセブンを捨てると、懐から黒曜石の埋め込まれたナタ状のチェインソー、シユバイセンを抜いた。

「邪魔です！」

真正面から斬りかかる。が、漆黒の刃に力はなく、厚い装甲の前にあっさり弾かれた。

「いまですわ、フリースヴェルグ！」

真後ろに引かれる四つの腕。拳を握り、高い静音性を誇る駆動装置が音を漏らすほど出力を上げると、

「『破城四槌』……！」

放たれる鉄拳。返された衝撃によるめくアキトの腹部を、四つの拳が襲った。

「が」

たった一つでも致命的な拳が四つ直撃。アキトの体はボールのように飛ばされ、美咲の頭上を通過するとヒビだらけの壁に激突し易々（やすやす）と突き破ってとなりの部屋まで飛んだ。

「アキト……！」

アキトの作った大穴からと部屋へと入り込んだ美咲は、痙攣するアキトの体を揺すった。

「アキト、大丈夫！ ねえ！？」

「ダイ……ジヨ ぶ」

狂った発声で答えたアキトは立ち上がるうとし、失敗。顔から絨

毯に落ちて埃を巻き上げながら、銀色の血塊を吐き出す。

「二撃目を耐えるには、その体はあまりに細過ぎたのだ。」

「流石にもう、動けないようすわね」

フリースヴェルグと共に入ってきたリノアは、感心した様子で呟いた。

「それにしても、大した人形。AIだけじゃなくて、強度もケタ外れですわね」

曇った窓から差し込む月光だけが光源の部屋の中、銀の吐瀉物を床に広げるアキト。ただの人形ならば、腰を境に真つ二つに折れているはずなのに、その人形は形を保っていた。

「どうですか？ そろそろわたくしのもものになりませんか？」

「冗談！ 誰があんたにやるもんですか！！」

動けないアキトに代わり、美咲が氣勢良く答えるとリノアは意地の悪い笑みを向けた。

「あら？ Yr-03はもうあなたの人形ではありませんのよ、ミス・クドウ」

うつと身を反らした美咲に、リノアは優越感溢れる笑顔を見せつけた。

「今のYr-03は野良犬ならぬ野良人形。だったら、わたくしが拾ってもかまいませんわね」

「くっ……」

悔しそくに唇を噛み締める美咲。益々（ますます）もって笑みを深めたリノアは、巨人にふたりを捕らえようと近づかせる。

「チェックメイト、ですわ」

「そうは……いきませんよ」

アキトが顔を上げた。美咲を護るために、立ち上がるうとする。

まあ……とリノアが感嘆の息をついた。

「本当に、大した人形。まだ動けるのですか」

「この程度の……損傷がなんですか……」

両手で体を起こし、膝に力を入れながら、アキトは言う。

「お母さんは……もっと酷い状態でも……立ち続けました……」

立てるはずがない。フリースヴェルグの一撃は、鉄骨をもへし折るのだ。

並の人形なら一発でスクラップ。たとえ重量級人形ヘビードールであっても、無傷ではいられない。

最低でも内部骨格メインフレームは歪み、内部機構は破損はそんし、駆動装置アクチュエータは停止する。

だから、それでも動くこうとするなら傀儡師が操作するしかないのに、目の前の主のいない人形は、自力で立ち上がるうとしていた。

「ボクを作るため……ふたりのために……立ち続けました……」

「アキト……」

「ボクは……約束したんです……」

片足が床を踏む。崩れ落ちそうな膝を手で無理やり押さえつけ、狂ったバランスーをもものともせず、歯を食い縛って故障だらけの足腰に力を込め、

「お母さんの代わりに……ミサネエたちを護るって 約束したんです……！」

叫んで立ち上がる。震える手でシュバイセンを構え、よろめきながら美咲の前に出る。

不屈ふくつの精神だ。この程度で倒れるのは名折なおれだと。この程度で動けなくなるのは母への冒瀆ぼうとくだと。実に妙な気みやうはするが、目の前の人形は、プライドのみで立ち上がったのだ。

「素晴らしい 実に素晴らしい人形ですわ」

リノアは熱の籠こもった吐息を吐く。

「ミキエ・クドウは、まさに天才でしたのね。万能型でありながら、この戦闘力の高さ。これほどの人形、わたくし見たことがありません」

ただ、とリノア。美咲を見る。

「惜おしむべきは傀儡師のレベルの低さ。同じ天才の作品ですが、

ずいぶんと見劣りしますのね」

本当に惜しいとリノアは思う。あの美咲さえマトモなら 契約

さえしていれば、もつとマシに戦えただろう。天才の作り出した人形に、自分の持つ全ての技術を注いだフレースヴェルグがどこまで迫れるか、試してみたかった。

そこまで思考が進むと、リノアは八つとなつて頭を振った。

なにを考えてるのです、わたくしは。

正々堂々（せいせいどうどう）と闘うなどというのは、愚者のすることだ。大なり小なり自分の人形も壊れるし、得るはずのYr-03も壊れる。修理費だつて、バカにはならないのだ。

物事はスマートに行かなければならない。だからこうして、Yr-03が全力を出せないうちに、捕獲しようとしているのだ。不必要なリスク ギャンブル行為など、するべきではない。

「まあ、あれほどの天才が続いて生まれるなど、ありえませんがね」

左手を動かし命じる。

「フレースヴェルグ、Yr-03を捕らえなさい。ガス欠寸前ですが、油断しないように」

「……ガス欠寸前？」

美咲のまったく理解していない言葉に、リノアの頬が歪む。

まったく、どこまで無知な傀儡師なのでしょう。

自分でも驚くほど苛立つたリノアは、フレースヴェルグを止める
と美咲に言った。

「世界のどこにエネルギーを消費せずに動く機械があるのですか。電気にせよ石油にせよ水素にせよ蒸気にせよ、稼働するにはそれ相應のエネルギーが必要ですわ」

そこでアキトに視線を移す。

「Yr-03としてその例外ではありません。たぶん、【探求者】から受けた力の残滓で動いていたのでしようが、それがもう尽きかけている。それだけのことですわ」

説明し終えて、己に怒鳴った。

「いったいなにをやっているのですか、わたくしは。こんな説明、必要がありませんのに。」

リノアは舌打ちをすると、フレースヴェルグの操作に戻る。

立つのがやつとのYr-03に近づけ、握り潰さぬよう注意しながら、その満身創痍まんしんそういの体を掴もうとし、

「なんのつもりですか、ミス・クドウ？」

「ミサ、ネエ……？」

アキトの前に出る美咲。彼女は両手を広げて、リノアを睨んでいた。

「おどきなさい。あなたに興味はありませんの」

「イヤよ」

「……死にたいのですか？」

フレースヴェルグが拳を握る。

巨人の一撃の前には、人間など紙切れ同然だ。その威力を目の当たりにしているのに、美咲はどかない。

「わたくしがあなたを殺せないとも思ってた？」

「殺せるでしょうね。あんた、そういう目をしてるもの」

「ならおどきなさい。その若さで死にたくはないでしょう」

「イヤよ」

イライラする。なぜわざわざ殺されに出てくるのか。

「あなたが死んだところで、結果は変わりませんのよ。Yr-03はわたくしが手に入れる。決定事項ですの。なら、おとなしく見過ごすほうが得策とくさくですわ」

リノアは辛抱強く、説得する。彼女は目的のためなら殺すが、殺人鬼ではないのだ。人死にはでないほうが良いに決まっている。

だというのに。

「イヤよ」

バカの一つ覚えのように繰り返す言葉。クレアはギシリと歯を噛み締めた。

「あなた、なにを考えているの？ Yr-03はあなたの大嫌いな
ミキエ・クドウの作り出したものですよ！？ 命をかける価値な
ど、どこにもないでしょう！！」

「あるわ」

即答する美咲。少女は、一片の迷いもない顔のまま、言った。

「ここで見て見ぬふりしたら、あたしが腹立つのよ」

「は？」

「自分が許せなくなる。そう言ってるのよ。こいつがどうなるうと
知ったこつちやないけど、自己嫌悪だけはまっぴらごめんよ」

「なにをいきなり……」

「あなたに無償むしょうでくれてやるなら、死んだほうがマシってことよ！
あたしはね、人のモンに手を出すヤツって、あの女より大っ嫌い
なの！！」

「な……」

美咲は一步踏み込み、断言だんげんした。

「アキトは、あたしの人形よ！」

十

そのときの面々めんめん（めんめん）の反応は、それぞれ独特どくとくだった。

話の展開についてこられず硬直するリノア。巨人もまた主になら
ってフリーズ。

そんなリノアとフレーズヴェルグの反応に、美咲はハッと我に帰
った。

あ、あたしいま、なんてことを……。

カア؟؟？、と熱くなる顔。その場の勢いに流されて、なんかとん
でもないことを言ってしまった。

どうしよう、どうしよう！！ 両手を広げたまま、混乱きよくちの極致きよくちに立
たされていると、背後から声上がる。

「ミサネエ……」

感銘のあまり、涙ぐんだ声。

恐る恐る振り返ると、そこには半泣きになったアキトの顔があった。

「ミサネエ????!」

まるで子供だ。迷子の子供が母親を見つけたときみたいなアキトの様子に、美咲の顔の赤みが増す。

恥ずかしくて直視できない。美咲はプイっとそっぽを向くと、ぶつさらばうに言った。

「ま、まあ、そーいうことよ。精々(せいせい)働きなさい」

はい……はい！ とアキトは涙ぐんだ声で答え 悲鳴を上げた。

「……アキト？」

振り返った美咲は目を見開く。つい数秒前まで泣き笑いを浮かべていたアキトが、胸を押さえて苦しんでいたのだ。

「アキト!？」

「う グ、ガ」

苦痛に歪むアキトの顔。美咲は慌てて尋ねる。

「アキト! どうしたの、アキト!？」

「ま ず、こんな ときに」

呻いたアキトは、有らん限りの声で叫んだ。

「逃げて ください!! 早く、一刻も 早く逃げて く

ださい!! 死にたくは ないでしょう!!」

「 は、なにを」

ここで、急変する事態に対処できず、半ば固まっていたリノアが再起動。コホンと咳をひとつつくと、余裕の笑みを浮かべた。

「強がりを。そんなこけおどしにわたくしが」

「は 早く逃げてください……!! もう時間がないん です!」

「あら、とうとう動けなくなるんですの? それは結構ですわ」

「違います! その逆、です! ボクの中核には動力炉が搭載されてて、それは」

そこで途切れるアキトの言葉。顔から感情が消え、胸を押さえて

いた両手が、だらりと垂れ下がる。

最初に声をあげたのは誰だったのか。

ヒツ、と裏返った悲鳴が上がる。それがリノアのか自分のか、美咲にはわからない。いや、わかるうとする余裕がなかった。

アキトの体には、血液の代わりに水銀がながれている。

これは間違いない。殴られて吐いたのは水銀で、それ以前にも見せてもらった。

なら、これはなに？

ドロリ、とあふれ出すのはゲル状の液体。黒い、どこまでも黒い闇色の液体が、袖口から漏れ出す。

液体は、それそのものが生物なのか。ズボンの裾すそやジャケットの袖だけでは足りないと言うかのように、万有引力ばんゆういんりょくに逆らい、襟えりからもあふれ出す。

際限なく、間断なく。液体は加速度的かそくてきに漏れ出す量を増やし、やがてアキトの体をすっぽりと包むとその質量を安定させた。

繭まゆ、と美咲は思った。

黒い繭。巨大な黒曜石こくようせきの繭。不思議と、その見解けんかいが間違っているとは思えなかった。

そこで、気づいたことがふたつあった。

ひとつは、イクシルに似ていること。透明度のない黒い繭は、イクシルを巨大化させたら、こんな感じになる。

そしてもうひとつが、これが幼虫から成虫へと変わるための繭ならば、アキトはいつたいたいなになるのだろうか？

考えていると、重い音が美咲を現実へと呼び戻した。

「フリースヴェルグ……？」

振り返った美咲が見たのは、驚頭わしあたまの巨人。それまで美咲同様に硬直していたはずの巨人は、その巨体からは想像もつかないほどの速さで美咲の横を駆け抜けると、

「やりなさい、フリースヴェルグ！」

轟音と衝撃が大気を奔る。装甲車をも吹き飛ばすフリースヴェル

グの拳が、黒い繭を打った。

「ッ！ 無傷ですって……！？」

「な、なんなの……？」

「ならば碎けるまで繰り返すまでですわ！」

リノアが指を躍らせると、フリースヴェルグの瞳が赤く輝く。そして、四本の腕を存分に使い、強く、重く、速く、拳の連撃を打ち出した。

「ちょ、ちょっとなにを　！！！」

「急ぎなさい、フリースヴェルグ！ 早くそれを破壊しなさい！！」

「やめなさい！！ あんたアキトが欲しいんじゃないの！？」

「それどころではありません！！」

駆け寄って非難してきた美咲に、リノアは凄まじい形相で怒鳴り返した。

「あなた、あれを見てよくも「やめろ」なんてことが言えますわね！！」

「あなた、あれがなんなのか知ってるの？」

「知りませんわよ！！」

は？ なに言ってるの、このオバハン。という美咲の心の感想が届いたのか、リノアは怒り顔のまま叫んだ。

「あなたも傀儡師の端くれ 異能力者なら感じているでしょう！

！ この毛が逆立つほどの威圧感とあの結晶の中で膨れ上がるものを！！」

「そ、それは……」

今更ながら、産毛を逆立たせるピリピリとした感覚に気づき、美咲は言葉に詰まった。

その隙をついて、リノアは美咲を黙らせる。

「だったら邪魔しないでくださいな！ こんな恐怖初めてです！！」

大量の冷や汗に顔を濡らしながら、リノアは左手の指の動きを加速させた。比例して、フリースヴェルグの速度が上がり、音と衝撃の間隔が短くなる。

空気を震わす衝撃はその質を上げ、轟音はもはや砲撃のよう。

黒い繭がどれほど堅牢でも、あれでは中にいるアキトがもたない。アキト。そうだ、アキトだ。あの繭の中にはアキトがいるのだ。

思い出した美咲は慌ててやめさせようとリノアに腕を伸ばすがもう遅かった。

「とどめですわー!!」
止めるより早く繰り出される傀儡の術。呼応して巨人が渾身の一撃を放ち、黒い繭に亀裂が入り、砕けたのである。

「そんな……」
床に膝をつく美咲。砕けた繭の中は見えない。繭が砕けると同時に、大量の黒い霧を作り出していたのだ。

だが、結果は予測できる。あんな一撃を受けて無傷なほど、アキトは硬くない。硬くないのだ。

二種類の汗で顔を濡らしたりリノアが、安堵の息をついた。
「どうにか間に合いましたわね……それにしても、あれはいつたいなんですか?」

「間に合う、間に合うですって……!!」
「ちよ、ミス・クドウ! いきなりなにを!!」
「よくも、よくもアキトを!!」

立ち上がった美咲がリノアの胸倉を掴んだ。激情に駆られ殴ろうとして 耳をつんざく音に動きを止めた。

「……なに、この音?」
「これは……複合装甲が歪む音?」

眉を寄せる美咲とリノア。二人が、音のする方角 砕けた繭とフリースヴェルグがある場所を見る。

途端、黒い煙の一部が盛り上がり、二人目掛けてなにかが飛んできた。

「フリース」

「ヴェルグ!?」

慌てて互いを突き飛ばす美咲とリノア。その数瞬後に巨人の体が二人のいた場所を通過し、壁に大穴を空けて外に落ちて行った。

「あ、あつぶなかつた……」

「あ、危うく一トンのタックルを受けるところでしたわ……」
間一髪で逃れた二人は、ふう、と胸を撫で下ろす。

そして、硬直。

ズシン……ズシン……、と部屋に響くのはやたらと重い音。部屋が小刻みに揺れ、天井からパラパラと石膏の塵せつこうが落ちてくる。

「ねえ。この足音、あんたの人形の？」

「生憎あいにくですわ。わたくしのトロプスたちは優雅ゆうが且つ静かに動きまします」

と、なれば答えは決まっている。

二人が黒い靄こよいの方へと顔を向けると、突風とつふうが吹いた。

今宵は風が強いらしい。壁に空いた大穴より吹き込んだ風は靄こよいを奪い、隣の部屋へと去って行く。

残されたのは、美咲とリノア。そして、バケモノだった。

十

カプトガニ、という生き物がいる。

生きた化石と言われる海中生物かいちゅうぶつで、なんとも味のある形をしている。

ソレの第一印象は、まさに黒いカプトガニだった。

「あれが……Yr-03ですか？」

その質問に、美咲は答えることができなかった。

足は二本、腕は二本。胴体があつて頭もある。指もちゃんと五本あり、八頭身の体は人間の形をしていた。

けれど、それだけ。

新雪しんせつのように白かった肌は黒一色。赤ん坊のような瑞々みずみ（みずみず）しさは面影おもかげも残さず消え失せ、その身を包むのはただただ硬く

冷たい鋼のみ。体は二周り以上も大きくなり、いびつに歪んだレドームのような楕円形だえんけいの頭には、もはや顔と呼べるものさえなかった。カブトガニを頭にする人型のバケモノ。それが美咲の感想の全てだ。

「アキト……なの？」

呆然と呟く美咲。岩のように荒々しい鋼を纏う布が、アキトの着ていた服と同じであることに気づいた美咲は、もう一度尋ねる。

「あんた、アキトなんでしょ？」

「

「答えなさいよ……ムシしてんじやないわよ　ねえッ！！」

叫ぶと、初めて反応があった。

カブトガニ　アキトはなにもない顔を美咲に向けると、

「ッ！？」

息を呑んだのは美咲とリノア。二人の目に映るアキトの顔が変化する。

奏かなでられる音は鋼のひしゃける音。本来なら口のある箇所かしよに亀裂が入り、横に裂けると、

「

ッ！！」

可聴域かちやういきを遙かに超えた咆哮ほうけう。

そう、咆哮。それはまさに咆哮と言えた。

亀裂の入っていた窓ガラスが一斉に砕け、美咲とリノアの体が吹き飛ぶ。

人間さえ吹き飛ばす咆哮は、到底とつてい、この世のものとは思えなかった。

「ッ?????!　ハ、ハンター1から5！　その人形を破壊しなさい！！！」

恐怖に負けたのか防衛本能ぼうえいほんのうが復活したのか。立ち上がったリノアは叫ぶと右手を揺らす。

隣の部屋からハンター五体が体を軋きしませ現れ、折れ、欠け、亀裂の入ったブレードを頭上に掲げてアキトへと迫せまる。

「やめてッー!!」

アキトが壊される。思った美咲が叫ぶが、それに意味などなかった。

美咲の言葉は人形たちを止めることはできず、アキトもまた、壊れることを好しとしなかったのだ。

「ッー!!」

大気を揺らす咆哮に、持ち上がる右腕。

最初のスクラップは、アキトの真正面から走ってきたハンター3だった。

近距離で咆哮を受けたハンター3が動きを止めると、アキトは右腕を振り下ろし、破壊。頭上よりボーリングの玉を鷲掴みできる平手を落されたハンター3は、東部を胸の半ばまでめりこまされた。

次は右から周りこんできたハンター5だ。ハンター3が潰されても躊躇せずにアキトへと突っ込み、首を刎ねようとして、中核を破壊された。

ハンター3を潰した右手を、ハンター5の胸に突き刺したのである。三番目と四番目の大破は同時だった。ハンター5とは反対側から同時に攻め込んだハンター1と2は、そのブレードを振り下ろす間もなく、胸元から上と下に切り裂かれた。

アキトの左手の五指から伸びる爪は、恐ろしく鋭く、硬かったのだ。

そして残ったハンター4だけが、唯一、アキトに攻撃ができた。ハンター4は、蜂の巣にされた五体のハンターの中でも、一番損傷の低い人形だった。ブレードも奇跡的に傷がなく、駆動装置も無事。唯一、完全な性能を発揮できる人形だ。

背後から迫ったハンター4は、主の命令に従い全力でブレードを叩きつけた。車のエンジンをも叩き切れる一閃である。

しかし、無駄だった。

破壊できたのは自身の腕とブレードのみ。アキトには傷ひとつつけ

られず、その後の彼の拳を受けて、機能を停止させた。

クルシイ。クウフク。ミトメロ。

それがアキトのAIを占める情報だった。

酷い飢餓^{きが}。全ての物事に飢えている。たまらなく欲しい。

しかし、望むものがわからない。自分を構成する上で、それは絶対必要不可欠なのに、それがなんなのかわからない。

故にアキトは探す。苦しみながら、飢えながら、探す。

手始めに、こちらに向かってきた人形はどうかと思い触れてみたが、壊れてしまった。

チガツタ。コワレタ。モロスギル。コレジャナイ。

チガウ。ドコダ。ドコニアル。ホシイ。ホシイ。ホシイ。

「……ハンター5体が一瞬で大破？ なんの冗談ですよ、これは？」

声が聞えたのでそちらを見た。

女がいた。生命力溢れる女だ。

コレカ。ソウナノカ。ドウナノダ。ワカラナイ。シカシチカイ。

アキトは次に女を調べてみようと考えた。体に向け、足を動かし、女に近づく。

「ヒッ！！」

女は声を上げる。一步、二歩と後退りすると、つけていた指輪を別のものと交換した。

光が見えた。女の指より伸びる五つの赤い光線。

コレダ。コレダ。コレダ。チカイ。チカイ。チカイ。

喜んだアキトは女に向かって駆け出すと、女は裏返った声で叫んだ。

「ガンナー1から5！ わたくしを護りなさい！」

横からの衝撃^{オキゴウ}。あとちょっとで捕まえられる、というところで邪魔が入った。

ダレダ。ダレダ。ダレダ。ジャマヲスルノハダレダ。

苛立ちながらアキトは横を見る。そこに突撃銃アサルトライフル M16A2を
持った人形がいた。

銃撃型ガンナー。主に銃撃戦をベース作られたグレイン社製の第6世代人
形だ。

データベースを管理するエージェントAIのひとつが詳細なデー
タを提示するが、アキトはそれを認識しない。必要としなかった。
アキトはガンナーを無視して飛びかかるが、間一髪避けられた。
「ッ！ 銃弾をものもしないなんて なんて装甲ですの!？」
オシイ。オシイ。オシイ。ツギコソ。ツギコソ。ツギコソ。

興奮しながらアキトは女を追おうとし、すぐ目の前に別の女がい
ることに気づいた。

「やめなさい、アキト!!」

怒鳴ってくる女。あの女より若い女。

ダレダ。ダレダ。ダレダ。

「やめなさいって言うてるでしょ！ 聞いてんの!？」
倫理AIが行動の停止を強制してくる。

ヤメロ。ヤメロ。ヤメロ。シバルナ。シバルナ。シバルナ。

胸を締め付けられる感覚。体を鎖で縛られる感覚。それらに、ア
キトは苛立つ。

「ッ!?!」

「きやつ!」

咆哮を上げると、女は尻餅しりもちをついた。

ザマアミロ。ザマアミロ。ザマアミロ。

「アキト……あんな、あたしがわからないの？」

女が言う。

「あたしの顔、忘れたの？」

シラナイ。シラナイ。シラナイ。

「あたし、あんなの主なんでしょ!」

シラナイ。シラナイ。シラナイ。

「ねえ、答えなさいよ!!」

ここにきて、アキトは気づいた。この女はあの女より生命力に溢れている。

コイツカ。コイツモカ。ソウナノカ。シラベヨウ。シラベヨウ。シラベヨウ。

決めたアキトは調べるために手を伸ばす。

「アキトツ!!」

掴もうとして体勢が崩れる。また邪魔された。ダレダ。ダレダ。ダレダ。コンドハダレダ。

「ウォルフ、ファルケ!？」

見ると、女の前に灰色のイヌが立っていた。

他にもいる。空中にはトリだ。邪魔が増えた。

「ちょ、ちよつとなにすんのよウォルフ!!」

イヌが女を銜くわえると逃げ出す。

ニガサナイ。ニガサナイ。ニガサナイ。ホシイ。ホシイ。ホシイ。アキトは追おうと走り出し、

「Chnnce! Gunner one to five! Fire!!」

熱と衝撃と唐突な浮遊感。ジャイロがデタラメに動き、高度計の数値が0へと落ちる。

遅れてアキトは、足元を崩されたことに気づいた。

十

明かりも生活感せいかっかんもない喫茶店内で、リノアは安堵あんどの息を漏らした。

「これで少しは時間が稼いげますわね」

色褪いろあせ破れたカーテンの隙間けんまから廃墟の方角を見る。

燃え盛る炎に崩れ落ちる建材けんざい。どうやら持ち込んでいた銃火器に火がついたらしく、断続だんそく的に爆音まで聞えてくる。

「これで壊れるなら苦勞はしないのですけど 儂はかない希望ですわね」

ふっ、と疲れ切った笑みを浮かべるリノア。それもそのはず、アキト捕獲のために用意しておいた人形や武器、トラップなどはすべて先ほどまでいた廃墟はいきよ。目下爆発炎上倒壊中のホテルの一階に保管かんしてあったのだ。

被害は数百万ドル。あのアキトから逃げるためとは言え、出費が痛い。

「残ったのはガンナー五体にフリースヴェルグ一体。あとは小道具ばかりですわ」

不幸中の幸いは結界が壊されてはいないこと。この惨状さいじょうが外に漏れず、『八神やがみ』に気づかれることもないことだ。これ以上のハプニングは御免ごめんだったが、やはり出費が痛すぎる。

「はあ……と大きなため息をつく、隣でうずくまる美咲に視線を向けた。」

「ミス・クドウ。大丈夫ですか？」

「……まーね」

暗い声で答える美咲。その傍かたわらでは、ウォルフとファルケが心配そうに彼女を見ていた。

「……あんがと。助かったわ」

美咲はウォルフとファルケを同時に抱きしめ、礼を言う。

「あんたたちのおかげで、アキトから逃げれたわ。ホント、ありがとう。感謝してる」

ほんぽん、と二匹を撫でる美咲の姿を見て、リノアは軽く驚いた。意外と芯は強いんですね。自分の人形に殺されかけたのに、冷静ですわ。

「けどね」

「オクターブ下がる美咲の声。」

「なんでもっと早くこんのか、この駄犬だけんにバカ鳥ツッ！」

叫ぶとこめかみに浮かぶのは青筋あおすじ。腕に力が入り、ウォルフとファルケがもがきます。

「アキトが乱入らんにゅうしたとき　っていつか、あたしが捕まったときに

助けなさい！ あんたら、なんのためにいるのよ！！」

追い出しておきながら酷なことを言う美咲。ギリギリと首を絞められる二匹は「ギブ、ギブ！！」と言うかのように前足と翼でタツプする。

「み、ミス・クドウ……？」

「あん！？ なによ、なんか文句あんの！？」

血走った目で睨まれ、リノアは「い、いえ……なにもですわ」と退却。しかし美咲は事の張本人の撤退を許さなかった。

「あんたもあんたよ！ あたしが交渉の最中に飛び出したからって、勝手に家電を盗聴するんじゃないわよ！！ しかもなに？ あたしが「契約する」って言う前に回線を切るってなに？ あんたはね、タイミングが悪すぎるのよ！ このヘツポコボインオンナ！！」

「へ、ヘツポコ！？ ここ このわたくしがヘツポコ！？」

「ヘツポコよ、ヘツポコ！ ほかにもあるわよ、あんたのヘツポコ要素！ 一つ、用意周到な割には間が抜けてる！ 二つ、自分の好きな話になると相手を置いてきぼりにする！ 三つ、余裕を見せすぎて窮鼠猫にかまれる！ 最後っ！ そんなキレイ系の顔でのヘツポコは萌えないのよ！ 歳を考えなさい、この爆乳年増ヘツポコオンナ！！」

「ま、また言った！ こんどは年増まで付けましたわねッ！！」

「ああん！？ 文句あんの！？」

「く、屈辱ですわ！ この合衆国にその家ありと畏怖されるフィーラム家の次期頭首たるこのわたくしを、極東の田舎の没落旧家の娘ごときが、侮辱するなんて……！！」

リノアはわなわなと肩を震わし、美咲曰く爆乳な胸を見せつけるよう身体を反らして、怒鳴った。

「決闘ですわ！ どれでも好きな人形をお選びなさい！ 泣いて謝るまでボコボコにしてさしあげますわ！！」

「上っ等！ さっきの続きといこうじゃないの……！！」

犬歯を剥きながら言い争う二人。人形での取っ組み合いにまで発

「 展しそうになると、

「 ツー!!」

建物を震わすアキトの咆哮。二人は慌てて相手の口を塞いだ。

「 どうやら復活したらしい。ズシン、ズシンと足音が近づき 遠ざかって行った。」

「 もう、大丈夫?」

「 たぶん」

二人はお互いの手をどける大きく息をつく。

「 ……とりあえず、お互いのイザコザは置いとかない?」

「 ……そうですね。これではYr-03を得る前に共倒れともたおになりますわ」

「 あんた、まだアキト狙ってるの?」

「 当然です。やられっぱなしは性に合いませんの。ミス・クドウこそ、シッポを巻いて逃げ出さないのですか」

「 誰が逃げ出すよ。あたしゃアキトを元に戻して連れ帰るのよ」

「 ここで視線の剣戟けんげきが入り、

「 休戦協定きゅうせんけいテイ、などはどうですか?」

「 乗った」

シエイクハンド。協定を結んだ二人はとりあえず、互いの疑問を埋めることにした。

「 じゃ、あたしから」

「 どうぞ、トリノア。美咲は根本的な疑問をぶつけた。

「 あのさ、ここどこ? えらく廃れた建物すたが多いけど、どっかの遊園地?」

「 放棄されたアミューズメントパークです。名前はたしか ミノ・ワールドでしたわ」

「 ああ。美濃遊園地みのね。じゃあ、あの廃墟はいきょは園内ホテルだったんだ」

「 ちなみに、あの部屋のドアには、鳳凰ほうおうの間、と書かれていますわ。では、次ぎはわたくしです」

どーぞ、美咲。リノアも根本的な疑問をぶつけた。

「Yr-03はなんですか？」

「なん、って言われても……曖昧あいまい過ぎるわよ」

「では質問を変えます。Yr-03について知ってる情報を教えてください。全部」

「あたしが知ってるのは、あの女がアキトを作った、ってことくらいよ」

「ほかに　ほかになにか知らないのですの？　性能や使用術式、中核コアなど」

それで美咲は思い出した。

「そういえばたしか、中核にはイクシル、ってのを使ってるって」

「イ、イクシルですって!？」

立ち上がって叫んだリノアを、美咲は慌てて座らせる。

「しっ！　声が大きいわよバカ！」

「バカはあなたのほうですわ！　なんでそんな大事なことを忘れてるんですの!？」

「誰がバカよ　って、あんた、イクシルを知ってるの？」

疑問に、リノアはまた驚いた。

「あ、あなた。イクシルも知らないのですか？」

「全然。なにそれ」

「イクシルはアルカナの複製品ふくせいひん！　『宇宙の卵』なんて言われるほどの、天文学レベルのエネルギーを発するもののコピーですよ!？」

「……えー、と。それって、原子炉よりすごいの？」

「ええ、それはもう。質問そのものに殺意を覚えるくらい」

ギロリと睨まれ、美咲はつつ、と体を後ろに引いた。

「わ、悪かったわね」

「ええ。本当に。ですが、納得しましたわ。イクシルなら、物質の変質と増殖ふくせいくらい、わけないですものね」

言つとリノアは立ち上がり、自分の額をコツコツと人差し指でたたく。

「とりあえず、残ったものを纏めませんと。小道具類は放棄するとしても、もしものために持ってきたアレだけは、回収しなければなりませんね。パーキングエリアに待機させておいたのは正解でした。あとは……」

ぶつぶつと呟きながら踵を返すリノア。美咲は向けられた背中が動き出すと、尋ねる。

「どこいくの？」

「パーキングエリアです。ハンマーがありますので、それで逃げます」「はあっ!?!」

それまでの意思を一八〇度回転させるリノアに、美咲は怒鳴った。「逃げるって、どうしてよ! あんた、アキトが欲しいんじゃないの!?!」

「欲しいですわ。それはもう、喉から手が出るほどに」

「じゃあなんで!」

「だって、もう無理ですもの」

「……ムリ?」

そうですわ、とリノアはうなずいた。

「もう間もなく、Yr-03は消滅しますの」

十

「消滅、する? どういうこと?」

「あなた、本当ににも知りませんのね」

呆れたようにため息をつくりノア。彼女は説明した。

「先ほども言った通り、イクシルはアルカナの複製品。『宇宙の卵』の複製品ですの」

アルカナ。『宇宙の卵』の異名いみょうを持つ通り、宇宙創造に必要な要素が全て入っているとされる伝説の物質。それを複製したのがイ

クシルだ。

「わたくしも多くは知りません。アルカナには及びませんが、イクシルも極めて貴重なものであると同時に、文献があまりに少なすぎますの。それでもわかるたしかなことは、イクシルは極めて不安定な存在だということですよ」

「不安定な存在？」

「イクシルはアルカナの複製品と言われおりますけど、正確には違います。アルカナから送られるエネルギーを受取る受信機、というのが正しいですよ」

「？」

「蛇口です。アルカナを貯水槽としたら、そこから水を出す蛇口。それがイクシルですよ」

それで美咲は理解できた。

つまり、イクシルとは『出口』。アルカナという宇宙の『出口』なのだ。

「ふ??ん。なんとなくわかったけど、不安定ってのはどういうことなの？」

「……あなた、本当におバカさんですね」

「な、なにがよ」

「考えてもごらん下さい。どこの世界に、宇宙の元になるエネルギー

ー ビックバンに耐えられる物質が存在するのですの？」

「あつ」

「理解したようですよ。どれだけ昔にどんな人が作ったのか知りませんが、イクシルは完全な失敗作ですよ。放出するエネルギー量の調整が難しく、一度でもしくじったらそこでアウト。大爆発までのカウントダウンのスタート。あなたももう諦めなさいな」

「なるほど。わかったわ。でもイヤ」

「イヤ っつて、あなた。本当にわかってらっしゃるの……!?!」

「わかってるわよ。つまり安全装置のない爆弾なんですよ」

「頭に『核』が付くタイプの、ですよ。わかっていましたらな

ぜ？」

「だってあたし、あいつの主人だもん」

美咲はニコ、っと笑う。

「主人だったら、ちゃんとめんどろ見ないとね」

「正気ですか？」

「もちろん」

「……狂ってますわよ！ あなたもミキエも！ 流石は人形にイクシルを取り付けた傀儡師の娘ですわね！ まったく、なにが第7世^{ジイ}代人形^{マリオネット}の騎士型ですか。あれでは狂戦士^{ベルセルク}がゴーレムじゃありませんの！」

堪^{たま}らずリノアが吐き捨てる^とと、美咲の顔から笑みが消えた。

「あんた、いまなんて言ったの？」

「ですから、あなたたちは狂って」

「そこじゃない！ あとよあと！ ベルセルクとかなんとかのこ
！！」

肩を掴まれたリノアは、押され気味^{きみ}にもう一度言った。

「べ、狂戦士^{ベルセルク}がゴーレムじゃありませんの、ですわ……」

「人形 そつよ、人形よ」

美咲は頭を掻き^{むし}る。

「ああ！ もう、なんで気がつかなかったのよ、あたしは！！」

「な、なんですか、急に？」

「アキトは人形なの！ 自分で動くゴーレムやロボットじゃなくて、操^{かんじ}る糸^{いと}が必要な人形なのよ！！」

「簡易^{かんい}操^{じょう}握^{くわく}のことを言っ^いてらっ^いしゃるの？ 操^{かんじ}って元に戻すと？」

「でしたら、無理ですわ。エネルギー量が違い過ぎますもの」

「掌握^{てんさつ}じゃなくて契約^{けいやく}よ、契約^{けいやく}！ やりかたを教えてください！」

「え、契約^{けいやく}ですか……？ いまさらどうして……」

「契約^{けいやく}しないなら壊す。恭子^{きんこ}さんはそう言ったの！ 危険だから壊すって言ったの！」

「きよ、恭子^{きんこ}さん？」

「あんだ、頭いいんでしょ!?　なんで気づかないのよ!」

「な、なにがですか?」

「つまり契約エンゲージさえすれば危険じゃない!　契約エンゲージがイクシルを安定化させるのよ!」

まさか、トリノアは否定するより早く、美咲は押さえ込む。

「アキトはあの女の作品なのよ!　完璧主義の傀儡師はいじんで、廃人クラスの人形マニアのあの女が対応策たいおうさくもなしに、そんな物騒ぶっそうなモン積むわけないでしょ!」

「それは……たしかに、ですわ」

「でしょ!　だから教えて、契約エンゲージのやりかた!」

十

それをアキトが見つけたのは、見失ってから一時間ほどたったころだ。

いくぶんか炎の沈静化したホテル。そこであのイヌを見つけ、気づかれると走り出した。

チャンスだ、とアキトは思った。あのイヌを追えば、女のところにいける。

そう思い、アキトは追いかけた。

飢えは極限までできていた。これ以上飢えれば消える。根拠のないけれど起こるであろう結果あせに焦りながら、イヌを追う。

イケ。イケ。イケ。オンナノトコロへアンナイシロ。

追いつきも引き離されもしない速度で走る。

そして辿り着いたのは、とある建物の前。アキトはよろこんだ。

イタ。イタ。イタ。オンナガイタ。

女はアキトの存在に気づくと、建物の中へと逃げ込む。

アキトは躊躇ちゅうちゆすることなくあとを追った。

「いいですか、ミス・クドウ。契約エンゲージには二種類ありますの」

リノアはそう言つて口火を切つた。

「ひとつが装飾^{アクセサリー}。血を滲^{にじ}ました一個の宝石を二つないし複数に割り、片割れを人形の中核^{コア}として、残りを装飾品として身に付ける、真つ当な傀儡師なら誰もが知る、常識^{じょうしき}的な方法ですわ」

「……なんか、あたしがまともじゃないって言われてる気がして腹立つけど、続けて」

「もうひとつが昔ながらの彫物^{タトウ}。己の血を人形の中核^{コア}に流し込み、同調させる方法ですの」

「となると、あたしは彫物式契約^{エンゲージ}か」

「そうですね。イクシルを二つに割るわけにいきませんので、そうなりますわ」

「で、方法は？」

「ミス・クドウの血をイクシルに付着させ、簡易^{かんい}掌握^{しやうあく}をする。

以上ですわ」

「……それだけ？」

それだけですわ、とりノア。美咲^{ひさき}は拍子^{ひょうしめ}抜けした。

「なんだ、簡単じゃないの」

「ええ。簡単ですわ。傀儡師が死ぬか、人形の中核が壊れるかしなければ、解約できないことを除けば」

「……へ？」

「ですから、一度契約してしまつたら最後、ミス・クドウが死ぬか、Yr-03の中核^{コア}が砕けるまで、解除ができないのですわ。しかも契約^{エンゲージ}できるのは一人につき人形一体だけで、傀儡^{クワイ}中に人形が受けたダメージは、主人たるミス・クドウにも反動^{フィードバック}として伝わりますの」

「……もしかして、アキトが壊れたらあたしも死ぬ、ってこと？」

「まさか。そこまで酷いものではありませんわ。あくまで擬^な似的なものですので、痛みを感じるだけですの。もしも傀儡^{クワイ}中にYr-03が首を落されたとしたら、実際にミス・クドウが首を落されたような痛みを感じる。それだけですわ」

「それだけでもすっごいやなただけ……」

「まあ、Yr-03は完全自立型人形なので、傀儡する機会など滅多にないと思いますけど。ですが、他の人形はそもいきませんから、この契約方式は廃れたのですわ」

なるほど、そりゃ廃れるわ。美咲は納得した。契約が人形一体としかできなくて、しかも人形の痛みが自分に伝わる。そしてさらに、どっちかが死ぬまで解約不能の状態に陥って得るメリットが、ちょっと上手く操れるようになるだけなんて、あんまりだ。

思っていると、リノアが訊いてきた。

「それで、ミス・クドウ。あなたはどのようにして、Yr-03と契約するのですか？」

「う??ん、そうねえ。さっき話した方法でどうにかしようと思うんだけど」

チラリと、逃げる際にガンナーの一体がホテルから持ち出した爆薬を見る。

「ゼロ距離で一ポンド弱のTNTを爆発させ、胸部装甲を吹き飛ばす。それから馬乗りになって力づくで契約。そんな作戦が成功するとお思いですか？」

「う、言わないですよ。なんか立場が逆っぽいし　あ、でもあなたが協力してくれるなら」

「お断りですわ」

即答するリノア。彼女はこの戦いに加わらない。誰の目から見ても成功率が低く、それでイクシルが安定するという確証もないのだから、当然だった。

「イクシルの消滅に巻き込まれて死ぬなんて、まっぴらですもの」「わかってるわよ。第一、これはあたしら家族の問題だからね。昨日今日にあっただばかりのあんたに手伝ってもらうのが、どうにかしてるわ」

「　家族の問題、ですか」

「そーよ。あたしはあの女の娘で、あいつはあの女の作品。家族みたいなものですよ」

なにか思うところがあるのか、リノアは膝をつくフレーズヴェルグをちらりと見ると、吐き捨てた。

「……バカげてますわ。人形を家族と言い、止めるために命をかけるなんて」

「そう？ あたしやわりと好きよ。生きるか死ぬか（デッド オア アライブ）って。上等じゃないの」

「やはり狂ってますわ、あなた」

「ま、あたしはアキトみたいなロボットを本気で作ろうとしている国の人間だからね。憑くも神を信奉してる。その時点でキリスト圏のあんたにやわからないわよ」

「つくも なんですの、それ？」

「どんなものにも魂が宿るってこと。おもちゃにも道具にも、人形にもね」

「そんじゃーね、と手を振って、美咲はリノアと別れたのだ。」

「なーんて、カッコつけたけどさ。やつぱ怖いわねえ」

室内アトラクションの屋根裏にて、美咲は少し後悔する。

「あー、ガンナーの一体でもパクつときゃよかった」

と、呟いていると破砕音。石膏ボードの亀裂から、そ？？、と下を覗き込む。

「おー、やってるやつてる。良い感じに引っかけてるわね」

ニヤリ、と美咲は笑う。暴走状態のアキトが入ったのは、ずばりミラーハウス。無数の鏡で作られた迷路にアキトは戸惑い、鏡に映った自分を敵と間違え攻撃していた。

「やつぱ熱感知センサが働いてないみたい。これならいけるわ」

呟きながら、美咲は前もって簡易掌握をしておいた人形を操作する。『ジャンル探検』というアトラクションから拝借してきた、アナコンダの人形だ。

アナコンダはへびさながらの動きで柱をつたり、鏡の壁の上に乗ると進みだす。

ここからが正念場だ。無線より容易な有線傀儡とはいえ、未熟な美咲では、操作可能距離は五〇メートル。時間は一〇分が限界。それまでにアキトに近づかなければならない。

「いくわよ……」

早くも額に汗を浮かべながら、美咲はアナコンダに繋がったケーブルを強く握り締める。無線より容易な有線で傀儡しているとはいえ、慣れない獣型人形の操作は思いのほか神経を削り、頭痛が現れだした。

「ッ……あと、少し」

静かに、静かに。焦ってもミスらないように。

慎重に美咲はアナコンダを操作し、暴れまわるアキトの近くへと忍び寄せ 唐突にアキトが顔をこちらに向けた。

「バレた！ でも」

両手十指を力強く動かす。アナコンダは鏡の壁からジャンプすると、アキトの体に巻きついた。

「成功！ ンでもって脱出……」

立ち上がった美咲はコードの繋がった発電機を掴むと、天窓に向かつて走りだす。あらかじめ開けてあった窓から跳躍し、着地。すぐに最寄の建物の陰に身を滑らせ、発電機のハンドルを握る。

「まさかお父さん直伝の、武器の扱いのイロハが役に立つ日がくるなんて ね！」

苦笑と共に回転。電流がコードを走る。コードは美咲の割った天窓へと続いており、そこからアトラクション内に入ってアナコンダの腹の中のTNT火薬を爆発させた。

十

吹き飛んだミラーハウス。辺り一面に鏡の破片が突き刺さり、コンクリートや木片が散ばっていた。

「……やり過ぎ、た？」

跡形あとかたもないミラーハウスを見て硬直する。

これは、バラバラになっっているのではなかるーか。思っおもって顔を蒼あおくしていると、煙の中で動く気配があつた。

「あ、アキト……？」

恐る恐る尋ねるが返事はない。しかし、たしかになにかが蠢うごいていた。

「アキト、なの？」

美咲が一步踏み出すと、ミラーハウスからソレは飛び出した。

鏡の破片を吹き飛ばし、崩れそうな壁を突き破って美咲の前に着地する。

「……ウソ」

美咲は愕然がくぜんとした。それはたしかにアキトだった。あのままのアキトだった。

「そんな……あれで動けるなんて……」

ゼロ距離での爆発は、アキトの全身にへこみや亀裂を作つたものの、外装が碎けるにはほど遠いものだった。

アキトが一步進む。美咲は動けない。

アキトが二歩目。美咲は動けない。

アキトが三步四歩と進んでも美咲は、衝撃のあまり動けなかつた。そしてアキトが美咲に向けて腕を伸ばすと、左右の建物から五人の人影が飛び出し、それぞれ握つた五本の鎖をアキトに絡ませ縛しばつた。

「ッー!!」

夜空に響く咆哮。人間なら、誰もが身を竦すくませてしまふ可聴域かちよういき外の雄叫びを上げて、アキトは鎖を千切ろうと暴れる。

しかし、彼らは動じなかつた。無言で無表情のまま、アキトを拘束する。

それもそのはずだ。彼らは人間ではない。人間の形をした道具だった。

「ガンナー？ どうして……」

「その調子ですわ、そのまま拘束なさい！」

声の出所へと美咲は目を向ける。

そこには月を背に、赤のスーツが似合う女性　　リノアがいた。

「あなた、逃げたんじゃなかったの！？」

それが美咲の言葉だった。

なんて失礼なのでしょう。せつかく準備までして助けたのに『逃げた』とは。

思いつつもリノアは微笑む。

「わたくし、まだあの人形を諦めていませんのよ」

なっ、と美咲が絶句した。

その顔が気分を良くする。続いて美咲はなにか喚いていたが、リノアは聞かないことにした。否、聞いている余裕がなかった。

「ッ……なんて怪力ですの……！」

ガンナー五体が全力で鎖を引いているのに均衡状態。アキトの臂力は最新型のガンナーをも越えている。

「バカげた装甲にバカげた中核。さらにはバカげたパワーですか」
やってられないと思う。そして同時に、好奇心が擦られる。

「是非とも、解明したいですわ。天才の技術を」

だが、その前にどうにかしてアキトを無力化しなければならぬ。ここで爆発でもしたら、それ以前の問題だ。

「……無駄にはなりませんでしたね」

クス、と笑うリノア。右手にはガンナーを操るサファイアの指輪がそれぞれ五つ。そして左手の五指に嵌っているのは、フレースヴェルグのダイヤの指輪ではない。

「出番ですわよ、スナイパー！」

左手の五指が嵌めるはルビーの指輪。リノアが指揮棒を振るように指を躍らせると、三〇〇メートルの後方　中央広場で、人形が動いた。

一見すれば、ハンターやガンナーとの違いはない。白人男性をベイスにしたソレは、欧州や米国にあれば、誰も目をとめないほど、精巧な人形。

「が、その背丈せたけほどもある長大な銃が、あまりに物々（ものもの）しかった。」

狙撃型スナイパー。つい先月、組みあがったばかりの試作人形だ。

人形が銃器を使えるようになったのは、近年のこと。それまで人形は銃を使わなかった。

理由は単純である。あたらないからだ。

戦闘になつた場合、常に敵も自分も動いている。相手どころか、自分もやられないために動き回る必要がある。その状態での射撃が、人形にとつて致命的ちめいてきなまでに難しいのだ。

故ゆえにこれまでハルベルトやハンマーなどといった、シンプルな動作で攻撃でき、尚なほ且かつつあたれば致命傷にできる武器が使われていた。

近年の機械工学、AI、プログラム、術式の進歩のおかげで銃を使うことが可能となりガンナーが作られ、最も実用化の難しいとされてきたスナイパーができあがった。

「とは言いましても、まだまだ問題点も多いですわね」

玉のような汗を浮かべながら、リノアは呟く。

なにせ三〇〇メートルも離れた状態での精密操作せいみつそつぱ。しかもスナイパーの視覚を利用しての狙撃は負荷が高く、本日はおまけにガンナーも同時に操っている。

「来年あたり、一指で二体操れるようになっていくかもしれませんわ」

過負荷による頭痛こがいなに苛こまれながら、狙いを定める。照準は（しようじゅん）アキトの胸部きょうぶ。イクシルだ。

スナイパーの武装はバレットM82A1。装甲車をも撃破する対物狙撃銃チマテリアルライフル。威力が強すぎるが、これではなくては装甲を破壊できない。

「万が一、イクシルに亀裂でも入れれば新たなビックバン。までは

行かなくとも、水爆レベルの爆発は確定ですね」

この一発で決まる。成功すれば逆転のチャンス。失敗すれば爆死。「生きるか死ぬか(デッド オア アライブ)。賭け事も、たまにはよろしいですわね」

スナイパーが、引き金を引いた。

十

閃光。轟音。衝撃。静寂。

アキトは、なにが起こったのかよくわからなかった。

鎖で縛られ、それを千切ろうとしていたら胸に衝撃が奔った。

そこでノイズが現れ強制終了。再起動を果たすと、目の前に女がいた。

「あなた……なにしてんのよ」

なに、とは？

「勝手に押しかけてきて、勝手に割り込んで、勝手に助けにきたら、勝手に暴走して………終いにや勝手に死にかけてるじゃないの」

死にかけてる……。

アキトはアイボールセンサを動かし胸元を見る。外部装甲が抉れ、胸部表面に盛り上がった中核。イクシルが剥き出しになっていた。

ああ、とアキトは思う。自分はもう壊れるのか。

そういえば思考がクリアだ。あれだけ演算処理能力を奪っていた。飢えはない。

ただあるのは寒さ。スペック上、問題のない気温なのに、酷く寒い。擬似的なもののはずなのに寒い。機能を停止させるほど、寒い。なるほど。これが『死』の概念か。

「あなた、まさかもう死にたいと言っんじゃないわよね？」

死にたくはない。けど死ぬ。停止する。あの光が手に入らないなら、それでもいい。

「ざけんじゃないわよ！ まだ落とす前、つけてもらってないのよ

！」

そこで胸に宿る温もり。女　よく見れば少女は落ちていたガラ
ス片で両手を斬ると、イクシルを掴んだのだ。

「我は謳う、模造なる偶像の声を」

温かい。イクシル（ココロ）が温かい。

「模した汝れ、創りし主の願いを聴け」

包まれる。ヒビだらけのイクシル（ココロ）が包まれる。

「偶された汝れ、望みし主の願いを聴け」

満たされる。餓えたイクシル（ココロ）が満たされる。

「強化接続浸透認識」

うれしい。

「増命幻系網羅認知」

認められてる。

「我が言の葉に応じよ」

繋がってる。

「和が異の波に応えよ！！」

ひとりじゃない。

「死ぬんじゃないわよ！　あなたは、あなたは　」

ああ、そうか。

「あなたはあたしのしもべでしょッ！！」

ボクは、これが欲しかったんだ。

第六章 四つ葉の騎士

「私はアクト・ユル・アイデ。型式番号Yr-03。型式名称『騎士』。ルーンの？ユル？を名に持つ人形【創幻人形】です」
それを聞いて、不思議に思ったことがあった。だがそれを口にしなかったのは、あまりに馬鹿馬鹿しいことだからだ。

「なんで鎧を着てないの？」

それが美咲の疑問だった。

【騎士】。テレビや小説、ゲームの中でしか聞かない古い言葉。いまはもう、歴史の底に埋もれてしまった存在。彼等は精緻な装飾の施された板金鎧を纏い、雄々（おお）しく戦場を駆け回る戦場の花形。それはきつと、子供たちを魅了して止まなかっただろう。本来、無骨であるはずの鋼を曲げ、重ね、削り、芸術にまで高めた鎧。それを纏わないアクトは、とてもじゃないが『騎士』に見えなかった。

だから、いまのアクトは、問題なく『騎士』だった。

「……………」
目を奪われる美咲。少女は歳相応の顔で、立ち上がった彼を見上げていた。

脱皮だと、美咲は思った。

無骨で禍々（まがまが）しかった漆黒の鎧が崩れると出てきたのは、白銀の色。角張っていた肘や肩は丸みを帯び、一枚岩から削りだしたような胴体は、幾つもの金属板の集合体に取り替わられた。薄くて軽い鎧。凶暴性は消え失せ、流線型の姿は誰もが見惚れ、憧れるもの。

アキトはいま、硬いだけが取り得の重くて歪な鎧を捨て、軽く、美しく、尚且つ丈夫な鎧を纏うための儀式を終え、成体になったのだ。

鎧を纏ったアキトが、地面に座り込んだ美咲を見る。するとシャーン、と鈴の音に似た音がして、美咲は我に返った。

「……ア、キト？」

アキトは答えない。イヤな予感が美咲の脳裏を走る。

「あんた、まさかまた……」

言い切るより先に、アキトはヘルムを取る。現れた顔を見た美咲は、目を丸くした。

どうやら変わったのは鎧だけではなかったらしい。アキト自身、瞳の色がアイスブルーからダークブルーへ、真つ黒だった髪が銀系のように細く艶やかなものに変わっていた。

「アキト……それって」

「えへへ こっちがホントです」

ニヘラ、と笑うアキト。どこか腑抜けた幼い笑顔を見て、美咲は立ち上がった。

「……ねえ。あたし、誰だかわかる？」

「わかりますよ、ミサネエ」

「ああ……アキト……あんたって……」

美咲はアキトの顔に手を伸ばし、

「ああんたあああつてえええ??？」

グーにし、

「こあんの、大バカ者ッ!!」

渾身の力を込めて殴った。

「ふぎゃ！ な、なんですか!？」

ズシンと尻餅をつくアキト。ワケがわからないと『?』を頭上に浮かべて顔を上げ、

「あんた、なにしでかしたか、覚えてる？」

見なきやよかったと、AIの底から後悔した。
美咲の顔に浮かぶのはこれまで以上の激怒の表情。眉尻は極限まで吊り上がり、こめかみには青筋。目には血が奔って、頬は痙攣していた。

「覚えてるか、って訊いてんのよ!!」

「は、はい!! 薄っすらとですけど、覚えてます!!」

アキトは立ち上がると直立不動の姿勢を取った。

「なら言うことは!？」

「ごめんなさい!!」

「よろしい、じゃあ殴るから目を瞑って歯を食い縛りなさい!!」

「は、はい!!」

目を瞑って歯を食い縛る。

そして来るであろう一撃にビクついていると、

「……………えっ?」

ぼふ、と顔に柔らかい感触。唐突な柔らかい圧迫感に驚いたアキトが顔を上げると、目と鼻の先に美咲の顔があった。

「……………心配せんじやないわよ、バカ」

ぎゅつと胸元に抱きしめる美咲。頬を撫でる手は赤く濡れている。布切れを巻くことで、契約の際につけた裂傷の応急処置をしているものの、それ以上に血が溢れ出していた。

「……………ごめんなさい」

アキトはそつと、痛みを感じさせないようそつと、美咲の手を掴む。

「手、痛いですよね……………」

「いいのよ、これくらい。それより、あんまり無茶しないでよね……………」

「…わかった?」

一際強く抱きしめられる。

「……………はい」

アキトは小さく答えて目を閉じる。その瞼の裏に映るのは、いまは亡き母の顔。母の抱擁を、思い出した。

「はい。もう、しません」

「ん……いいコね」

「そこまでですわ」

声が聞え、アキトは戦闘態勢せんとうたいせいに移行する。

美咲を引き離し、背後に隠すと発声源に顔を向ける。リノアがいた。

「ミサネエ、下がっててください。敵です」

「あ、待って、アキト。もういいの。リノアは別に」

言って前に出ようとする美咲を、アキトは止める。

「ちよ、アキト？」

「動かないでください。狙われています」

「えっ？」

美咲が驚いていると、建物の陰から五つの人影が現れる。それぞれの手に握ったアサルトライフルを二人に向ける彼らは、無表情のままリノアの左右に並んだ。

「ガンナーが五体ですか。まだボクを諦めてないんですね」

また、えっ、と驚く美咲。しばらく信じられないような顔をしていたが、

「そうね。そうだったわね。敵、だったもんね」

真剣な顔になると、リノアは笑みを浮かべた。

「そうですね、ミス・クドウ。ハプニングがありましたから休戦していただけです。わたくしたちはそもそも敵同士。もっとも」

リノアの左右に立つガンナー五体が、安全装置を解除かいじょする。

「Yr-03を譲っていただければ、とても仲の良い友人になれると思いますの」

「何度も言わせないで。お断りよ」

「そうですね。残念です」

まったく残念そうでない顔で、リノアはアキトに視線を移した。

「Yr-03。あなたはどう思います？」

「ミサネエと一緒にです」

「あら、即答。強気ですわね。でもこのままでは、あなたも、あなたの大好きなミス・クドウも死んでしまいますわよ」

アキトはガンナーを見る。握った突撃銃はM16A2。5.56ミリ弾を使用する、アメリカ三軍の基幹きかん火器だ。大した脅威ではない。

「【指揮者】コンダクターさんにしては甘いですね。そんな小口径弾しょうけいだん、ボクには通用しませんよ」

「ええ、知ってます。鎧を纏まとっていなくとも、きっと効きはしませんでしょうね」

なにかある、とアキトの警戒心が高まる。リノアは右手を持ち上げ

「では、これならどうでしょう」

振り下ろしと破壊は同時。近くの壁に大穴が空いた。

大口径弾による砲撃。判断したアキトは、瞬時に弾道だんどうを解析かいせきし、火点かてんへと視線を向ける。

アイボールセンサに映ったのは対物狙撃銃アンチマテリアルライフルを構えた人形だった。

「狙撃型スナイパー、実用化していたんですか……」

遠距離操作・傀儡精度・感覚の精密共有。それらの問題点から、実用化が一番難しいとされるスナイパーが存在することにアキトは驚き、リノアは付け加えた。

「武装はバレットM82A1。暴走したあなたをも吹き飛ばす逸品いっぴんですわ。わたくしの合図ひとつでそれがあなたの腹部を貫き、ガンナーがフルオート射撃を致しますの」

そこで、リノアはアキトの全身を眺め、

「ずいぶんと装甲が薄くなりましたのね。次は耐えれて？」

「それはムリです。ボクは総合性能トータルバランスを重視した万能型ばんのうがたなんですよ。避けることも、耐えることもできません」

あっさり白状じやうくわいするアキト。リノアは笑みを深めた。

「よかったですわ。これを使ってしまつと、あなたどころかミス・クドウにまで大穴を空けてしまいますの。殺人を犯さなくてほつと

しますわ」

「ボクもですよ」

「ちよつとアキト!? あんた諦め」

「ボクもリノアさんを殺さずにすんでホツとしてます」

アキトの発言に、リノアの顔が固まった。

「なんですって?」

「たしかにボクは避けることも耐えることもできません。けど、大した問題じゃありません。避ける必要も耐える必要もありませんから」

「……対物狙撃銃の一撃をあの手で防げるとでもお思いですか? 言っておきますけど、風や腕で防げるほど軽い一撃ではありませんのよ」

「はい。知ってます。あ、イクシルのことなら気にしないでくださいね。あれだけは、丈夫なんですよ」

ニコニコとアキトは笑って安心させる。リノアは頬を歪ますと、美咲に視線を向けた。

「あなたから言っちゃってください、ミス・クドウ! このままであなたは死んでしまうのですよ!」

「えっ、あたしから?」

蚊帳の外になっていた美咲は軽く驚いてから、アキトに訊く。

「ねえ、ホントに大丈夫なの?」

「はい。大丈夫です」

「そう」

言っと、美咲はリノアに視線を戻し、

「いいわよ、撃って」

「なっ……!!」

「なんか、大丈夫っぽいし。降参するのイヤだし」

笑顔での言葉に、リノアの顔から温度が消えた。

「……交渉決裂ですわね。もういいです」

指を揺らす。ガンナーがトリガーに指をかけ、スナイパーがアキ

トの腹に狙いを絞った。
「ふたり揃って塵になりなさい」
閃光と轟音が木霊した。

十

マズルフラツシユの光が消え、発砲音が止む。
硝煙だけが残る朽ちた遊園地で、リノアは途方に暮れていた。
終わった。最悪に近い結末だ。Yr-03はスクラップになり、
ミス・クドウは肉片と化した。得たのはイクシルと復元可能なパー
ツ それと、人殺しの汚名だけ。

イクシルだけでも大収穫だが、リノアの顔には落胆しかなかった。
「本当に、思っていましたのよ。ミス・クドウとは友人になれる
と……」

空虚な心に徒労だけが重く圧しかかる。リノアはため息を漏らす
と踵を返した。

「フリースヴェルグ」
ガンナーとの契約が刻まれた指輪を外し、フリースヴェルグのも
のへと交換すると呼ぶ。

建物の陰にて待機していたフリースヴェルグの瞳に光が宿ると、
リノアの傍らに訪れた。

「……酷い有様ですわね」

リノアは巨体を見上げて呟く。強靭を誇る巨人には、幾多の傷が
刻まれていた。

河川敷で削られた脇腹。銃弾を弾いた頭部に胸部。落され擦った
背中。

皮膚代わりの樹脂はところどころが削げ落ち、その下の鋼もまた無
傷ではない。特に拳の状態は酷く、幾度となく繰り出した拳撃に歪
みが生じていた。

「工房に戻ったら、ちゃんと直してあげますからね。終わったらまた、

あのまずいコーヒーを淹れなさいな」

「苦いだけのコーヒー。眠気どころか意識さえも飛びそうになるあのコーヒーが、なぜか無性に飲みたい。」

「ですがその前に、Yr-03の残骸を回収なさい。イクシルは絶対見つけるように。それから……」

一度睨を下ろし、

「ミス・クドウの遺体も回収なさい」

命令を受信すると、フレースヴェルグの目が明滅する。リノアはもう一度だけ呟いた。

「嫌いでは、なかったのですよ……」

「あたしもよ、リノア」

「ボクも嫌いじゃないですよ」

聞こえるはずのない声が聞こえ、リノアは固まる。

「仲良くなりたいたいです。あなたとも、フレースヴェルグさんとも」

上着の裾を靡かせ振り返ったリノアが見たのは、白き人形とその主。

「ね。大丈夫でしたよ」

笑顔のままのアキトに、リノアは顔を引き攣らせた。

「そ、そんな……。あれだけの銃弾を浴びて、無傷ですって……！」

「そりゃ無傷よね。一発も当たってないし」

人形の背後から顔を出した美咲が言うと、リノアは叫んだ。

「そんなはずがありませんわ！ あれだけの銃弾が全て外れるなど、ありえません！ どれだけ強力な風の障壁を作っても、12・7ミリ弾は意も介さずに貫くはずですよ！！」

「えっと……ボクの使える術って、風じゃないんですけど……」

「バカな！ それが最も効率の良い障壁系の術ですわ！ それ以外に音速で迫る物質を弾く術など」

「あの、ボクは弾いてませんよ」

申し訳なさそうにアキトは言った。

「逸らただけです」

言葉に、リノアの中で該当する術が浮かんだ。

「斥力……!?!?」

そう、斥力の術。ベクトルを操り、飛来する物質を弾くのではなく、逸らす術式だ。

それならばこの馬鹿げた状況を説明できる。説明できるが

「ありえませんか?!?!」

信じられなくてリノアは叫んだ。

「斥力は『法則』の術! そんな天体の持つ力の行使には、膨大なエネルギーが」

そこで、目を見開いた。

そうだ。この人形には

「別に驚くことはないんじゃないですか? ボクの動力源は宇宙そのものなんですから」

「ッ!」

苦虫を噛み潰した顔で、一步引くリノア。アキトは悲しげな顔で降伏勧告を出した。

「もう、やめましようよ。あなたではボクに勝てません。だからもう、やめませんか?」

哀れみの言葉。それが才女たるリノアのプライドを傷つけ、彼女は指を揺らし叫んだ。

「スナイパー! 威力行使!」

何度も斥力は使えない。そう踏んだりリノアは激情と共に攻撃を命じたが、反応は無い。

リノアは慌ててスナイパーとの情報共有を始める。

そして驚愕の表情。

「スナイパー!?!」

脳内に浮かんだのは、何者かに手足を潰されるスナイパーの最後だった。

「やられてる? どういうことですか!?!」

「すみません。スナイパーは危ないんで、見つけたときに無力化を
お願いしておきました」

「お願い？ あなたに味方などは」

いる。味方はいる。どうして忘れていたのか……！！

「サポートユニット……！！」

吐き捨てるかんだかと響く甲高い音。

音の発生源はっせいげんに顔を向けたリノアが見たのは、いつの間にか移動し
ていたアキトの狩りだ。合流したオオカミとタカを従わせた人形は、
次々と動かぬ人形を襲いバラバラにしていた。

「反撃なさい、ガンナー3！」

唯一無傷ゆいいつむきずのガンナー3に命じる。しかし、幻系の外れたガンナー
の動きはリノアが操作するに比べると格段に鈍く、結局、ガンナー
3は銃を向けることさえできず、バラされた。

「そんな……」

「リノア」

呆然ほうぜんと立ち尽くしていたリノアの肩がビクリと震える。

恐る恐ると振り返るとそこには天才の娘、人形の主が立っていた。

主 美咲は静かに言った。

「あんたの負けよ」

十

ハンターは暴走したアキトに破壊され、ガンナーはついさつきス
クラップ。切り札と思われるスナイパーも、アキトの素早い機転きてんで
手足をバラされた。

新たな人形を操る、という可能性はないだろう。ホテルでの爆発
は、アキトにこそ傷を負わせることができなかったが、リノアの持
ち込んだ全ての武器と人形を破壊した。

転じて、こちらの損害はゼロ。それどころかアップだ。

エンゲージ 契約を果たしたアキトは鎧を纏い、術まで行使する。ウォルフと

ファルケも健在だ。

勝敗はついた。アクトの　あたしたちの勝ちだ。

「諦めなさい。もうあなたに勝ち目はないわ」

「　まだ、まだですわ」

俯むついていたりリノアが顔を上げる。

瞳ひとみを動揺うごめきに揺らし、口元を震わせながら叫ぶ。

「まだわたくしにはフレースヴェルグがいますわ！　フレースヴェルグさえ健在けんざいならばまだ勝ち目は充分に　」

「　ないわよ」

平静へいせいさを失つたりリノアの言葉を美咲が遮る。そして、論理的ろんりてきに言った。

「たしかに、フレースヴェルグは強力な人形よ。攻撃力こうげきりょくも防御力ぼうぎょりょくも申し分ないし、機動力きどうりょくだって、決して低くないわ」

「わかっているではありませんの。なら」

「気づいてるでしょ、リノア」

言葉に、リノアの口が閉じる。

「冷静になりなさいよ。あれだけ人形を熟知じゅくちしてるあなたが、理解してないはずがないじゃない。現実を見なさい」

視線を逸らすリノア。拳をぎゅっと握り、肩を震わす。

「気づいた　　つーか、思い出したみたいね。フレースヴェルグの欠点」

そこで「違うわね」と美咲は訂正ていせい。改めて口に出す。

「あれって、欠点じゃなくて仕様しやうよね。フレースヴェルグは」

「あまりに巨体きょたいすぎる　　ですわね」

俯むついたまま、リノアは暴露ばくろした。

そう。それがフレースヴェルグの欠点。攻撃力こうげきりょくと防御力ぼうぎょりょくを両立させ、尚且つ機動力きどうりょくを保持ほしするあまり、そのサイズが通常の人形よりも一回り以上も大きい。

つまり、小回りが利かないのだ。

「別に悪いことじゃないのよね。特にこっちから攻撃する場合なら、

全然問題ないの」

「ですが、防戦ぼうせんになるとそれが浮き彫りになりますわ。特にわたくしを護るために間近まぢかで操るとなると、その長い腕リーチと強力過ぎるパワーがあだになり、ハンター以下の存在になりますの」

だってそうでしょう、トリノアは自虐じやくの笑みを浮かべた。

「万が一にもフレースヴェルグの拳がわたくしにあたったら、即死ですもの」

鉄骨を曲げ、装甲車を吹き飛ばす拳は、人間などあっさり殺す。

あっさりと、殺すのだ。

リノアは疲労ひろうの見える笑顔で辺りを見渡す。

人形のアキト、オオカミのウォルフ、タカのファルケ。それらに狙われながら、フレースヴェルグを護衛から外すことなどできない。したら最後、すぐに狙われ殺される。

多勢たせいに無勢ぶせい。対処たいしょするには、フレースヴェルグはあまりに小回りが利かなかった。

「わかっておりましたわよ、そんなこと。そのためのハンターやガンナーでしたもの」

「だったら引きなさい。勝てないケンカをするほど、あんたはバカじゃないでしょ」

「そうですわね。これ以上の争いは無意味です。出費が増えるだけですわね」

顔を伏せるリノア。美咲はそこで気づいた。

震えが、止まってる？

「本当に、いいところがありませんわね。苦労して持ち込んだ火器は爆散はくさん。三〇体もあつた人形は残り一体。まだ充分なデータも取っていないスナイパーはバラされて、フレースヴェルグも傷だらけ。本当に、失ってばかりですわ」

声に力が戻ってきてる。

美咲が危機感を抱くと、アキトが美咲を守るよう、前に立った。「ならもういいじゃないですか。ここでやめましょうよ」

言うアキトの顔はどこか固い。リノアからなにかを感じ取っているようだ。

「そうですね。それがいいですわね。これ以上の出費は、ごめんですわ」

でも、とりノア。彼女は金色の髪を指で掻き上げ、顔を見せた。決意の双眸。心は、決して折れていなかった。

「わたくしはフィーラムの一族の次期頭首。そのプライドだけは失いたくありませんの」

ゆらり、と指を揺らす。フレースヴェルグの瞳が輝きを見せると、それまでまったく漏れなかった超電導モーターの駆動音が響きだした。

「モーター出力を最大値に設定ですか。　すぐにバッテリーが尽きますよ?」

「かまいませんわ。勝負を長引かせるつもりはありませんし、最後の傀儡くらいは、わたくしもこのコも全力が出したいですもの」

それはつまり死を覚悟している。そう言うことなの? 美咲が啞然としてしていると、リノアは静かに言った。

「Yrr-03　いえ、アキト・ユル・アイデ。フィーラム家の名譽のため、偉大な先祖の名を穢さぬために、最後に一矢、報わさせていただきますわ」

覚悟を纏った言の葉。アキトはなぜか顔をむっ、とさせた。

「相手が違いますよ」

「?」

「ボクみたいな人形ごときに覚悟をぶつけないでください。その言葉に答えるのは、もっと素晴らしくて強い人です」

ちよつと怒った顔。言わんとすることに気がついたリノアは、苦笑してやり直した。

「闘ってくれますね、ミス・クドウ　いえ、傀儡師ミサキ」

「あ、あたし!?!」

話をふられてぎょつとする。

「な、なんであたしなの!？」

「あなたがアキトの主だからですわ」

リノアはクスリと笑う。

「別にあなたが操作して闘うわけじゃありませんのよ。ただ許可を頂きたいだけですわ」

「えっ? 違いますよ、ボクの操作をしてもらいますよ」

アキトの言葉に、美咲とリノアが揃って驚いた。

「はあ!? あんた、自分で動けるじゃないの!？」

「そうですね! ミサキのような無知で未熟でおバカな傀儡師に操作されるなど、なめていますの!？」

「うっ、無知と未熟は否定できないけど 誰がバカよ!」

「あなたに決まっていますわ!」

「け、ケンカはやめてください?!」

ガアア! と罵りあいを始めるふたりを見て、アキトが慌てて仲裁する。

まずリノア。

「べ、別になめてるわけじゃないんです! これがボクの仕様なんですっ!」

「通常は自分で動いて、戦闘時は操作してもらっ。 そういうことですよ?」

「そうじゃないと全力が出せないんですよ。だからミサネエに操作してもらわないと、ダメなんです」

と、ここから美咲の説得。

「だからお願いします。ボクを操ってください」

「あなたを操作するのはもちろん、人形同士の戦闘なんて、やったことないわよ!？」

「大丈夫ですよ」

アキトは二ヘラと笑い、

「だってミサネエ、七年間ずっと傀儡を続けてきたじゃないですか。毎日毎日、傀儡を続けてきたじゃないですか」

「だから大丈夫です。そう言ってミサキの顔を赤面させたアキトは、戦闘態勢のウォルフとファルケを見る。」

「下がって、ウォルフ、ファルケ。ミサネエの邪魔になるよ。」

「さ、サポートユニットまで下がらせるのですか!？」

「だって必要ありませんから。」

「ひ、必要ないですって!!」

「はい。ミサネエが操るボクは、誰にも負けません。」

笑顔に宿る絶対の自信。それが見て取れたのか、リノアの顔から烈火のごとき怒りが消え、静かなものとなる。

「そう、でしたわね。ミサキは天才の娘、あなたは天才の作品。なめていたのは、わたくしのほうですわね。」

呟いたリノアは一步下がる。

小刻みに揺れるフレーズヴェルグの腕を撫で、良く通る声で名乗った。

「わたくしはリノア・グレイン・フィーラム! 第5世代人形を作り上げたグレインの末裔! 扱う人形は四つ腕の巨人フレーズヴェルグ! その豪腕は鉄骨を曲げ、装甲車をも吹き飛ばす巨人なり! わたくしの前に立ち塞がる汝とその人形、名あるのならば名乗りなさい!!」

「えっ? な、なに……?」

「術師同士の決闘の通過儀礼です。訊かれたら答えなきやいけないんですよ。」

だから考えてくださいね。アキトは落ちていたヘルムを拾い上げ、被ると一歩前にでる。

「ボクはアキト・ユル・アイデ! 探求者ミキエ・クドウが命を賭して作り上げた最高傑作! 北欧の地より生まれしユルのルーン! 守護、成長。そして死を齎す四つ葉の騎士なり!!」

アキトのセリフが終わる。美咲は覚悟を決めると、大きく息を吸った。

「あたしは工藤美咲！ 先祖が特になにをしたか知らないし、あたし自身もなにもしていないただの傀儡師！ 立ち塞がったつもりはないけど、売られたケンカは買っつわよ！！」

言い終えると、アキトの顔が泣きそうになっていた。

「ミサネエ……それじゃただのケンカ好きな人ですよお??」

「う、うるさいわね！ こんな短時間じゃこれが限界なのよ!!」

泣くアキトと怒鳴る美咲。リノアは小さく笑うと、指を揺らした。「行きますわよ、フリースヴェルグ。これは決闘、手加減も規制もなしですわ」

喜ぶよう、一際大きな駆動音を漏らすフリースヴェルグ。その有り余る力を抑える電子の鎖は既になく、豪腕をもちいて主に勝利を齎さんと、四つの拳を作る。

「存分に闘いましょう」

リノアは力強い笑みを浮かべた。

「自律機能カッタ。最優先処理情報各種センサに変更 モードマ
リオネット」

体から力を抜くアキト。視線を向けられ、美咲はうなずいた。

「いくわよ」

呼吸を四拍呼吸に変えた美咲は、幻系を作る。

契約とは縁結び。傀儡師の生体情報を人形に記録させ、常に細かい幻系で繋がり続けるようにする。

運命の赤い糸ならぬ傀儡の糸。それを結ぶのだから、縁結びに似ている。

作り出した幻系は細い『縁』に絡みながらアキトへ向かい 接
続。

「ッ！」

途端、現れるのは頭痛。美咲は歯を食い縛って耐える。

な、なんつー情報量よ……!!

いつも操る人体模型くんとはケタ外れの情報量。

一〇〇メートル先の壁の汚れをも見分けられるアキトの目。一キロ先の川のせせらぎをも聴き取るアキトの耳。園内に生える全ての植物の匂いを嗅ぎ分けるアキトの鼻。外気の状態をゼロコンマ以下で数値化できるアキトの肌。

そして、アキトのもつ全ての情報が流れ込み、美咲の頭はパンク寸前にまでなる。

『も、もうちょっとだけ耐えてください！ あと一〇秒で最適化が終了します！』

慌てた声が頭に響いてきっかり一〇秒後。情報量が激減し頭痛が消えた。高機能過ぎる五感が馴染みのものとなる。

『最適化完了。センサ感度設定レベル3、情報処理割合七対三のバypass設定D?に登録しました。 どうですか?』

『ッ??...だ、だいぶラクになったわ。それよりこれって……』
『幻系を利用して指向性思念を送受信してます。いわゆるひとつのテレパシー?』

なぜ疑問系? そんなツツコミを思える余裕ができると、美咲は改めて訊いた。

『さっきのは、なに?』

『最適化です。傀儡師と人形との同調って、個人差があるんです。』

いまのはどれくらいの情報が送受信できて、どれくらいの情報が処理できるか、それを調べてたんです。これがミサネエにとって最適な傀儡設定なんですよ』

エへへ??、とどこか照れた笑い声を響かせるアキト。美咲は眉を顰めた。

『あなた、なんかうれしそうね』

『うれしいにきまっていますよお??。やっとボクに手を出してくれたんですもん。ずっと待ってたんですよ。夢が叶いました』

あなたは、なんでそう乙女チックなの。性別間違えてんじゃないの。

美咲は頬を赤くして思っていると、アクチュエータ駆動装置の唸りが響いた。

「準備はよろしいですか？」

両手を持ち上げるリノアに、拳を握るフレースヴェルグ。

奇襲をかけてこなかったのは、正々堂々（せいせいどうどう）と勝負をしたいから。それとも必要ないということなのか。

「自信满满（じしんまんまん）なツラからして両方ね。上等じやないの」

目の端を吊り上げた美咲は、リノアに倣（な）って腕を持ち上げる。

調子がいい。すこぶるいい。昨日から今日にかけての行動から見れば、もうヘトヘトで傀儡なんてできる状態ではないのに、驚くほどラクに傀儡ができる。

どうやらアキトとあたしは相性がいいらしい。これなら一〇分と言わず二〇分。五〇メートルと言わず一〇〇メートルでもいけそうだ。美咲は笑みを深くすると、両手を構える。

「オーケー、かかってきなさい。ボコボコにしたげるわ」

「その大口、どこまで持つか見物ですわね」

不敵に笑い合う二人。その忠実な下僕たる人形が一步、前に出る。まるで映画のワンシーン。作られた騎士と作られたモンスターの

睨み合いは、さながらラスト一〇分前の最終決戦。

盛り上がりは最高潮。全ての枷を外した二体の人形は、いまかいまかと合図（あしず）を待つ。

「それでは」

「はじめますか」

「わたくしのフレースヴェルグが勝つか」

「あたしのアキトが勝つか」

「勝負！！」

戦いの火蓋（ひぶた）が落された。

十

四度目の戦いである。

初戦は河川敷。二戦目、三戦目は廃墟と化したホテルだった。

結果は互いに一勝一敗一分。数字から見れば、完全に互角。

しかし、その内容を見れば、優勢なのはアキトであった。

「行け、アキト！」

主の命に従い奔るのは銀色の鎧を纏った騎士。

その動きはまるで燕のようだ。鎧が大地を削るか否かという低姿勢で駆けるアキトは、フレースヴェルグの拳を当然のごとく回避し、空いた脇腹に蹴りを入れる。

「いったいどこにそんな力があるのか。一周り、二周り以上はある巨人の体が、グラリ、とよろめく。」

その隙を美咲は逃さない。再び身を低くし、足腰に力を溜めるとダツシユ。

アスファルトの大地を陥没させ、巨人の脇にタツクルを決めた。

重い音が空気を震わせる。巨人から見ればなんの痛痒も感じない一撃は、その実、一トンの巨体を宙に浮かせ、地面に叩きつけるほどの威力を秘めていた。

機敏な体と強力な駆動装置。これが優勢の理由だ。運動性とパワーの両立は、巨人の拳を軽やかに避け、重い一撃を与える。

元より性能は高かった。巨人と互角以上に戦える性能を、アキトは持っていた。

初戦の引分けは巨人の腕の不可解さ。二戦目の敗北は、不安定なイクシルの制御にその性能を割いていたから。

巨人の秘密を知り、イクシルを安定させる契約を果たした騎士に、敗北はない。象を狩るライオンのように、ジワジワと巨人を追い詰めるだろう。傀儡師さえ優秀ならば。

「もらったわ！」

チャンスとばかりにアキトを跳躍させる美咲。その鷲の頭に止めの蹴りをいれようとし、

「甘いですわ！」

素早く指をくねらせるリノア。フレースヴェルグの瞳の光が輝き

を増し、右腕二本を持ち上げた。

「おやりなさい、フリースヴェルグ！」

震える大地に碎けるアスファルト。うつ伏せの状態であつた一撃は地鳴りを起こし、フリースヴェルグの体を強制的に仰向けにさせた。

そして、引かれる左の二本。天を見る巨人の瞳は、アキトをロツクする。

「倍返しですわ!!」

放たれる拳。攻撃に入っていたアキトに避ける術などなく、その直撃を受けた。

アキトとフリースヴェルグ。その性能の差は歴然で、十中八九でアキトが勝つだろう。

だがしかし、それでもアキトが負けるとするならば、それは後衛傀儡師の差に他ならない。

美咲とリノア。こちらもその能力差は歴然だ。

前者は簡易傀儡にさえ失敗する未熟な傀儡師だが、後者はまるで違う。

幼いころから傀儡師としての知識と技術を叩き込まれ、その道の学校にまで通ったエリート。最大一〇体もの人形を同時に操るフィラム家の次期頭首なのだ。

前衛は八対二。後衛は逆に二対八。総合的に見ればイーブン。どちらが勝つてもおかしくはなく、その勝敗の行方は最後の一つの要素にかけられた。

「いったあ???... あ、アキト、大丈夫？」

反動に朦朧とする頭を振ってから、美咲は倒れたアキトを立たせようと試みる。

「な、なんとか??」

反応はすぐ返ってきた。二〇メートルほど吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたアキトだが、思いのほかあっさり立ち上がる。

空中にいたのと鎧を纏っていたのが幸いした。損傷は軽微。問題

ない。

ホッ、と息をついた美咲だが、やおら頬を吊り上げる。

「なかなかやるじゃないの。氣い抜くとやられるわね、マジで」

「相手は【指揮者】^{コンダクター}の異名を持つ傀儡師です。いくら操る人形が一体でも、それが重量級人形^{ヘビードール}だとかかなりの脅威です」

アキトは探るように続けた。

「こういった場合、傀儡師を直接叩くのがセオリーなんですけど」

「却下よ」

即答する主人。「あう……」とその人形が情けない声を上げると、美咲は「だつてさ」「と呟いきつつ、アキトに鷲色の瞳を向けた。「あんなデカブツごときに負けるような人形じゃないんでしょ、あんたは」

ポカンとなるアキト。数秒ほど硬直していた彼は我に返ると、

「はい！」

力強くうなずいて敵を睨む。

「ミサネエ、きますよー！」

アキトの視覚越しに見えるのは、突撃してくるフレースヴェルグ。トラックが突っ込んでくるような感覚に襲われる美咲だが、臆^{おく}することなく立ち向かわせた。

「正面切つてのガチンコ勝負よ！ 敏捷性^{びんしょうせい}ならこつちが上なんだからー！」

初接続の際に、美咲はアキトの性能を臆^{おぼろけ}気ながら理解していた。

パワーと装甲こそ遅れを取っているものの、その他の性能は一枚も二枚もアキトが上。これまで見てきたフレースヴェルグの性能と比較^{ひかく}して出した、美咲の見解^{けんかい}がそれだった。

その判断は間違っていない。むしろ、武器を持たないアキトがフレースヴェルグを倒すには、その拳を全て避けて懐に潜り込み、地道にダメージを蓄積^{ちくせき}させるしかないのだ。

「ぶっ飛ばしなさい、アキト！」

「蹴散らしなさい、フレースヴェルグ！」

磁石のように引き合うアキトとフレーズヴェルグ。互いの距離が
一気に縮まると、騎士と巨人の踊りが始まった。

応酬される拳と拳。互いの立ち位置が目まぐるしく変わり、止ま
らぬ足が地を砕く。鋼の塊が大気を潰し、収斂された一撃が夜気を
穿つ。巻き上げられたアスファルトの破片は一瞬にして砕かれ塵と
なり、生じた摩擦熱が風を熱くする。踊りは、酷く暴力的だった。

均衡はゆっくりと崩れだした。

「クッ！」

二対一から三対一、そして四対一となるのは攻撃の割合だ。

フレーズヴェルグがその特徴たる四つの腕で繰り出す攻撃の二つ
を避けたのち、アキトが一撃を返す。しかしそれは装甲をへこます
だけにとどまり、耐えた巨人がまた二度反撃すると、かわした騎士
の腕か足が繰り出される。

暗黙の了承と言えるそのリズムが、ゆっくり、ゆっくりと崩れだ
したのだ。

「ッ　　！？」

忙しなく腕と指を動かしながら、汗を浮かべた美咲が唇を噛む。

「どういうこと？　　どうしてアキトが速度で押されてるの！？」

決して動きは緩めていない。むしろ速めているはずだ。

なのに、負けている。それまで二発に一発は返せていたのに、い
までは防戦一方だ。

「アキト、あんた手エ抜いてるの！？」

堪らず頭の中で叫ぶと、慌てた声でアキトは否定した。

「ぬ、抜いてませんよ！」

「ならどうして！？　まさかもうへばったとか言わないでしょうね
！！」

「ボクはそんなにヤワじゃありませんよ！　状態はオールグリー
ン。リズムに乗ってますし、電動筋の特性上、いまが最上の状態で
す！　　現に一八〇秒前に比べて12%も加速してます！！」

「じゃあどうしてよ！？」

叫ぶ間にも速度の差は開き、フリースヴェルグの拳が掠るようになっていた。

「まずい マジでまずいわよ!!」

いまはまだ鎧の端を削る程度だが、近い未来に本格的にあたりだす。

一発でも受ければそれで終わりだ。衝撃に足を止められ、あとはサンドバック。いくらなんでもアキトがもたない。

「ッ、それにしても熱い。」

汗を拭う暇もなくひたすら操る美咲は、激しい運動のためか眩暈を覚えていた。

喉が渇く。熱に頭が浮かされる。塵に邪魔されて、ただでさえ見えづらいフリースヴェルグの姿が、ぐにやぐにや揺らいで見える。やばい。避け切れなくなるより先に、傀儡をしくじりそうだ。

「って、いくらなんでも熱すぎない!? これって絶対春の気温じゃないわよ!?!」

「拳の摩擦で周囲の空気が熱を帯びてるんです! それに高速稼働でボク自身の体温も上がってますし、フリースヴェルグさんの超電導モーターの廃熱だって

そこで途切れる声。続いて愕然とした叫びが上がった。

「な、なんですかコレ!? そんな じゃあこれも視覚センサのエラーじゃなくて」

「なに、どうしたの!?!」

「そ、それが……!」

「だからなに! 正確に報告しなさい!」

「は、はい!」

アキトが報告する。美咲は目を見開いた。

「フリースヴェルグの表面温度が三〇〇度!? 内部に至っては五

〇〇!?!」

「現在もなお上昇中です!」

「じゃ、じゃあこの眩暈も熱さも」

『フィードバックでんきう』
『反動と屈気楼です！ 熱で大気が歪んでます！！』

『最近の人形つてそんなになつても大丈夫なの！？』

『大丈夫なわけありませんよおツ！！』

悲鳴染みたアキトの叫び。普通ならとっくに壊れていると言う。

『原因は 原因はなに！？』

『リミッターを外したとしか考えられません！ ボクより大きいフレースヴェルグさんがボクと同等の運動性を得るために、リミッターを外したんです！！』

『！！』

『限界を超えています！ このままじゃ このままじゃ修復不能なまでに壊れちゃいますよツ！！』

ここで最後の要素が顔を見せた。

それは勝利への渴望。崖っぷち立たされた者の、執念だった。

気づいた美咲は戦慄する。リノア、あんたそこまでして勝ちたいの！？ そこまでして一矢報いたいの！？ そこまでしてここで均衡が壊れた。

右の拳の一つがアキトの脇腹を打つ。途端に止まる足。そして同時に右肩に衝撃。

『まつ ず！！』

美咲は即座に判断した。

回避をしようとしたところで意味はないだろう。防御しても二秒も保てず崩される。

だから防御しながら下がる。そして一発をわざと受けて、その衝撃で距離を取る。

その旨をアキトに伝えた美咲は、実行に移した。

胸部を狙った拳がくる。アキトは両腕を重ねて防御体勢を取ると、バックステップ。

恐ろしく重い一撃がアキトを貫き、吹き飛ばした。

「っ？？！」

痺れる両腕。鎧越しにこのダメージなのだから、直に喰らって

たどつなつていたのか。

ぞつとしているとアキトが大地に落ちる。受け身を取らせて立ち上がらせた。

作戦通りとはいえ、胆きもが冷えた。でもこれで距離が

「ミサネエ！」

「遅いですわよ」

「なっ……」

聳そびえ立つ巨人。四つの腕を持つ重量級人形はもうアキトの目の前にいた。

速い。ただでさえ強力な駆動装置アクチュエータのリミッター解除は、鈍重なはずのフレイスヴェルグに爆発的な加速力かそくりよくを与えていたのだ。

「『破城バリスト』」

紡がれる言葉。まるでロケットのように跳んできたフレイスヴェルグの四つの腕が極限きょくげんまで引かれ、

「『四槌ブラウス』！！」

発射。四つの鉄の塊がアキトを打った。

めりこむ拳。鋼の悲鳴。吹き飛ぶ人形。砕ける壁。巻き上がる土煙つちけむり。追う美咲。

フレイスヴェルグの背後、リノアは厳しい目をアキトの空けた建物の大穴へ向けた。

土煙つちけむりでよく見えないが、アキトの動体反応どうたいはんのうはなかった。

「勝ちました、の？」

ゴクリ、とリノアは唾を飲み込み、それは早計そつげいだと自分を戒いましめた。そんなことを考えている暇がありませんたら、フレイスヴェルグをどうにかしませんと。

アキトにバリスト・ブラウスを決めた途端とたん、幻糸が切れてしまったのだ。

リノアは片膝をつき、白煙を上げるフレイスヴェルグに近寄る。

「本当に、酷い有様ですわね……」

沈痛な趣のリノア。フレースヴェルグはスクラップ同然だった。

原因は、リミッター解除による超電導モーターの異常加熱。最後の一撃を放つと同時に、身に纏うスーツは燃え、肌にみたてた樹脂は全てが溶け落ちた。

内部だって、酷いものだ。四つの腕の主駆動装置は半ば融解、熱は大半のケーブルを焼き切り、内部骨格にまで牙を剥いていた。

「これはもう、どうしようもありませんね……」

原因が判明した。中核　ダイヤモンドの炭化。完全に熱にやられてしまっており、むしろこんな状態になるまで、幻糸を受信し続けていたのが奇蹟だった。

「……がんばってくれたんですね。ありがとうございます」

リノアは瞼を下ろす。

思い起こせば、長い付き合いだった。

フレースヴェルグと出会ったのは、リノアが八歳のころ。祖母の工房に忍び込んだときに見つけたのが、その出会い。当時はまだ超電導モーターのように、小型で高出力な駆動装置が存在せず、開発途中で放棄されていたのがフレースヴェルグだった。

手に入れたのは、十三歳の誕生日だ。次の日から本格的な傀儡の訓練を始めるための、人形選別の儀式で、リノアはフレースヴェルグを自分の人形に選んだ。

それからはずっと一緒だった。学校での授業と傀儡の鍛錬。その合間を見計らってはフレースヴェルグを組み立てていた気がする。

諦める、と父からは何度も言われた。フレースヴェルグほどのサイズの人形を操るには、リノアは未熟で幼く、なにより虚弱だった。いま思えば、だからこそフレースヴェルグを選んだのだろう。

リノアが望んでやまない、大きく逞しい体を持つフレースヴェルグ。モヤシのように細く貧弱で、簡単に床に臥すこの体などとは無縁の、鋼の肉体。

けれど自ら動くことができず、父でさえ動かせない巨人が、自分と重なって見えたのだ。

血の滲むような努力をした。がんばりすぎて病院に担ぎ込まれたのも一度や二度ではない。過労のあまり、天国に昇りかけたことだった。あった。

それでも鍛錬を繰り返し、父の制止を振り切って繰り返し、友だちを一人も作らず繰り返し　一八のときに、リノアはフレースヴェルグをも動かす傀儡の術を身につけ、巨人もまた、自力で動ける駆動装置と高性能AIを得た。

そしてケルスス学院在学中に改良のための構成を練り、卒業と同時に完成。その後も、ちよくちよく改良し続けて　現在のレベルにまで至った。

思い出に耽っていたリノアは、フレースヴェルグに微笑みかけた。「本当にありがとう。あなたはわたくしの知る中で、もっとも頑丈で遅い人形でしたわ」

だから、
「もう少しだけ付き合ってくださいな、フレースヴェルグ」
頼んで、リノアは簡易掌握を行う。

駆動装置は主から副へ変更。焼き切れたケーブルは幻糸で補い、潰れたセンサは自身の目と耳を、代わりにする。

残った電力はあと僅か。他の部品だってもう限界。どちらもすぐに役目を終える。

傀儡は、全ての物において平等に効果するわけではない。ただのマネキンよりも自ら動けるロボット。電池の切れたロボットよりも、あるロボットと、実際に動ける状態にある物にこそ、その効果は強く現れるのだ。

だからバッテリー切れ、部品の破損が起これると、傀儡の術の特性上、操ることはできるが、性能はガタ落ちになるのである。

しかし問題はない。すぐに終わる。
「ねえ、そうでしょう？」

視線をフレースヴェルグから外す。
建物からでてくるのはアキトと美咲。騎士と主人は、決着をつけ

るために、走り始めたところだった。

十

フリースヴェルグによって、建物内に吹き飛ばされた直後^{ちまぐし}。

「アキト、大丈夫!？」

フィードバック

反動に痛む胸を押さえながら建物内に飛び込んできた美咲は、仰向けに倒れるアキトに駆け寄ると、危うく悲鳴を上げそうになった。細いながらも筋肉質な上半身に唼^{かぶと}の落ちた顔。銀色の鎧^{かぶと}は兜^{かぶと}諸々(もろもろ)、粉々(こなごな)に砕かれていた。

「まってなさい、すぐにチェックしてあげるから!」
言って幻糸を紡ぐ美咲。

四つの拳に吹き飛ばされた距離は実に一〇〇メートル以上。幻糸は飛ばされる途中で、強制的に切断されていたのだ。

幻糸を作ることに成功した美咲は、すぐさまアキトに接続させる。そして驚いた。

衝撃による基盤^{きばん}保護^{ほし}実行。二〇秒後に再起動。つまりシャツトダウン

ン 気を失っているだけだった。

「それ、だけ……?」

ヘタリ、と美咲は腰を抜かした。

壊れたかと思った。真つ二つになったかと思った。バラバラになつたかと思った。

そう想像しておかしくないほど、凄まじい一撃だったのだ。

「よか、つた……」

はあ??、と大きく吐息をつく、アキトが再起動。パチリと目を開く。

「ここは?」

アキト曰くテレパシーでの問いかけ。どうやら基盤保護のせいで、一時的に発声装置が停止しているようだった。

「あんたの背後にあった建物の中。覚えてる、あんたここまで殴り

飛ばされたのよ』

『覚えてます。すごい一撃でした。でも』

そこでクシャリと歪むアキトの顔。美咲は慌てた。

『ど、どうしたのよ？ どっか痛いの！？』

『はい』

『ど、どこが！？ どこが痛いの！？』

『心が痛いです』

ピタリと止まる美咲。それまでどこに破損があるのか、蒼白の顔で探していた少女の頬がヒクリ、と引き攣った。

『あなた 一度分解してあげようか？』

特にAI辺りを。その後、パソコンに繋げてF5攻撃してあげようか？

脅す美咲。いつもなら慌てて謝るアキトだが、いまにも泣きそうな顔は変わらなかった。

『ホントに、痛いんです。フリースヴェルグさんが、フリースヴェルグさんが』

『フリースヴェルグ……あいつがどうしたの、アキト？』

『……死んでます』

『えっ？』

『フリースヴェルグさん、もう死んでます。死んでるのに、がんばってます』

アキトは上体を起こし、作った穴の向こう 白煙を上げるフリースヴェルグを見た。

『……死んでるのにがんばってる？』

『はい。だからボクはそれに応えなきゃいけません』

涙を腕で拭って立ち上がるアキト。真剣な顔を美咲に向けた。

『ミサネエ』

『な、なに？』

『ボクはこれから『騎兵槍^{ランス}』を使おうと思います。許可をください』
言ってアキトは『騎兵槍^{ランス}』の情報を美咲に見せる。人形の中で開

いたファイルを読んで、美咲は目を見開いた。

『『騎兵槍』って なにこれ！？』

『騎兵槍』。それはアキトの持つもうひとつの術の略称。斥力場で飛翔物を逸らす『盾』（ラテルン）を応用した、攻撃系の術だった。美咲は厳しい視線をアキトに向けた。

『あんだ、どうしてさつき教えなかったのよ！ これがあれば一発じゃないのー！』

『強力過ぎるんですよ！ こんなに使ったら、欠片一つ残らないじゃないですか！！ それにミサネエへの負担だって大きいんですよ！？』

言葉に、美咲は烈火のごとく怒り出した。

「甘ったれたこと言っただけじゃないわよ！！」

アキトの顔を掴むと、自分に近づけ更に怒声を上げる。

「『強力過ぎる』とか『欠片も残らない』とか、そんなこと気にしてるから、あんたいま、壊されかけたのよ！？ そんな情は捨てなさい！ 邪魔な上にあいつらに失礼よ！！」

『し、失礼……？』

「そうよ、なめてるとしか思えないわ！ あいつらは全てを捨てて勝負を挑んできたのよ！ なのにあんたは手を抜く、死に物狂いの相手に手を抜く！ それがただけ相手を侮辱してるのか、あんた気づいてないの！？」

『……………』

「ただじゃ済まないのは百も承知！ フレーズヴェルグが壊れるのも、自分が死ぬのも承知してんのよ、あいつらは！！ あたしだって、腕の一本や二本、失うことを覚悟してんに、あんた何様のつもりよ！？」

そこで美咲は、大きく息を吐く。そして、寂しそうに言った。

「あんだ、優しすぎるわよ。あたしを助けに来たことといい、リノアを説得しようとしたことといい、あんたはホントに優しいわ」

でもね、と続ける。

「それが相手を傷つけることがあるの」

そう。たとえばなにも言わずに去った、あの女のように。

「だから　だからね。使いなさい、『騎兵槍』を。使ってフレースヴェルグを壊して、満足させてあげなさい。あたしのことなんて気にしなくていい。いまはただ、敵を倒すことだけを考えなさい」

「……………はい……………」

「それが本物の『騎士』よ」

「はい」

沈痛なアキトの顔。泣きたいのに泣くのを我慢する、そんな顔をするアキトの頭を美咲は撫でると、ポン、と背を押した。

「ほら、走るわよ。女を待たせる騎士は、騎士失格よ」

うなずくと、モードマリオネットに移行。美咲の声と幻糸を背に、アキトは駆け出した。

十

一直進で向かってくるアキトを睨み、リノアは両手十指を揺らす。腕を引くフレースヴェルグ。歪んだ装甲から擦過音を響かせ、駆動装置より異音を奏でながら、迎撃のために最後の力を振り絞る。

アキトとの距離は一〇〇メートル。ギリギリまで引き付けてバリスト・ブラウスを放つ。

最後のチャンスだ。勝つ方法はそれしかない。フレースヴェルグはもちろんだが、リノア自身も限界なのだ。

無茶な傀儡を行い過ぎた。体はもう疲労困憊で、気を抜けば倒れてしまいそう。

「ですが、倒れるわけにはいきませんわね。自分のためですもの」
呟きながら、幻糸を揺らす。四つの腕の駆動装置の異音が騒音レベルにまで上がった。

アキトが迫る。距離は約八〇メートル。

フレースヴェルグから白煙が上がりだす。リノアはタイミングを

見計らう。

残り六〇メートル。

フリースヴェルグのアイボールセンサーが熱で割れる。リノアの額を汗がったる。

あと四〇メートル。

フリースヴェルグの装甲に亀裂が走る。リノアは動じない。

二〇メートル。

フリースヴェルグの背中が弾け跳ぶ。リノアはそれでも動じない。

一〇メートル。

フリースヴェルグの首からオイルが飛び散る。リノアは唇を噛み締める。

交錯。

フリースヴェルグは咆哮を上げていた。

それは駆動装置の音、装甲の歪む音、部品の割れる音が奏でる滅びの咆哮。

アキトを走らす美咲は、視覚、聴覚センサー越しに、ようやく理解した。

フリースヴェルグさん、もう死んでます。死んでるのに、がんばってます

「ッ……納得。もうとっく、ッ、の昔に壊れてたのね……クッ……」

それでも動く巨人。操るリノアがすごいのか、応じるフリースヴェルグがすごいのか。

「どっちも　すごい、よッ！　負けてらん　ない……わ」
美咲は脂汗を拭くと、意識を集中させる。

踏んだアスファルトの硬さ、髪を乱す風の冷たさ、纏わりつくオイルの匂い、体に漲る力の脈動、近づく巨人と女の姿。

頭が割れそうな頭痛。情報量が多過ぎる。
人間と見間違っかのようなAIを持つアキトが傀儡を必要とする

理由。美咲はようやく理解した。『騎兵槍』フランスの使用に奪われた演算能力を補うために、戦闘能力を維持するために、アキトは傀儡を必要とするのだ。

納得する美咲だが、気休めにもならない。情報の処理分があまりにも多過ぎた。

頭が痛い。頭が痛い。頭が痛い。

本当に痛い。こんな頭痛はじめてだ。痛すぎて吐き気と眩暈がする。ああ、本当に痛い。髪を巻いて、頭皮を裂いて、頭蓋骨をかち割って、脳みそを直接掻き回したい。

ああ、投げ出したい。請け負うんじゃない。こんなに辛いなら投げ出したい。

幻糸を切るか喉を掻っ切ればラクになるかもしれない。

危険な考えが浮かぶ。消さなきゃ。意識が乱れる。集中できない。巨人の領域フィールドに入る。途端、石像のごとく固まっていたフレーズヴエルグが動いた。

鋼の、鉄柱のように太い鋼の腕が放たれる。

それはまるで弓のように。強靱きょうじんにして強力な四つの拳が一斉に迫ってくる。

あたったら死ぬ。避けないと。アキトが死ぬ。避けられない。アキトが壊れる。間に合わない。壊れればラクなる。ムリだ。痛みから解放される。なんて魅力的みりょくてき。

なら、このまま受け入れようか。

そこまで思考が進むと、視界の端にリノアの顔が映った。

「……なんて顔。今にも死にそうなツラじゃない」

苦悶くもんに、度し難い苦悶くもんに耐える顔。

そんなのに負けるの、あたしは？ そんなのにアキトを潰させようと思つたの？

美咲は頬を吊り上げた。

「なめんじゃないわよ」

死んだ魚のような目に燈る炎ともし。それは荒々（あらあら）しく、生

命力に満ちた光。

蘇よみがえった意思の炎は、一瞬にして美咲の全身に飛び火した。

「あたしさあ 負けるのが大っ嫌いなよね!!!」

叫ぶと上げる幻系の質。底の見えない情報量が噴出ふきだし、津波のよう
に押し寄せる。

約束

あの女は約束を守るために家を出た。

どんな約束かは知らない。守れたかどうかさえわからない。

けれど けれどそのために命をかけたのは、わかっている。

その娘たるあたしが、こんな約束一つも守れないでどうするのか
!!!

「天才の娘、舐めんじやないわよオオオオツツツ!!!」

遅れた分を取り戻すため、片っ端から処理を始める美咲。

迫り来る右の拳の一つは首を傾げさせて避け、左の拳の一つを右
手で払い、もう一つの拳は半身をずらして回避。そして最後の右の
拳を跳躍へっぴりょくしてかわした。

『アキト、お膳立てはしてやったわよ!!!』

ガッツポーズを取り、美咲は気を失った。

『アキト、お膳立てはしてやったわよ!!!』

その言葉が終わると戻る身体の自由。宙にいるアキトは、落下の
開始と同時に『騎兵槍ランス』使用のための演算処理えんさんしりを終えた。

「あとは任せてください!」

聞いてはいない。わかっていたが、アキトは敬愛けいあいする主人に感謝
を込めて言った。

そして、術の行使に入る。

「我が左腕に宿るは幸運の四葉。我が右腕に宿りしは回帰かいきの伍葉」

フリースヴェルグさん。あなたはすごい人形です。

落下地点、拳を突き出したまま停止した鋼の巨人を見てアキトは
思う。

皮膚が溶け、駆動装置アクチュエータが壊れ、装甲が割れ、コードが切れ、オイルが漏れ、中核コアが役目を果たさなくなっても、主に従い続けた人形まさに人形の鏡だ。

もしもここに心無い傀儡師がいたら、ただ簡易掌握しているだけだ、と笑うだろう。

たしかに、その通りだ。傀儡は物を操作する術。原型さえ保つていれば、動く。

けれど、ここまで壊れてなお、原型を保ち続けたのはフリースヴェルグの力だ。

装甲に亀裂が入っても内部骨格メインフレームを折らず、その四つの腕も一本足りとて失わなかった。

頑丈だけでは説明できない。偶然だけでは説明できない。

フリースヴェルグは、最後の最後　死して尚なお、主の役に立とうとしたのだ。

アキトは唇を噛む。壊したくはない。この忠実な人形を壊したくはない。

けれど、壊さなければ、リノアとフリースヴェルグを侮辱ぶじやくすることになる。全力で戦いを挑んだ主人と人形を弄ぶもてあそことになる。

それこそが、二人を　ひいては大好きな主人を傷つけることになるのだ。

だから、アキトは己おのが最強の術を以て破壊する。

「還れ、還れ、還れ。全ての存在よ、生まれる前に還れ！」

両眼に紋様もんようが現れる。電子回路にも似たそれは、古き言葉ルーンが織り成す乖離かいりの陣。双眸そつぼうより現れた術式は、頬を通り、首を通り、右肩を通り、右肘を通り、右手に行き着く。

「四つ葉の騎士アキトの名において命ずる！　騎兵槍ランスよ、その力を振るえ！」

大規模術式こうみつていの高密度行使による可視化現象かしかげんしょう。右腕に刻まれた術式の輝きが増し、開いた手のひらに闇が現れる。

フリースヴェルグの頭上へと落下するアキト。その右手が巨人の

頭部に狙いを定め、

リノアが、呟いた。

「 フレース、ヴェルグ? 」

フレースヴェルグが動いた。熱源などなく、簡易掌握もされていない、完全に停止したはずのフレースヴェルグがアキトに顔を向けた。光の無い独眼どくがんを向けるフレースヴェルグ。アキトは驚き 微笑んだ。

おやすみなさい、フレースヴェルグさん。

「不幸の伍葉の騎兵槍 (Der Klee von Unglück lance) ! ! 」

闇が、巨人の体を呑み込んだ。

十

春にしては冷たい風がふく。

夜明けが近いらしい。東の空が明るくなっていった。

「 最後の術、なんでしたの? 」

ポツリ、とそれまで黙っていたリノアが尋ねる。

顔は見せない。背を向けたまま、訊いてきた。

「不幸の伍葉の騎兵槍。ボクは短く『騎兵槍』ランスって呼ぶ『盾』(ラテルン)の応用術式です。斥力場せきりょくばの干渉対象かんしょうたいしょうを分子レベルまで精密化させた術で、その繋がりを逸らす」

「分子レベルで分解した。つまりそういうことですね」

「……はい」

「酷い術ですこと。欠片一つ残さず分解するなんて」

リノアの言葉通り、フレースヴェルグの部品はなにも残っていない。

フレースヴェルグを呑み込んだ闇は、その全てを塵ちりへと還かえしたのだった。

「ごめんなさい」

「謝らないでくださいな。余計惨めになりますだけですわ」

「……ごめんなさい」

アキトがまた謝ると、リノアは肩を竦めた。

「もついいですわ。それより、わたくしはどうなるのですか？」

「どう、とは？」

「決闘に負けたのです。煮るなり焼くなり好きになさい。決闘を挑み、負けた傀儡師の扱いを、あなたなら知っているでしょう」

「全てを奪う、ですよね」

沈黙で肯定するリノア。アキトは、背中では眠る美咲の顔を見てから、言った。

「ボクはなにもいりません。主人　ミサネエも、きっとそう言います」

言葉にリノアは振り向いた。冷たい目で、アキトを睨む。

「生き恥を曝せ、と？　人形一体と未熟な傀儡師にやられ、しかも温情をかけられ生き残った、フィラムの恥晒しとして生きる。」

つまり、そういうことですか？」

「一応、『騎士』ですから。無抵抗のヒト、女性や子供、老人に手は出しません」

それに、とアキト。彼は微笑んで続けた。

「ボクはもう、あなたからフレーズヴェルグさんを奪っちゃいましたから」

「これ以上は、とてもじゃないけどいただけませんよ」

アキトは答え背を向ける。これ以上の会話は、溝を深めるだけ。

そう判断し歩きだすと、

「……あのコは、不器用なコでしたの」

リノアは、語りを始めた。

「第6世代人形はあなたほどではないにしろ、高性能AⅠが搭載されてますの。ですから簡単な動作　歩行や運転、コーヒーを淹れるなどは、傀儡しなくともできますの」

穏やかに、とても穏やかに、

「でもね、あのコはそれすらもできませんでした。歩き出せば三歩も進まず転倒して、車を運転させれば真っ直ぐ走らすこともできず、コーヒーを淹れれば驚くほど不味いものを作りますの」

フレースヴェルグとの思い出を、リノアは語る。

「お父様は呆れてましたわ。『こんな能無し人形を見たことがない』。『そんなデク人形にかまうヒマがあったら、ガンナーを完成させる』とも言いました」

「……………」

「わたくしは悔しかった。時間を作っては、あのコを調整し、プログラムを組みなおしましたの。毎日毎日、寝る間も惜しんであのコを優秀な人形にしようと努力しました」

そんなある日です、とリノアは続ける。

「いつものように庭で自律歩行テストを行うと、今度は歩きもしませんでしたの。どれだけ命令しても、その場でプログラムを組みなおしても、ね。腹を立てたわたくしは、あのコを置いて屋敷に戻りましたの。そのときはもう、廃棄しようと思ったのですが、やはり気になります、陽が落ちたころに迎えに行きましたの。そしてあのコ、動いていましたわ。一歩進み、進路先のタンポポを掘り出して、踏まない場所に埋めなおし、それからようやく次の一歩を進む。それを繰り返して、わたくしの屋敷を目指してましたの」

クスクスとリノアは失笑を漏らした。

「おかしい、ですわよね。花を踏むな、そんな　そんな命令、してません、のに」

鼻詰まりの入りだす声。アキトは止めていた足を進ませる。

「怨　み、ひっく、ますわ、ッ、よ」

嗚咽を含むリノアの言葉は、どこまでも後悔に満ちていた。

「あの、っ、コの……コー、ひっく、ヒー……が　ふえ　飲め、ない、こと……を」

アキトはなにも言わず、その場から去った。

「んあ……」

小さな振動とたしかなぬくもりを感じて、美咲は目を覚ました。

「……ここ、は……?」

「あ、起こしちゃいましたか」

近くであるアキトの声。顔を持ち上げた美咲は、眩しさのあまり目を細める。

「た、太陽?」

「もう朝ですね。今日はいいい天気ですよ??」

「アキト……? あんたどこに って、うわっ!」

そこで完全に目を覚ます。美咲はアキトにおんぶされていることに気づいた。

「ちょ、ちよつと! これどういうこと!? あたしたちは」

「勝ちました」

簡潔な言葉。しかし、それが一番重要な情報だった。

「そう。勝ったんだ、あたしたち」

「はい。いま帰宅途中です」

「そう」

美咲はほっと息をつくくと、クテン、とアキトの肩に頭を預けた。

「なんか、すつごく疲れた……」

「色々とありましたからね」

色々、本当に色々あった。

美琴が消えて、探し回って、電話して、知らなかったことを聞かされて、拉致されて、助けられて、アキトが暴れて、それを止めて、契約して、リノアと闘って って、

「そうだ。アキト、あんた美琴知らない?」

「ミコネエですか? ミサネエを助けに行く前に家に送り届けましたよ」

聞いて、美咲は安堵の息をついた。

「よかった……」

「あっ、ミコネエが起きたときに、家に誰もいないのはまずいですね。ウオルフ、ファルケ」

呼ぶとアキトの隣にくるウオルフと、その背に乗るファルケ。

「どっちら背後を歩いていたらしい二匹に、アキトは命じようとし、

「？ どうしたの？」

「あの、帰っても、いいんですよね？ あの命令は、取り消していいんですよね」

向けてくるのは不安げな顔。美咲は雨の日の命令を思い出した。

「……じゃなきゃ、帰れないじゃないのよ。ほら、とつとつと行かせなさい。命令よ」

「ばあ、と顔を明るくさせるアキト。彼はうれしそうに命令した。

「急いでクドウの家に行つて。ついたら寝てていいから」

ウオルフとファルケもうれしそうに一鳴きすると走り、飛んだ。それを見届けると、二人の間に沈黙が降りた。

「……………」

「……………」

静かな帰宅。白金の脚甲が軽快にアスファルトを叩く中、美咲はふと疑問を思い出した。

「そう言えばあんた、どうしてあのこと知ってたの？」

「あのこと、ですか？」

「あのことよ、あのこと。あたしが七年間ずっと傀儡を続けてきた、つてこと」

「そのことですか??、と喜びの余韻に浸ったままのアキト。さらにと言った。

「ミサネエがいつも使ってる工房、あれカメラがついてるんですよ」
「は？」

「ですから、カメラです。ビデオカメラ。それで撮ったビデオを、定期的に送ってもらってたんです。知りませんでしたか？」

ほとんど隠しカメラですからね??、とアキトは苦笑する。

「ちよ、ちよっと待って? 送ってた、って誰が!？」

「キヨウシロウさんとキョーコさんですよ」

お父さんはいいとして、工藤恭子 あの女狐……!!

おーほっほっほっほっ、と高笑いする恭子の姿が目には浮かび、美咲は頬を痙攣させた。

「お母さんいつも見てましたよ??。『幻糸の精製が甘い』とか『浸透率が低すぎる』とか『それでもあんたはあたしの娘か』とか言ってます」

「……全部小言じゃないの」

「人前だと素直になれないだけですよ。現に、一人でミサネエからの手紙を読んだときは、頬が緩みっぱなしでしたもん」

「ごめん。も一つ質問」

「なんですか?」

「手紙、届いてたの? 恭子さんが燃やしてたんじゃないの?」

ああ、それですか。とアキトは事の詳細を教えてくれた。

「国際便は遺失が多いんですよ。ですから確実に届けるために、ミサネエが手紙を投函したら、そのまま海外に行く と見せかけて国内の私書箱に配達。定期的にキョーコさんが取り出して、中の文面を書き直して、改めて持って行ったんです」

「そ、そんなことできるの?」

「助っ人を頼んだらしいですよ。たしかイヨっていう日本のファミリーのボスに直接頼んだそうです」

伊予 伊予組、伊予雅史。あんの妖怪スケベジイまでグルか

……!!

騙されていたことに、美咲の怒りのボルテージが急上昇し しばんだ。

「……はあ。なんかもー、むなし。あたしゃピエロですか……」
ここでため息をまたひとつ。今日 いや、日付が変わっているので昨日からのゴタゴタは、怒る力さえ奪ったようだ。

ぐったりと体をアキトに預けながら、それにしても、と美咲は漏らした。

「文面を書き写す、ってどうしてそんな面倒なことを……」

「お母さん、そのころには目がだいぶ見えなくなっていましたから」

「」

「発作的に視力が極端に下がるんですよ。見えない時間が長くなってましたから、点字てんじにしてもらってたんです」

途切れる言葉のキャッチボール。

しばらく沈黙が続き、美咲はそれを破るのに、かなりの労力を必要とした。

「ねえ」

「なんですか？」

「あ あの子って、どういう人だった」

アキトの歩みが止まる。しかし、すぐに再開さいかいさせると、ポツリポツリと語り始めた。

「……お母さんは、不器用ぶきようなヒトでした。なんでもできるのに、不器用なヒトでした」

「不器用な人？」

「はい。多くの傀儡師が困難とすることをあつさりやったかと思えば、ミサネエへの手紙の返事を書くか書かないかでずっと迷ったり、キョウシロウさんのお葬式そうしきにでなかったのに、骨をお墓に埋葬したって聞くと、その日のうちに飛んで帰る。 そんなヒトでした」

新たな事実じつじに美咲は啞然あぜんとし、やがて擦れた声かすで呟いた。

「 どうして」

ぎゅっ、とアキトの肩を掴んで、続ける。

「どうしてそんなことで迷うのよ、どうしてそんなくだらしないことするのよ……」

堤防ていぼうに亀裂が入る。

「悩んだったら書けばいいじゃない……悲しいなら帰ってくればいいじゃない！ どうしてそんなことがわからなかったのよ！！」

「約束、があったからでしょうね」

アキトがポツリと言う。

「約束を守ることができなくて、とんでもなく遅れてしまうことがわかってて、どんな顔をして会えばいいかわからなかったんでしょね」

約束。恭子も言っていた。約束があると。

「あんた、知ってるの!？」

お願いします、ミサ姉さま!

「知ってますよ」

誰が姉さまか!!

「教えて! いえ、教えなさい!! あの女が守ろうとした約束ってなに!? あの女がそこまでして守ろうとした約束ってなんなの!?! それは守れたの!?!」

そうじゃなくて、どうして『姉』なのよ!?

「はい。守れましたよ」

ならミサキ姉さま。あっ、ミサネエさまのほづがしっくりきますね

「だからボクはここにいます。お姉ちゃん」

? ミサネエさまはミサネエさまですよ?

「」

フラッシュバックする記憶。幼いころ、はじめて傀儡ができたときのことだ。

なにか一つ願いを叶えてあげると言われ美咲は、

『あたしね、おとーとが欲しいの！』

「そう、そうだったの……」

ポタリ、と落ちる雫。美咲の頬をつたる涙が、アキトの肩を濡らす。

「バカよ、ホント、バカよお……」

あんな子供の口約束を守るために、家を捨てて、亀裂が広がり、

あんな子供の口約束を守るために、大好きな人を捨てて。

七年間も水を溜めた堤防が意味をなさなくなり、

あんな子供の口約束を守るために、命を捨てて。

「不器用すぎるわよ！ あたしも、あの女も！！」

堤防そのものが崩れた。

「はい。ホントですね」

暁に響く嗚咽^{おえつ}。七年分の涙がとめどなく流れ出し、その思いもまた同じく。

「ミサネエ。不出来^{ふたぬ}な弟ですけど、これからもよろしく願いします」

美咲は泣きながらうなずいた。

何度も、何度も。うなずいた。

エピソード

大泣きした後日である。

泣いて泣いて、丸一日泣いて、目を腫らして部屋から出てきた美咲に、アキトはとんでもない事実を口にした。

それをたしかめるため、美咲は街外れの墓地　工藤家の墓に訪れ、呆れた。

「うわ、マジで納骨してる……」

美咲の瞳に映るのは工藤家の墓。眠る死者の名前と日付が刻まれる墓石の隅には、たしかに『工藤美紀恵』の名が記されていた。

「だから言ったじゃないですか。ボクがくる前から合葬してたって」

「フツー、信じないわよ。実の子の許可も取らずにするなんて」
ジト目で睨むと、アキトはオロオロとする。

「えっと……その……」

「まあ、いいわ。当然って言えば、当然だもんね」

ぶいっと、美咲は睨むのをやめた。アキトはほっと胸を撫で下ろすと、墓参り用の花束を二つに別けて飾り、線香とロウソクに火を灯して合掌。

「……銀髪の外人がそうするのって、違和感バリバリよね」

「ハーフです。　戸籍上は、ですけど」

あなた、戸籍までもってるのか。思っていると、クイクイっと袖が引かれた。

「……お姉ちゃん」

「ん、なに？」

「誰、美紀恵って」

母を知らないが故の純粋な質問に、美咲は言葉に詰まった。
わかつていたことだが、キツイ。

唇を噛み締める美咲の代わりに、アキトが口を開いた。

「ミコネエ、ミキエ・クドウさんは」

「待って。あたしが言うわ」

アキトの言葉を遮った美咲は、首を傾げる妹と目線を合わせて言った。

「この人はね、美琴のお母さんよ」

「わたしの？」

「そつ。ずっと昔にいなくなっちゃったんだけどね」

「どうしていなくなったの？」

美咲は顔を固くする。しかし、なんとか笑顔を作った。

「約束を守るためよ」

「約束……」

「そつよ。約束。大切な大切な約束を守るために、がんばった人なの」

「がんばった人……」

「だからね。怒ったり、憎んだりしちゃダメよ？」

あたしみたいに。そう続きそうになった言葉を寸前で呑み込んだ

美咲に、美琴はコクリとうなずいて見せた。

「わかった。しない」

美琴を美咲は抱きしめた。

「……お姉ちゃん？」

「ごめんね。ごめんね。ずっと教えなくてごめんね、美琴」

「お姉ちゃん……泣いてる？」

「ごめん、ごめんね。寂しかったよね。母親の名前も知らなく寂しかったよね……!!」

写真はすべて焼き、傀儡に関する物以外は捨てたため、美琴は母に触れずに育ってきた。

ぎゅっと抱きしめる美咲に、美琴は首を横にふった。

「そんなことない。パパもお姉ちゃんもいた」

「……ありがと。優しいわね、美琴は」

もう一度強く抱きしめてから、美咲は離れた。

アキトから渡されたハンカチで涙を拭くと、がんばって微笑む。

「それじゃ、自己紹介をしてあげて」

「ん」

美琴は墓標に顔を向けると、いつも通りの口調で言う。

「こんにちは、ママ。美琴です。一〇歳です。元気です。ウォルちゃん、フアルちゃん、お姉ちゃんとアキトが、大好きです」

「よくできたわね。いいわよ」

少し照れている美琴の手をアキトが握る。

「ミコネエ。下に古本屋さんがありました。行きませんか？」

「いく」

「じゃあ、一緒に行きましょう」

アキトは美琴と共に美咲の横を抜ける。その際に、

「三〇分。バスがくるまで、漬しておきます」

それだけ言って、アキトは美琴と共に去っていく。

「大きくなったでしょ。最後に会ったのが、七年も前だからね。

見ての通り、顔も性格もお父さん譲りよ」

美咲は笑って、近況報告きんきょうほうごを始めた。

家のこと、学校のこと、美琴のこと、アキトのこと、傀儡くわいのこと、父のこと。

七年分の出来事は僅か三〇分では到底話とつていしきれないが、美咲は要点を掻い摘んでできるだけ話した。

それでも結局はあまり話せないうちに、遠くからアキトが呼んできた。

「ミサネエ??。もうバスがきますよ??!!」

一日三便しかないバスのことを思い出し、美咲は「いま行く」と答えた。

「いめん。もう行くね」

名残惜なごりおししそうに立ち上がる。

「まだまだ言いたいことがあるけど、特にアキトに関しては、『イ

クシルなんて物騒ぶっそうなもんなんでしたの』とか『なんであんなに常識がないの』とか、特盛りであるんだけど……」

美咲はプレゼントのリボンでポニテールにした髪を揺らして言った。

「　　ありがとうございます。あんな約束、守ってくれて」

「み、ミサネエ！　バスきちやいましたよ???!」

「すぐ行くわ！」

短く答えて、美咲は墓前に手を振った。

「それじゃ、またくるね　」

少し恥ずかしそうにためらいをみせてから、

「お母さん」

微笑んで、踵を返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401k/>

貴女に捧げるクローバーハーツ

2010年10月8日15時23分発行